

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第45集

やま なか い せ き
山 中 遺 跡 II

1 9 9 3

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県一宮市は、濃尾平野において産業と文化の中核をなす都市であります。木曾川下流域に位置する一宮市の豊かな水と肥沃な土地は、古くから多くの人々の生活を潤すのに十分な条件を兼ね備えてきました。特に市域西方の萩原町周辺には、山中遺跡をはじめ南木戸遺跡、苗代遺跡、二夕子遺跡、河田遺跡などの県下でも注目に値する数多くの遺跡が所在しており、私たちの祖先の歴史を垣間見ることができます。なかでも、山中遺跡は、弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡ります。

今回の山中遺跡の発掘調査は、県立尾張看護専門学校の増築工事に伴い、その事前事業として行われました。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓、古墳時代後期の円墳、中世村落の北西端と墓域などを検出することができました。本書に掲載しておりますこれらの調査結果が、学術的にも重要なものとして、地域の歴史研究に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後に、この発掘調査を行うにあたって、地元住民の方々をはじめ、関係者および関係諸機関の御理解と御協力をいただきましたことに対して、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成5年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木 鐘三

例 言

1. 本書は、愛知県一宮市萩原町富田方字山中・大和町苧安賀に所在する山中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、愛知県立尾張看護専門学校の増築工事に伴う事前調査として実施し、愛知県衛生部からの愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成3年9月より11月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査は、小塚俊夫(本センター主査、現七宝町立七宝中学校)、石黒立人(同調査研究員)、服部俊之(同調査研究員)があたった。
4. 調査にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県衛生部、愛知県立尾張看護専門学校、愛知県立尾張病院
5. 調査・報告書作成にあたっては次の方々の御協力があった。(順不同・敬称略)
中山勝博、吉川周作、服部恵子、中村明美
6. 火山灰の分析にあたり、大阪市立大学理学部地学教室の屈折率測定装置を使用させて頂いた。
7. 報告書作成に関わる整理作業はもっぱら石黒立人があたり、本センター調査研究補助員伊藤慶子の協力を得た。
8. 本書の執筆は、石黒立人、服部俊之、前田弘子(本センター調査研究補助員)が分担し、第V章第1節は森勇一氏(前本センター課長補佐、現愛知県立明和高等学校)にも執筆して頂いた。全体の編集は、石黒が担当し、各執筆分担箇所は、文末に記した。
9. 調査記録の座標は、国土座標第VII系に準拠する。
10. 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目 次

I. 位置と環境	
1. 地理的環境	(2)
2. 歴史的環境	(8)
II. 調査概要	
1. 経緯	(10)
2. 経過	(10)
III. 遺構	
1. 弥生時代から古墳時代	(12)
2. 古代	(20)
3. 中世	(22)
4. その他	(25)
IV. 遺物	
1. 弥生時代後期から古墳時代初頭	(26)
2. 古墳時代後期	(26)
3. 古代	(27)
4. 中世	(27)
V. 分析・考察	
1. 自然科学的分析	(28)
2. 弥生時代から古墳時代初頭の遺構	(39)
3. 中世の遺構・遺物	(40)
VI. まとめ	

付表

付論

弥生時代墳墓の土器、あるいは〈まつり〉の土器——後期を中心として——

図版

表 目 次

第1表	山中遺跡関連火山灰の岩石記載的性質	(32)
-----	-------------------	------

挿 図 目 次

第1図	濃尾平野の地形分類図	(3)
第2図	濃尾平野地下地質断面図作成地点	(5)
第3図	濃尾平野地下地質断面図 (南-北方向)	(6)
第4図	濃尾平野地下地質断面図 (東-西方向)	(6)
第5図	山中遺跡と周辺の遺跡	(8)
第6図	山中遺跡調査区および遺構配置図	(11)
第7図	条痕紋系土器	(12)
第8図	条痕紋系土器出土状態	(13)
第9図	条痕紋系土器出土分布図	(13)
第10図	条痕紋系土器	(13)
第11図	S Z 01プラン・出土土器分布図	(14)
第12図	S Z 02プラン・出土土器分布図	(15)
第13図	S Z 03プラン・出土土器分布図	(16)
第14図	S Z 03張り出し部南周溝近景	(17)
第15図	S Z 03南溝出土土器垂直分布図	(18)
第16図	S Z 03北東溝出土土器垂直分布図	(19)
第17図	金環出土状態	(20)
第18図	S D 01完掘状態	(20)
第19図	S D 01・S Z 04プラン・出土土器分布図	(21)
第20図	S D 01出土土器垂直分布図	(22)
第21図	中世遺構群プラン・出土土器分布図	(23)
第22図	S E 01土層セクション	(23)
第23図	分析用試料採取位置図	(28)
第24図	山中遺跡地質柱状図および分析試料	

	採取層準	(29)
第25図	山中遺跡砂粒粒度分析結果	(29)
第26図	基盤砂層の粒度分析結果	(29)
第27図	山中遺跡墓域概念図	(39)
第28図	中世遺構変遷図	(41)

図 版 目 次

図版 1	遺構全体図 (上層遺構群)
図版 2	遺構全体図 (下層遺構群)
図版 3	土層断面図 1 S Z 01, 02他
図版 4	土層断面図 2 南壁
図版 5	土層断面図 3 S D 01, 03, 05他
図版 6	土器実測図 1 S Z 01, 02, 03出土遺物
図版 7	土器実測図 2 S Z 03, 04, S D 01他出土遺物
図版 8	土器実測図 3 S K 04, S D 02, 03出土遺物
図版 9	土器実測図 4 S D 05, 06, 09出土遺物
図版 10	土器実測図 5 S D 10, 29他出土遺物
図版 11	調査区全景写真
図版 12	調査区西半部・S Z 01全景写真
図版 13	S Z 02・S Z 03全景写真
図版 14	S Z 03遺物出土状態他写真
図版 15	S Z 03北溝遺物出土状態他写真
図版 16	S D 01遺物出土状態他写真
図版 17	調査区西半部中世遺構群他写真
図版 18	遺物写真: 24, 25, 26, 27, 28
図版 19	遺物写真: 3, 6, 7, 27他
図版 20	遺物写真: 40, 49, 50他
図版 21	遺物写真: 79, 81, 82他
図版 22	火山灰の顕微鏡写真
図版 23	珪藻化石の顕微鏡写真
図版 24	昆虫化石の顕微鏡写真 (1)
図版 25	昆虫化石の顕微鏡写真 (2)

I. 位置と環境

1. 地理的環境

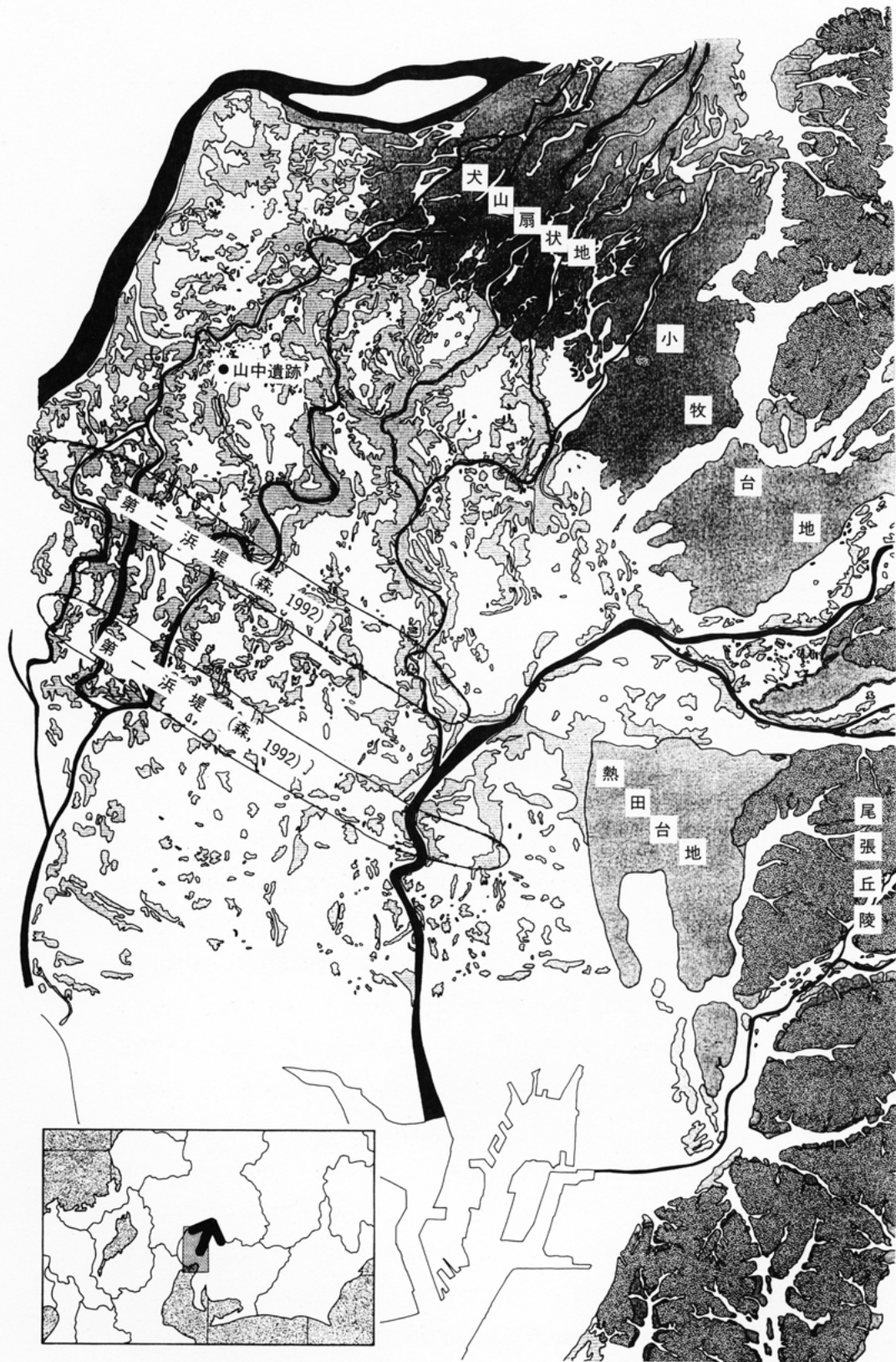
A. 遺跡の立地

1. 地形変遷

濃尾平野は木曾三川水系の河川により形成された沖積平野で、広大で肥沃な土地と豊かな水により人々の生活に恵みを与えてきた。山中遺跡が立地する一宮市は、この濃尾平野のほぼ中央部に位置し、古くから多くの産業と文化の中心地として栄えてきた。この地に人々が生活を始めるまでの濃尾平野の地形変遷を簡単にまとめておく。

今から約2万年前の更新世末の最終氷期ピーク時には、最も海岸線が低下し渥美半島の沖合いほぼ30km付近まで海岸線が低下していたとされる(東海三県地盤沈下調査会、1985)。この時期に河川の下刻作用が進み、現在地下に認められる埋没谷を形成し、その谷の延長に礫が堆積した。この礫層が、いわゆる第一礫層である。一宮市の沖積層よりも下位に存在する犬山扇状地の礫層もこの時期に形成されたものである。その後、気候の温暖化とともに海岸線も上昇してくる。この時期の海面上昇に伴って、第一礫層形成期の埋没谷中に堆積した地層が濃尾層である。濃尾層は主として砂とシルトの互層からなるが、濃尾平野地域ではいままでに海成層は発見されておらず、河口付近の三角州性ないしは沼沢性の堆積物からなると考えられている。かつては、この濃尾層は沖積層下部とされていた(桑原、1968)が、 ^{14}C 年代値が18,000~13,000y. B. P. とやや古い年代を示すことから、沖積層とは区別されるようになってきている(古川、1972)。この後、小海退の時期を経て縄文海進が始まり、沖積層である南陽層の堆積が始まる。縄文海進以降の濃尾平野地域における堆積環境は、海津(1992)が詳しいが、約6000年前に海進のピークを迎え、大垣市南部まで内湾域が侵入したとされる。その後、徐々に海域が後退し、木曾三川が運び込んだ大量の砂が三角州の前置層として速やかに堆積し(沖積上部砂層の形成)、海との境界部に複数の浜堤列を形成(森、1992)しながら陸域を南方へと拡大していった(第1図参照)。こうして人々の生活の基盤としての濃尾平野の土台ができあがったのである。

現在の濃尾平野の微地形は第1図に示すように、旧河道沿いの自然堤防の微高地と後背湿地に代表される。これらの自然堤防の形成時期は、多くのものについては伊藤(1992)の言うように木曾川の流路が確定された「御囲堤」以前で、自然堤防上に先史時代の遺跡が分布していないことから歴史時代になってからと考えられる。この他に、自然堤防以外



第1図 濃尾平野の地形分類図

の微高地が存在していることも明らかで、その1つが縄文海進以降に形成された浜堤である。この浜堤由来の微高地の延長方向は、旧河川の流路方向と直交ないしは斜交する方向であり、第1図に示すように河川性の微高地とは考えにくいもので、旧浜堤の可能性のあるものも、森（1992）の第一・第二浜堤の他にもいくつか存在していると考えられる。これらの地形的な問題点を今後の発掘調査で1つ1つ明らかにすることにより、各時代における人の生活と地形とのつながりを具体的にイメージすることが可能になろう。

まとめてみると、山中遺跡の立地する微高地は、沖積上部砂層上に展開する自然堤防地帯に形成され、水に恵まれた後背湿地部分を利用した稲作が、この付近の遺跡の繁栄を支えていたと考えられる。

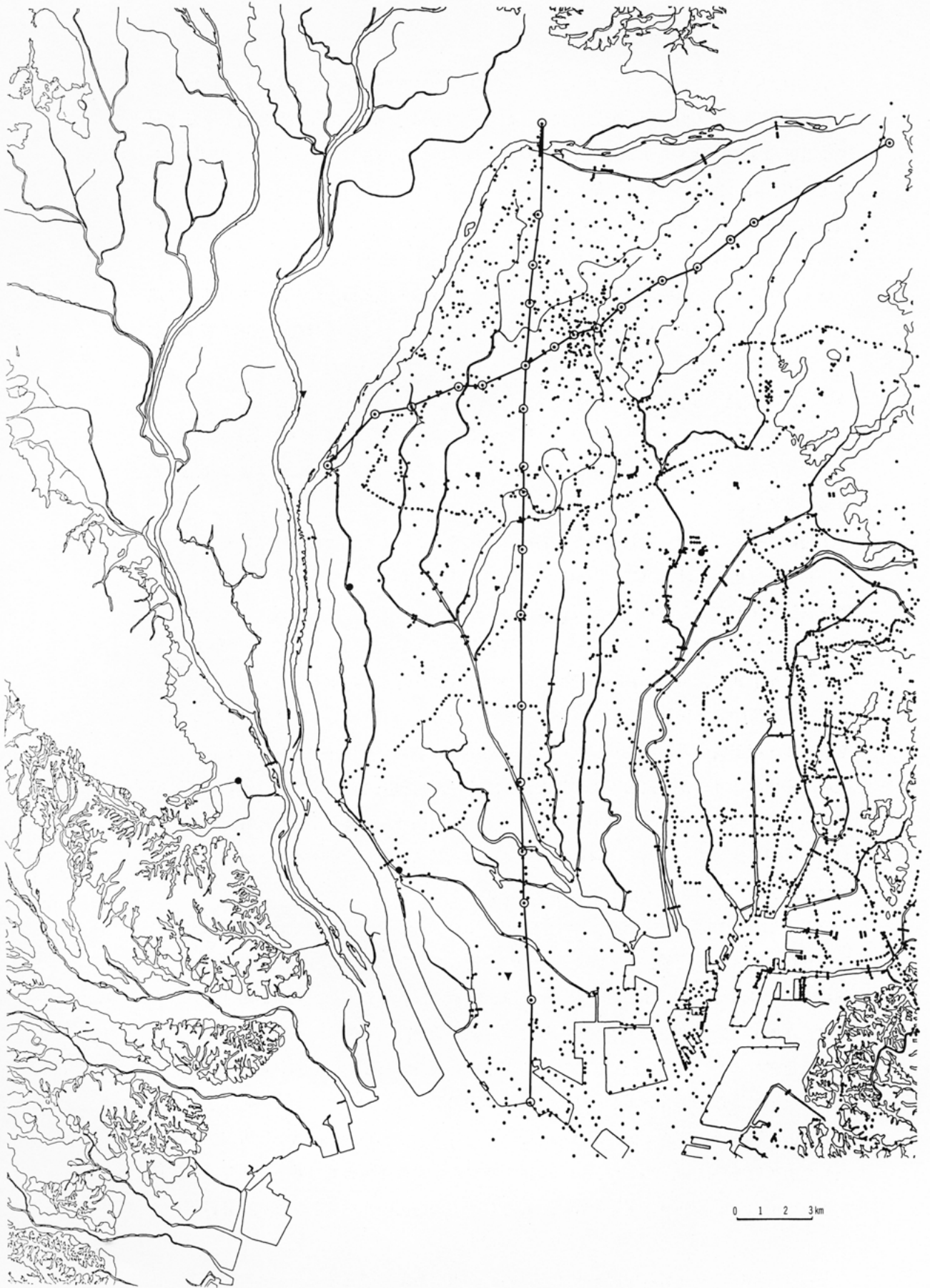
2. 山中遺跡周辺の地下層序

山中遺跡の地下層序を調査するため、発掘調査終了時に発掘調査区内で深掘りトレンチを設け、標高0 m付近までの地層の観察を行った。その結果、第24図に示すような地層の堆積が認められた。

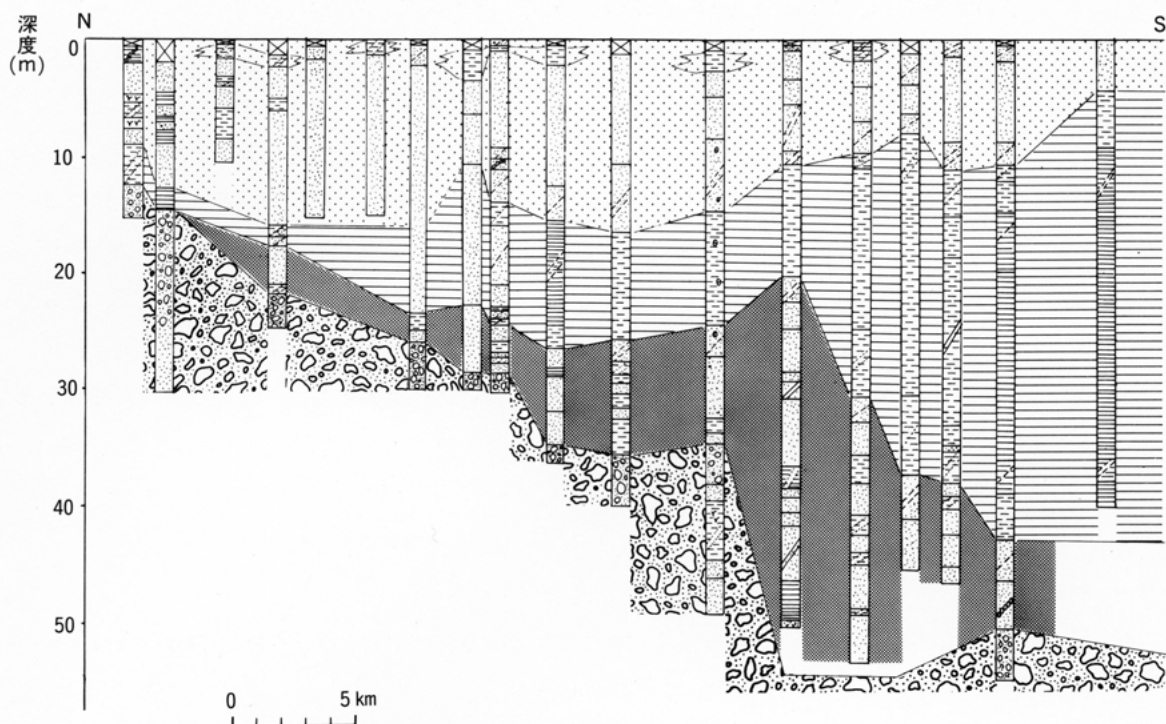
I層は、灰色の中粒～粗粒砂層で、おそらく沖積上部砂層の最上部に相当すると思われる。II層～V層の間は、細粒の堆積物が卓越することから、これより上位の地層は、最上部粘土層に相当するとみられる。II層は、層厚約60cmの暗灰色シルト層で、III層は層厚約30cmの暗黒褐色腐植質シルト層である。IV層とV層は、II・III層と同様に、層厚約60cmの暗灰色シルト層と、層厚約40cmの暗黒褐色腐植質シルト層の順に堆積している。この繰り返しは、肉眼的には灰色のシルト層中に2本の黒色のバンドが入っているようにみえる。V層シルト層下底付近（標高+1.07m）から25cmの位置に、森ほか（1990）の松河戸火山灰層に相当する桃白色の火山灰層が挟まれる。松河戸火山灰層準付近での2層の黒色腐植質シルト層の発達には春日井市町田・勝川遺跡などで観察された黒バンドI・II（森ほか、1990）の關係に類似しており、濃尾平野の沖積面と尾張丘陵の開析谷に沿う沖積面という地形的な位置の違いを越えた堆積環境の類似性がみられる。

VI層より上位の地層は、全般に砂質で、河川における砂の堆積・自然堤防の形成と、一時的な後背湿地化の変遷を示唆する堆積物が卓越している。VI層は、層厚約160cmの灰白色細粒～中粒砂層である。VII層は、層厚約40cm、植物片混じりの灰褐色細粒砂層である。VIII層は、層厚60～65cmの暗灰色中粒～粗粒砂層で微弱なラミナを伴う。IX層は、層厚約20cmの暗灰色細粒のラミナの発達する砂層で水流を伴う河川の堆積物と思われる。X層は、層厚約12cmの黒灰色腐植質シルト層である。この層の堆積年代は、 ^{14}C 年代測定により、 $2,700 \pm 90\text{y. B. P.}$ という測定値が求められた。この時期には一時的に後背湿地的な環境が展開したものと思われる。XI層は、山中遺跡の基盤をなす黄褐色砂質シルト層の下位を構成するシルト混じりの砂層で層厚約70cm、おそらくこの周辺の自然堤防を構成する砂層であろう。

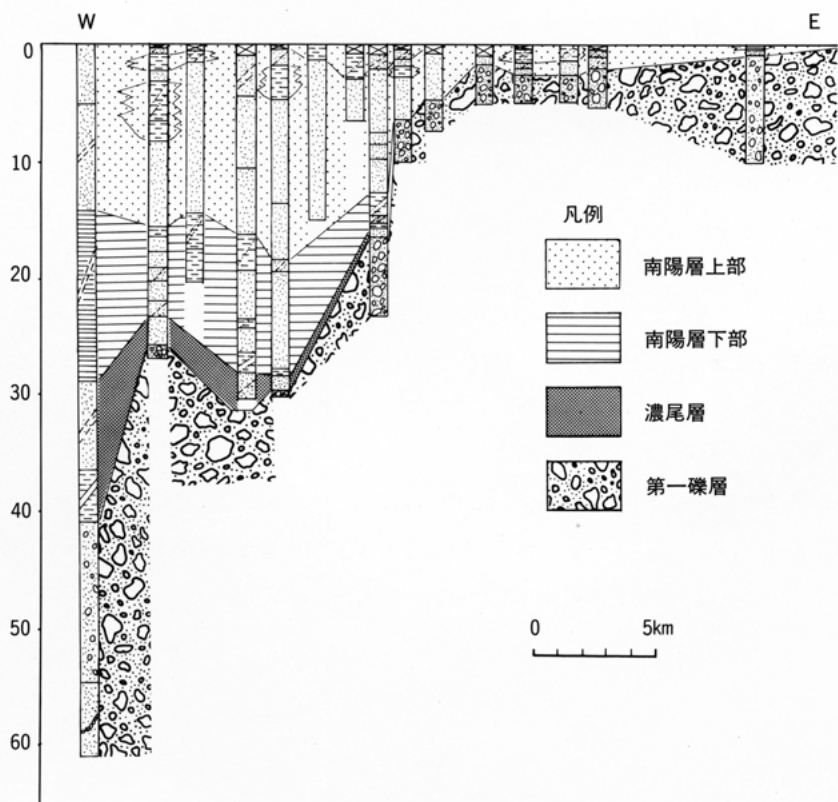
さらに広域的に基盤層の状況を考えるために、山中遺跡の調査地点をもとにしたボーリング柱状図を、第3・4図のように濃尾平野の2つの断面を表すように作成した。その際、



第2図 濃尾平野地下地質断面図作成地点



第3図 濃尾平野地下地質模式断面図 (南-北方向)



第4図 濃尾平野地下地質模式断面図 (東-西方向)

愛知県防災会議地震部会（1982、1983）、東海三県地盤沈下調査会（1985）、社団法人愛知建築士会津島支部（1982）、同一宮支部（1983）、および社団法人土質工学会中部支部（1988）などの調査資料を参考にした。

この地質断面、特に東西方向の断面で見ると、犬山扇状地の礫層（第一礫層に相当）が西側ほど深く潜り込み、山中遺跡周辺では地表下約30m付近に達している。その上位に濃尾層（下部砂泥層）、さらに南陽層下部（中部泥層）が堆積し、南陽層上部（沖積上部砂層）が15m程度発達していることが分かる。また、山中遺跡周辺では、上部砂層の上部、あるいは上位にシルト層ないしは粘土層の堆積が認められ、局地的に最上部粘土層が発達している。山中遺跡での深掘りトレンチにより確認された地層のうち、I層より下層の砂層が沖積上部砂層に、II層以上が最上部粘土層および自然堤防の堆積物に相当すると思われる。

（服部俊之）

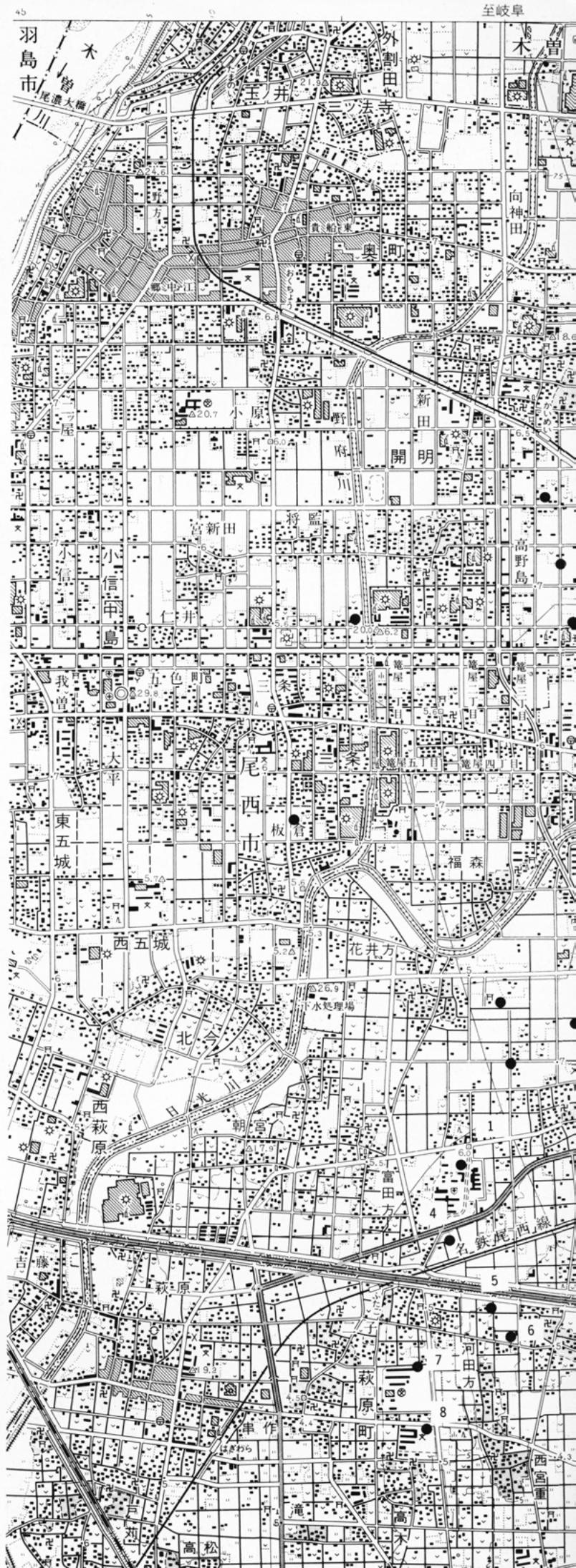
文献

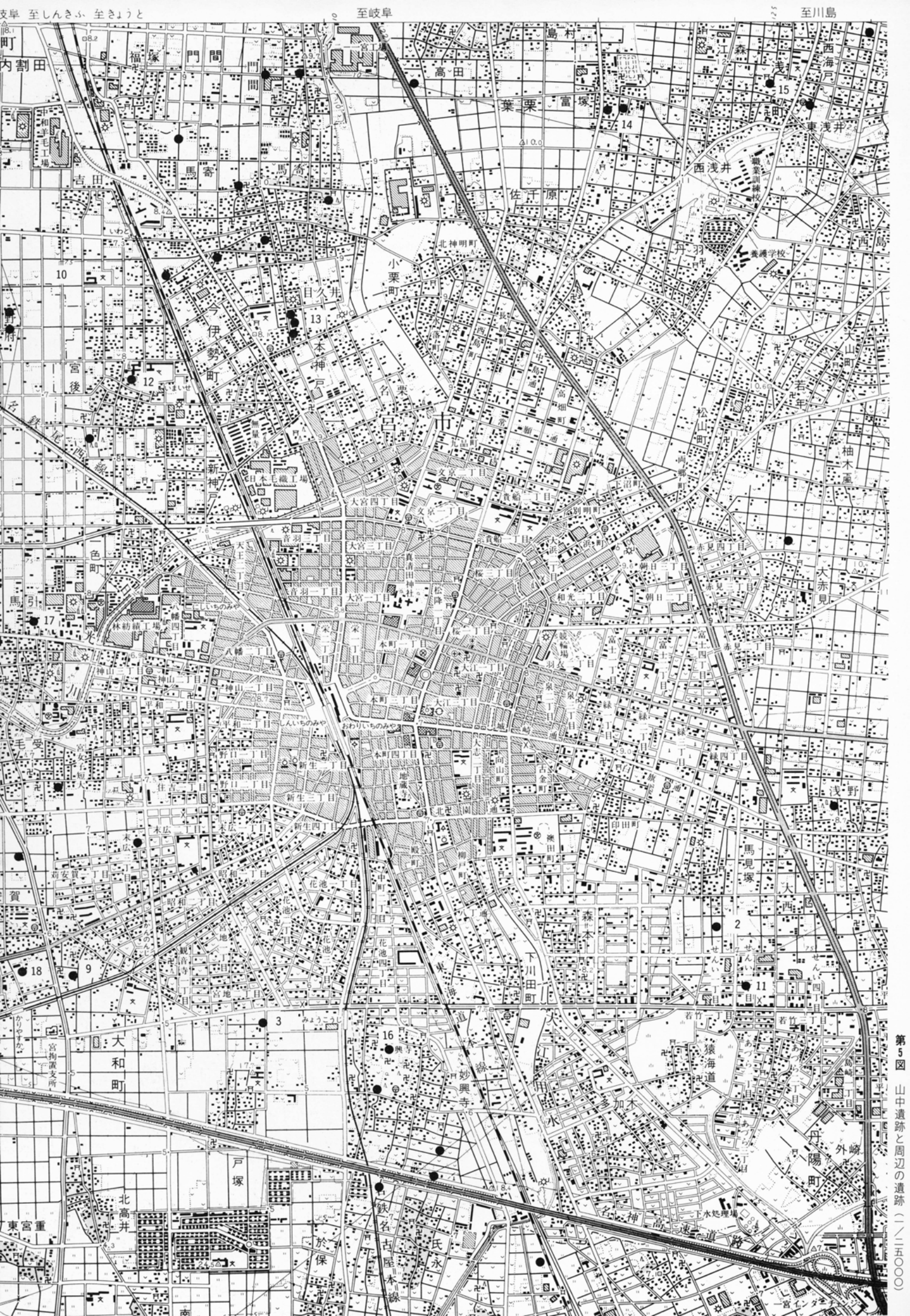
- 愛知県防災会議地震部会（1982）、愛知県の地質断面図、愛知県の地質・地盤（資料編その1尾張部）付図・同解説書、愛知県防災会議地震部会。
- 愛知県防災会議地震部会（1983）、愛知県の地質・地盤、資料編その1「尾張部」、愛知県防災会議地震部会、768P。
- 古川博恭（1972）、濃尾平野の沖積層、地質学論集、No.7、39—59。
- 伊藤隆彦（1992）、山中遺跡、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集、第I章—調査の概要（3.1地理的環境）、6—7。
- 桑原徹（1968）、濃尾盆地と傾動地塊運動、第四紀研究、7、235—247。
- 森勇一（1992）、朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡・自然科学編」、9—40。
- 森勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣（1990）、愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について、第四紀研究、29、17—23。
- 社団法人愛知建築士会津島支部（1982）、海部・津島地盤図、愛知建築士会津島支部、186p。
- 社団法人愛知建築士会一宮支部（1983）、西尾張地盤図、愛知建築士会一宮支部、341P。
- 社団法人土質工学会中部支部（1988）、最新名古屋地盤図、名古屋地盤図出版会、487P。および名古屋地域地質断面図集。
- 東海三県地盤沈下調査会（1985）、濃尾平野の地盤沈下と地下水、名古屋大学出版会、245P。
- 海津正倫（1992）、濃尾平野における縄文・弥生時代の環境変化と朝日遺跡、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡・自然科学編」、41—58。

2. 歴史的環境

山中遺跡周辺には各時代の遺跡が展開している。主要な遺跡は第5図に示したように一宮市の郊外に分布し、市街地については不明な点が多い。

- 1 山中
- 縄文
- 2 馬見塚
- 3 下り松
- 弥生
- 4 雀戸
- 5 南木戸
- 6 苗代
- 7 二夕子
- 8 河田
- 9 北川田
- 10 西上免
- 11 弥勒
- 古墳
- 12 でんやま古墳
- 13 車塚古墳
- 14 富塚古墳
- 15 浅井神社古墳
- 古代・中世
- 16 妙興寺
- 17 法円寺古墓群
- 18 荻安賀城





長草 至しんさぶ 至きうと

至岐阜

至川島

第5図 山中遺跡と周辺の遺跡(二五〇〇)

II. 調査概要

1. 経緯

山中遺跡の調査は、県立尾張病院の建築に伴い昭和34年に初めての調査（第一次）が行われた。その後、同病院の改築に伴い、昭和55年（第二次）・56年（第二次）にも調査が行われた。平成2年度には、大規模な改築が実施されることに伴いその事前調査として当センターが第四次調査を実施した。第四次調査では、これまでの断片的な調査とは異なり広い面積にわたる発掘調査が可能となり、縄文時代末から弥生時代にかけての集落跡や方形周溝墓群の発見という大きな成果をあげた。

今回は第五次調査に当たり、同病院に併設されている県立尾張看護専門学校の増築に伴い、1300㎡を調査した。

2. 経過

発掘調査は、準備作業として平成3年8月下旬に重機掘削による表土剥ぎを実施し、作業員投入による人力掘削は平成3年9月～10月の約2ヶ月間を要した。

表土剥ぎは包含層を傷つけないように極力注意した。だが、南西の張り出し地区から北にかけての一部は削平面をやや深めに設定したために、それ以外の地区の検出面と段差が生じた。

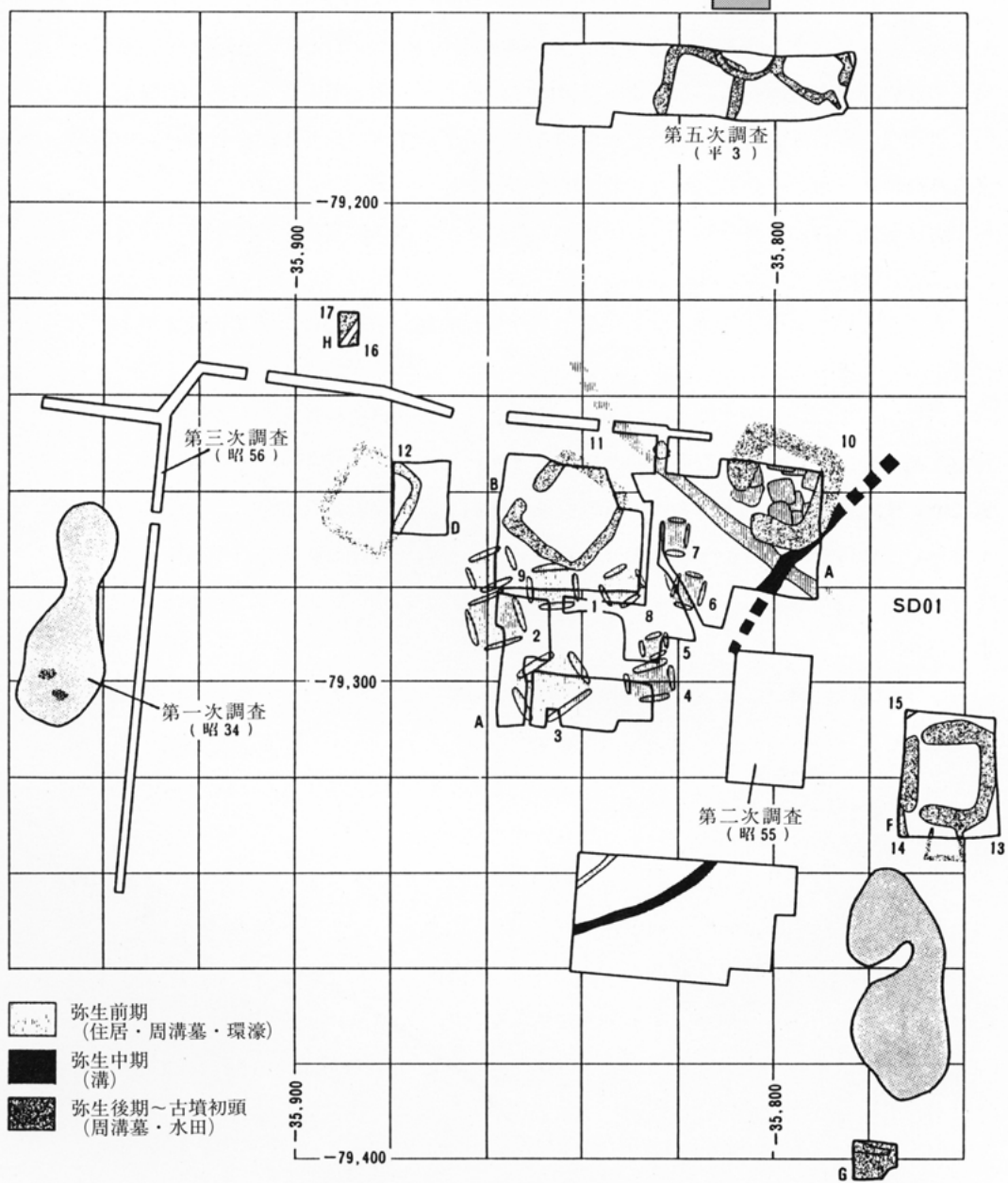
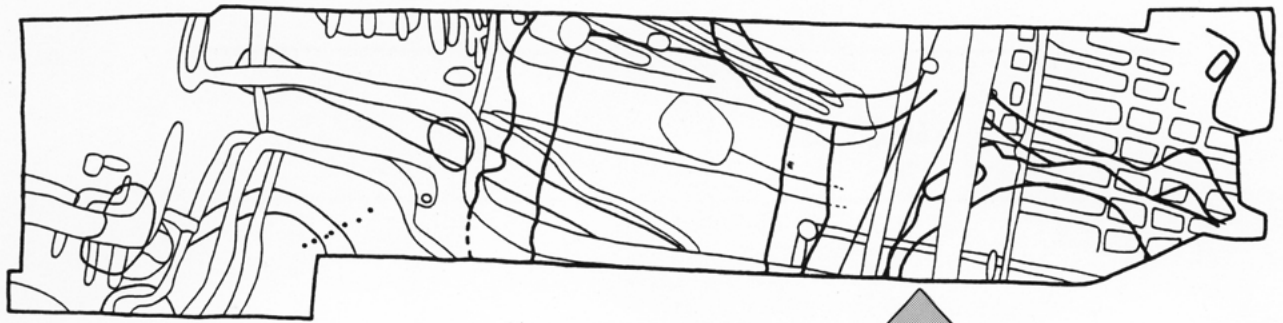
層序は、調査区東半部では水田耕作土直下に黄灰色シルトの基盤面が露呈して包含層の堆積はなく、同じ面で遺構を確認した。調査区西半部では耕作土下に黄灰色シルトではなく褐色シルト層が堆積しており、弥生時代後期以前に遡る包含層の存在が予測された。掘り下げの結果、散乱状態の条痕紋系土器壺破片を検出した。

調査の進行は、9月は順調であったが、10月になって降雨に悩まされ、また地下水の湧出など、遺構の保持には困難な点があった。

遺構実測は、プランが航空測量と一部手測り、土層図は手測りによって行い、また遺物取り上げは遺構の内外を問わずx・y・z測点を実施した。

平成4年度は報告書作成にむけて、記録図面・写真等の整理や遺物の接合・復元・実測・写真撮影等の整理業務を行った。

(石黒立人)



第6図 山中遺跡調査区および遺構配置図

III. 遺 構

1. 弥生時代から古墳時代

A. 弥生時代前期

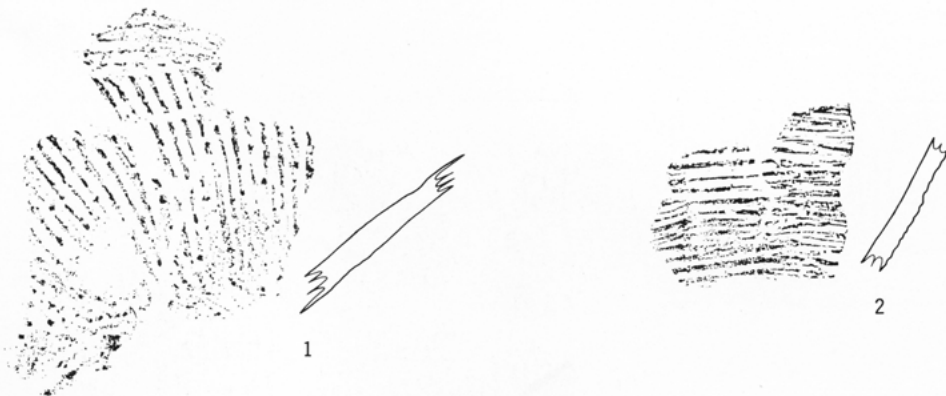
平成2年に実施した第四次調査において、縄文時代末から弥生時代前期にかけての遺構・遺物の発見が行われていたので、ほぼ調査が終了した時点でトレンチをいくつか設定した。環濠の延長にあたと予想された調査区西部では全体に掘り下げを行ない、その結果、条痕紋系土器の壺が散乱した状態で出土した。

出土状態は、特に水平分布・垂直分布ともに何らかの遺構の存在を示すものとはなっておらず、したがって環濠の延長である可能性は低い。

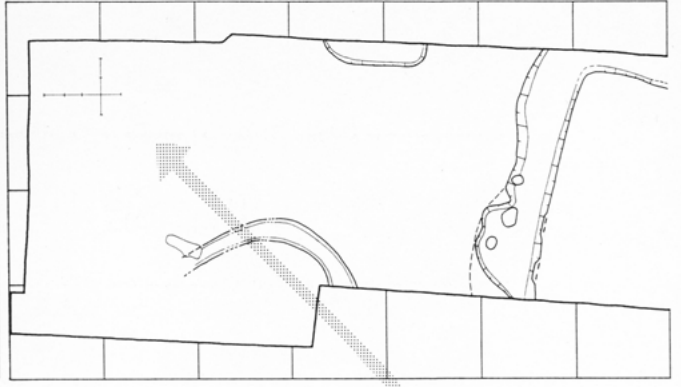
接合する土器片は少なく復元は不可能であった。底部から胴部にかけての破片が2個体分はあるものとおもわれる。

土器片の特徴は、胴部下位が縦方向の二枚貝腹縁条痕、中位が横方向の条痕で、ススが付着していたかのように黒く変色した破片も含まれている。

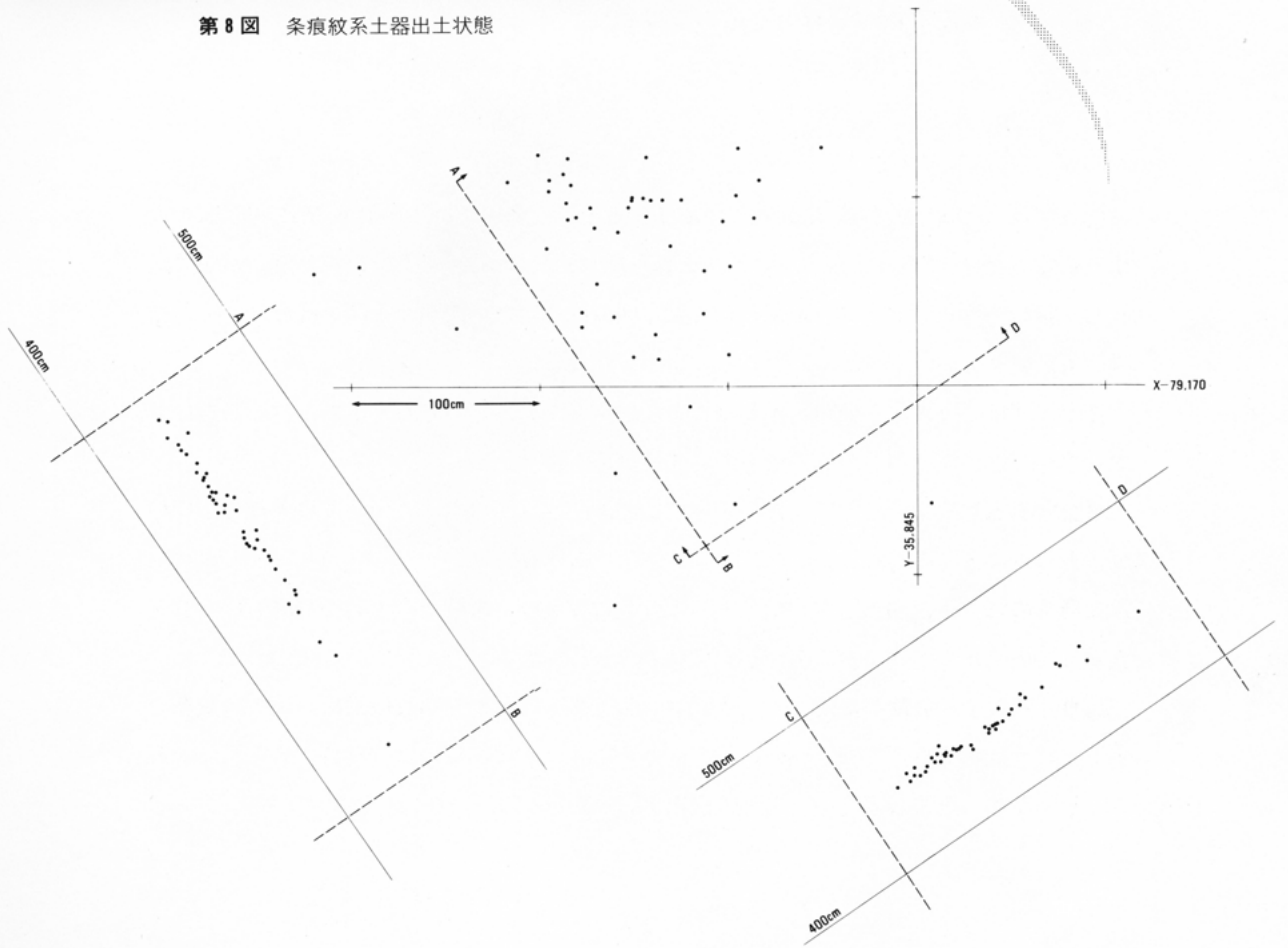
時期を決定する特徴には乏しく、条痕紋系土器第I段階から第II段階にかけての資料であるという他はない。やや下胴部の傾斜が強いこと、胴部中位に横位条痕が施されていることをみると、第II段階である可能性が高い。



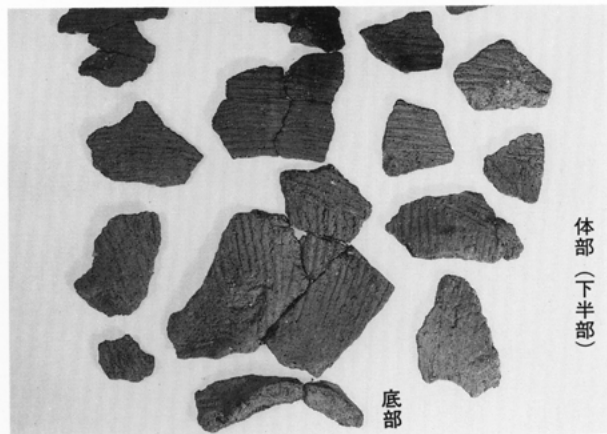
第7図 条痕紋系土器 (1:3)



第8図 条痕紋系土器出土状態



第9図 条痕紋系土器出土分布図 (1:40)



第10図 条痕紋系土器

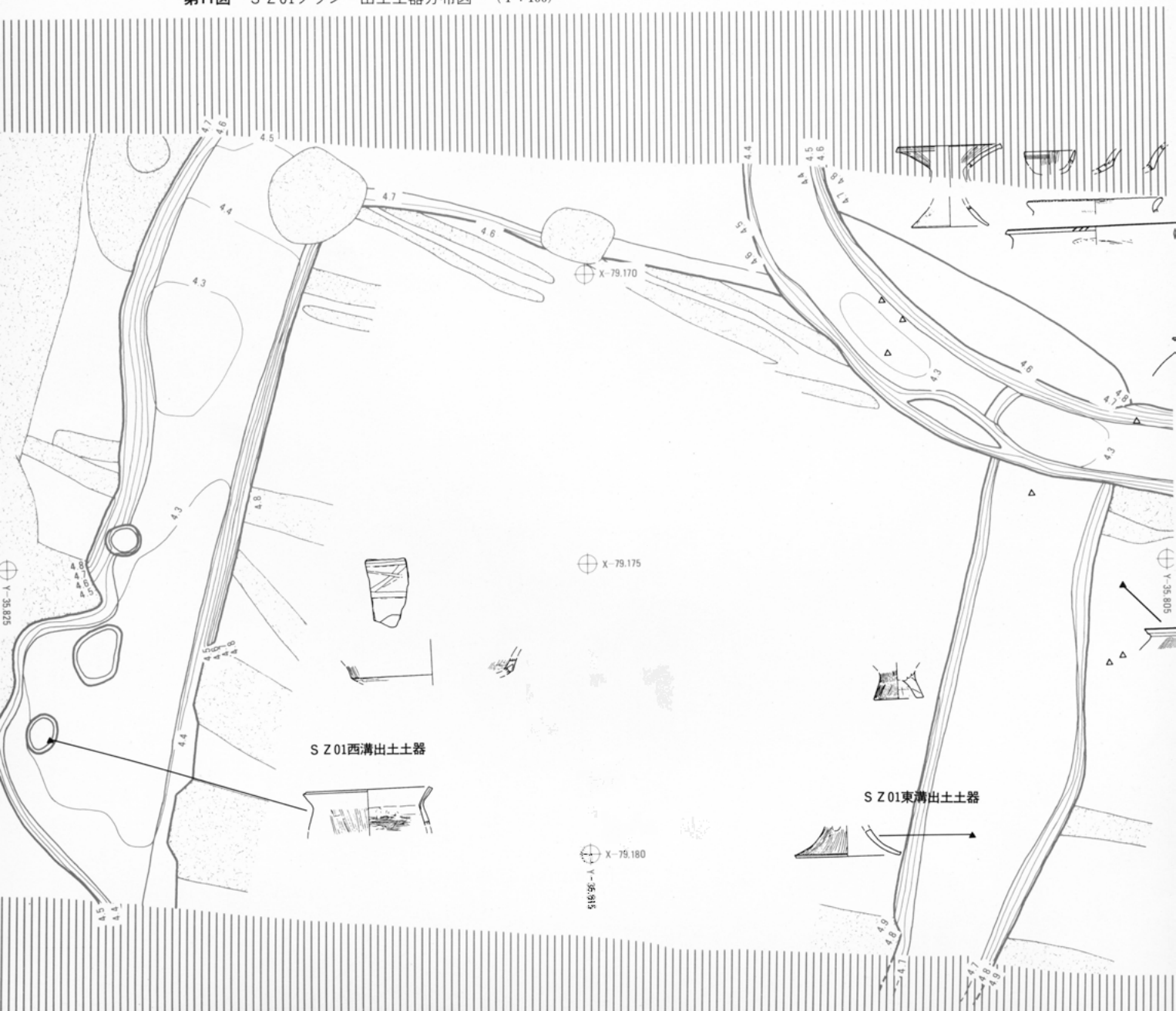
B. 弥生時代後期から古墳時代初頭

S Z 01

調査区のはほぼ中央で検出した方形周溝墓で、南溝は調査区外にある。ブリッジの存在は不明である。墳丘はすでに削平されていて、残存していない。

周溝プランは、内側が直線的で、外側は蛇行している。周溝は、北、東、西という順に深くなるが、西だけは異常に深い印象を受けた。土層セクション（図版3）にもみられるように、埋土最下部には暗灰色シルトブロックと灰褐色細粒砂がほぼ水平に堆積し、この分の厚さは40cmだけ深くなっている。これが整地されたものである可能性は高い。底面にはくぼみが3ヶ所認められた。東西の周溝埋土上層は暗灰色シルトであるが、北溝のみ暗灰色シルト単一である。出土遺物は、土器小片が少量のみで、非常に貧弱である。

第11図 S Z 01プラン・出土土器分布図 (1:100)



S Z 02

プランは方形というにはやや周溝の湾曲が強く、円形周溝墓である可能性もある。そして周溝は、底面が土坑の連続のように一定せず、複数の面からなる。

埋土は大きく上下の2層に分かれる。下層は基盤の黄灰色シルトのブロックを含む明るい灰褐色の堆積層で自然埋没によるものであろう。上層は暗褐色シルトで、下層との間には他の周溝墓には存在しない白色から黄白色の非常に薄い層が認められる。

出土遺物は、下層から山中期新相から欠山期の土器片が散漫ながら出土し、上層からはS字状口縁甕（C類）や須恵器片が出土した。他に鉄鏽の塊も出土し、ソフロンで透写したが鉄器ではなかった。

周溝はS Z 01及びS D 01と重複関係にある。S Z 01との関係では、北溝の埋没後に切り込んでいる。

第12図 S Z 02プラン・出土土器分布図 (1:100)



S Z 03

S Z 03は調査区の東部で検出した。検出面では最初暗褐色シルトが堆積している南溝と北溝の一部しか確認できず、サブトレンチを設けるなどして北溝他の検出を行った。

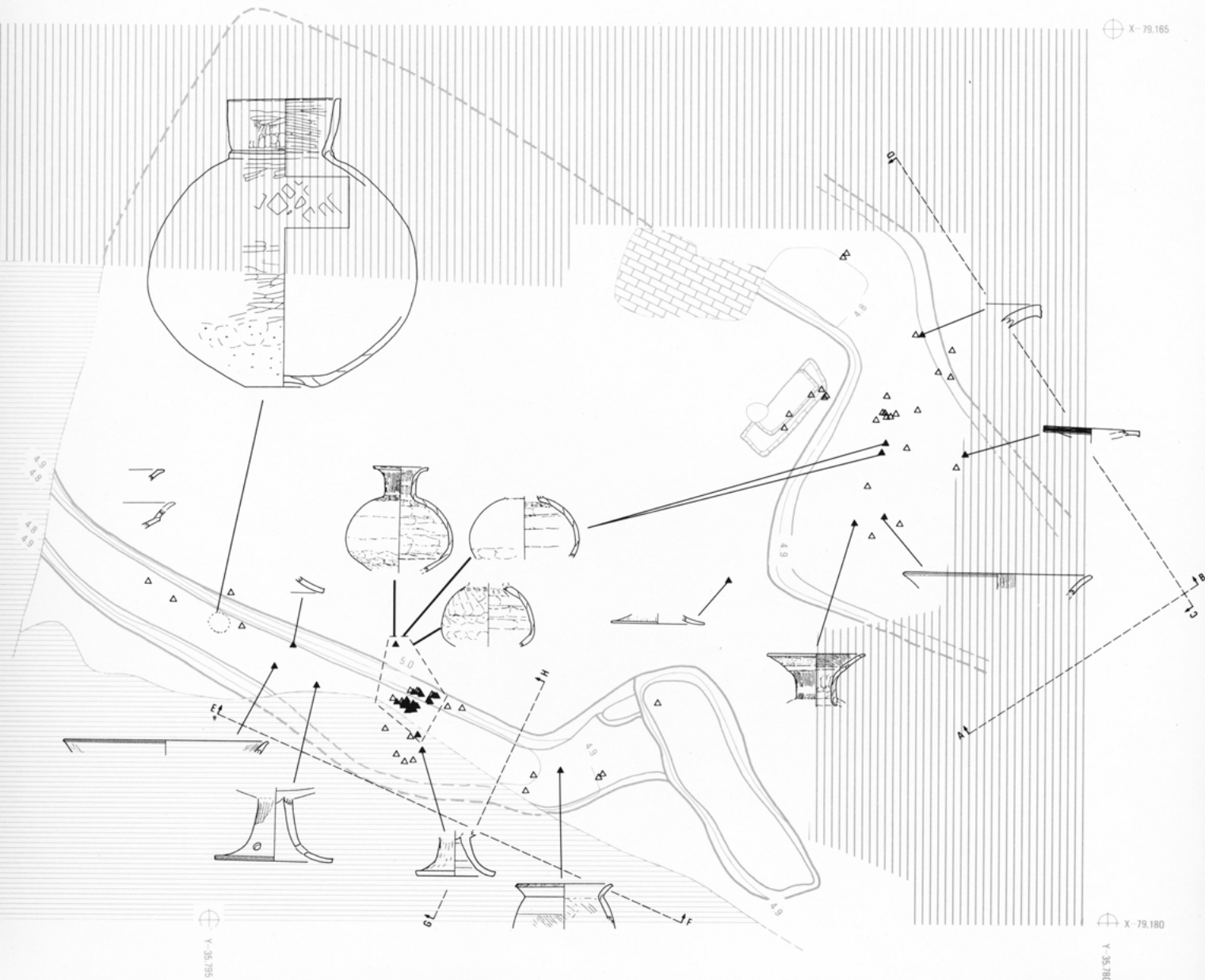
本周溝墓のプランは前方後方形の特徴を有する点で特筆されるものである。

主丘部 西溝がS D 01に切られているため不明であり、北溝の西半部は調査区外となる。また張り出し部東端も調査区外となる。

南溝は一部S Z 04と重複するが、溝上部の削平にとどまり、大きく影響を受けていない。南溝は墳丘側が直線的で、外側はやや蛇行している。北溝は北東コーナー部付近の検出にとどまった。

東溝は、南側部分が南東コーナーから底面の標高を上昇させながらくびれ部にいたり、そして一段落ちるかたちで張り出し部南溝につながる。北側部分は、墳丘側がほぼ直角にまがり、外側はそれに平行することなく広がる。

第13図 S Z 03プラン・出土土器分布図 (1:100)





第14図
SZ03 張り出し部
南周溝近景

溝の堆積土は、南溝では暗褐色シルトが上部にあり、下部に黄灰色細粒砂が堆積し、遺物の多くはこの下部堆積層に含まれていた。

東溝北側部分は、張り出し部北溝との区分が不明確で一体のものになっている。所々暗い部分のある灰褐色シルトを上層として、下層は灰褐色シルト質砂が部分的に炭化物を含んで堆積している。この炭化物はくびれ部から北東コーナーにかけて集中地点を見せることなく散漫に分布していた。東溝北側部分の検出では、この炭化物も一つの指標とした。

遺物は、土器片や礫が底面より10～20cmほど浮いて出土した。

張り出し部 北溝と南溝を検出したが、東端に溝が巡るかどうかは不明である。張り出し部は、旧水田による削平がちょうど一段深くなる所となり、そのため南溝も東端は立ち上がりが弱く、凶化部分で終息するかどうか確証はない。

南溝については調査時から気に掛かっていたことがある。それは、東溝との接続部分がほぼ垂直に立ち上がって段を形成しているため、南溝西部が一種土坑状を呈していることである。それは東溝南側部分がコーナーから浅くなりながらくびれにいたることとも無関係ではない。以上のことからして、張り出し部南溝のありかたは、この溝が後から付け加えられたものである可能性を示しているように思われる。

本周溝墓には墳丘は遺存していなかったが、主体部と思われる土坑を北東コーナー付近で検出した。上部土坑と下部土坑に分かれる二段構成である。木棺直葬の可能性はあるけれども、規模は小さい。内部には暗褐色シルト質砂が堆積し、山中式期の壺片が出土した。

次に、本周溝墓の全体的な形状を見てみると、主丘の中軸線と張り出し部の中軸線が一致せず、しかも、くびれ部中央が主丘東溝の中央ではなく、やや南に寄っている、「変形」となっている。こうした変形の原因としては、①もともとこのような形態が選択された、②本周溝墓がのちに造り替えられた、という二つの可能性を考えることができる。これまでのところ、①については確証がないので、②の可能性を検討してみよう。

土器の出土量は主丘部南溝で最も多く、大形壺24、小形壺25・26が確実に供献されてい

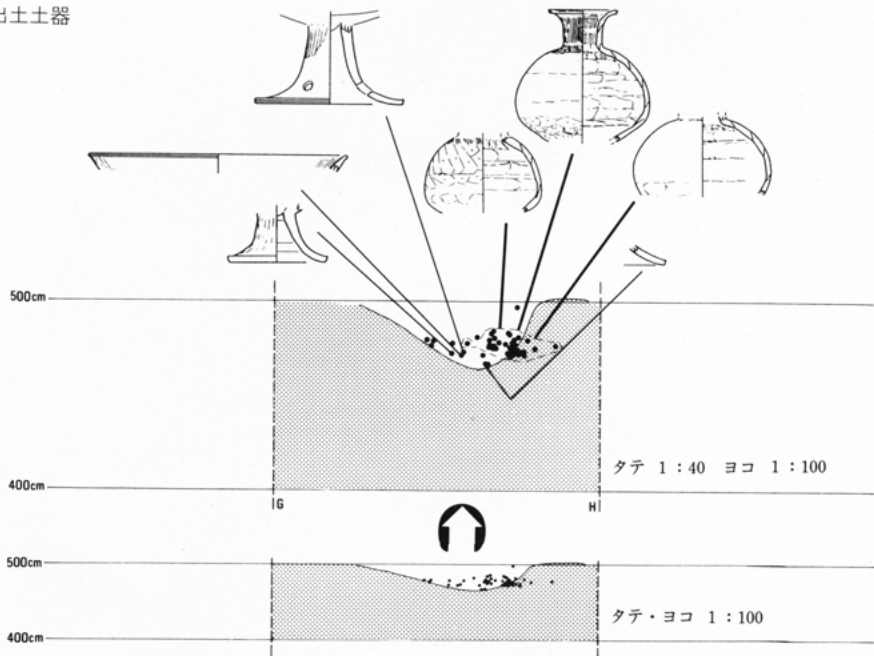
たもの他、破片も比較的多く出土している。

東溝からは、南側では遺物の出土はなかったが、北側部分で散漫ながら出土した。

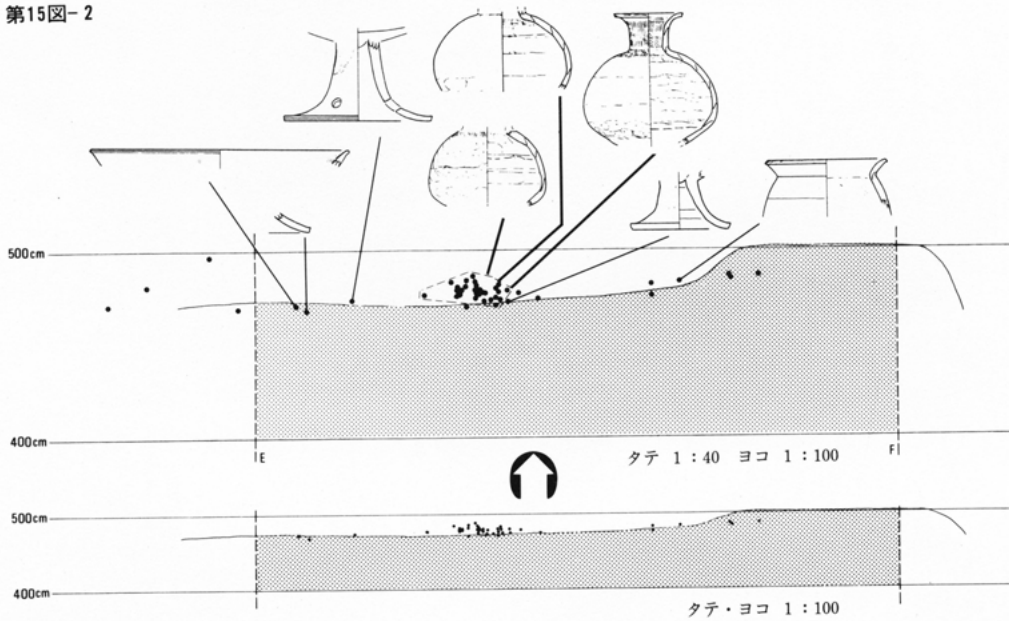
出土土器は山中式期新相から欠山式期初相にかけてのものである。残存状況が比較的よくて形態の復元可能なものは後者に占められているため、調査時の認識では古い一群を混入品とみなし、新しい一群をもって本周溝墓の時期決定資料であるとしていた。

ところが、出土状況を再検討してみると、古い一群はいずれも溝底面に密着するかそれ

第15図-1
S Z 03南溝出土土器
垂直分布図



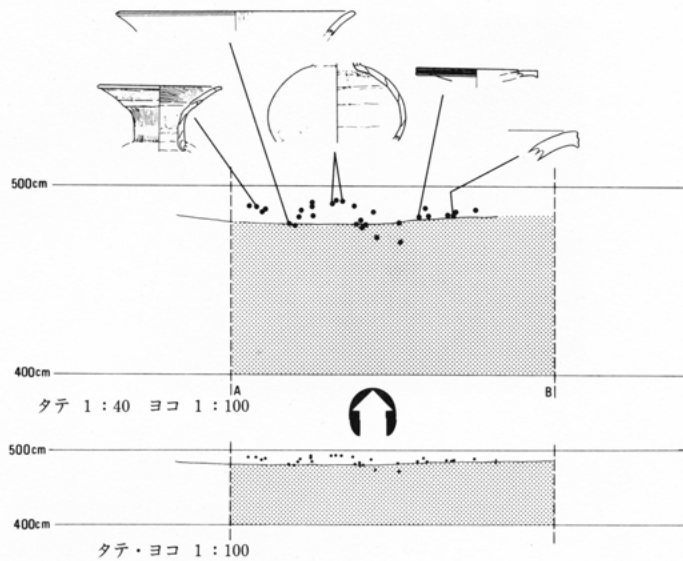
第15図-2



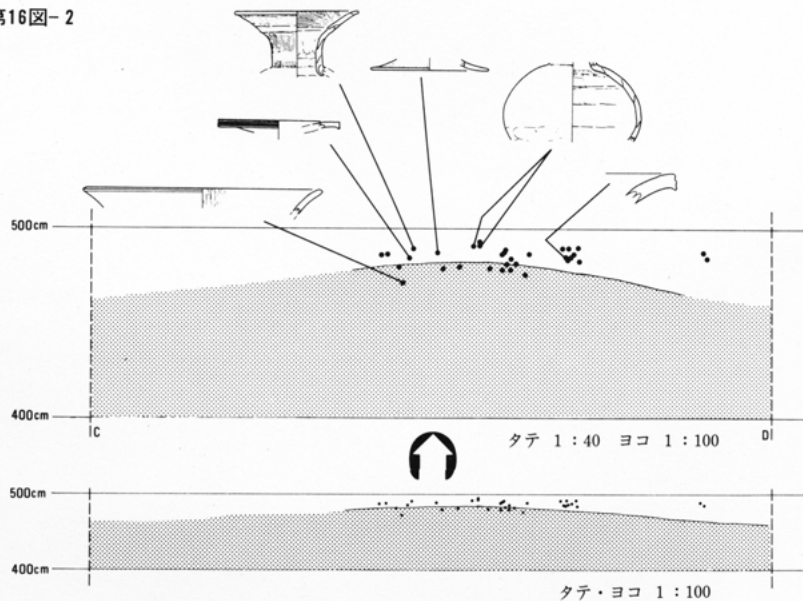
に近いレベルから出土しており、新しい一群はそれより高いレベルでの出土であることがわかった。このことは、あるいは墳丘上に置かれた供献土器が周溝内へ転落する時期の違いということを意味しているのかも知れない。その場合でも完形品やそれに近い大形の破片のみ遅いということでは説明がつかない。また、古い一群が混入品であるとした場合に、いったい何処から流れ込むのか、やはり説明はつかない。新古2群の存在は、それら両群の堆積時期が違うことを示しているものとする。

以上から、本周溝墓は、山中式期新相において一辺の中央近くにブリッジを有するB形として築造されたものが、その後に〈変形〉前方後方形に造り替えられたものとする。

第16図-1 S Z 03北東溝出土土器
垂直分布図



第16図-2



C. 古墳時代後期

S Z 04

方形周溝墓と同じ検出面で確認した。溝の堆積土が方形周溝墓に比べて灰色味が強く、S Z 03南溝との重複分では切りあいが比較的良好に把握できたので、弥生時代後期よりは新しいという予想を得ることができた。

溝を掘り下げてみると、遺物はほとんど出土しなかった。しかし、ただ1点須恵器杯蓋片が溝堆積層から出土したこと、墳丘側の水田耕作土直下から金環が出土したこと、昨年

の調査でも遺構はつかめなかったものの6世紀代の須恵器がある程度出土したことなどの諸点から、この溝が円墳周溝部分の残欠であると認定した。

復元径は約14mである。

第17図
金環出土状態



2. 古 代

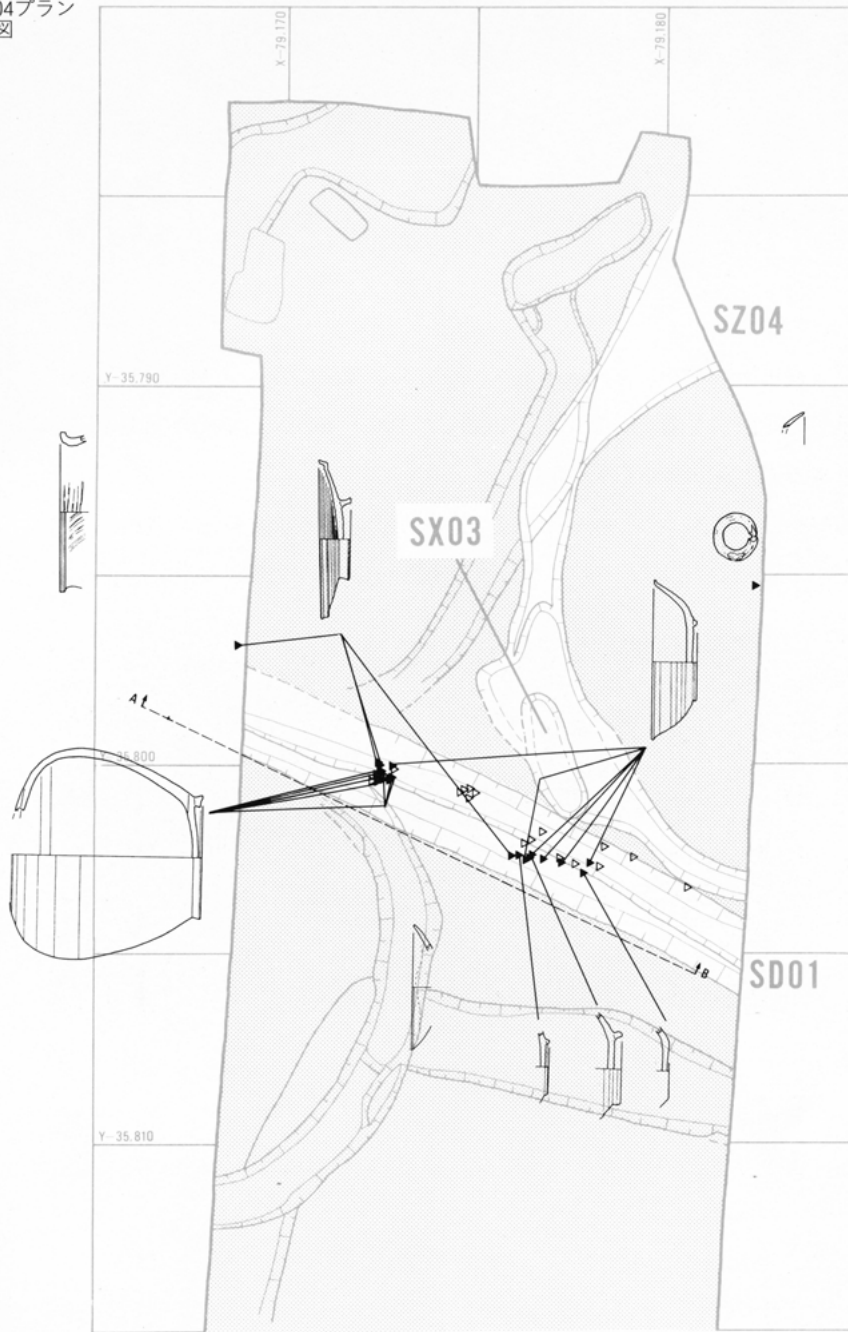
SD01は、ちょうどS Z 02・S Z 03・S Z 04の隙間を縫うように南北に掘削されている。西に中段平坦面を有する2段掘りで、東は急な斜面となっている。溝周辺には同時期のピットはなく、溝の性格は不明である。

出土遺物は、須恵器や灰釉陶器片が中段以上のレベルから出土した。出土状況では須恵器壺は下部にあり、他は上部でレベル差が認められる。

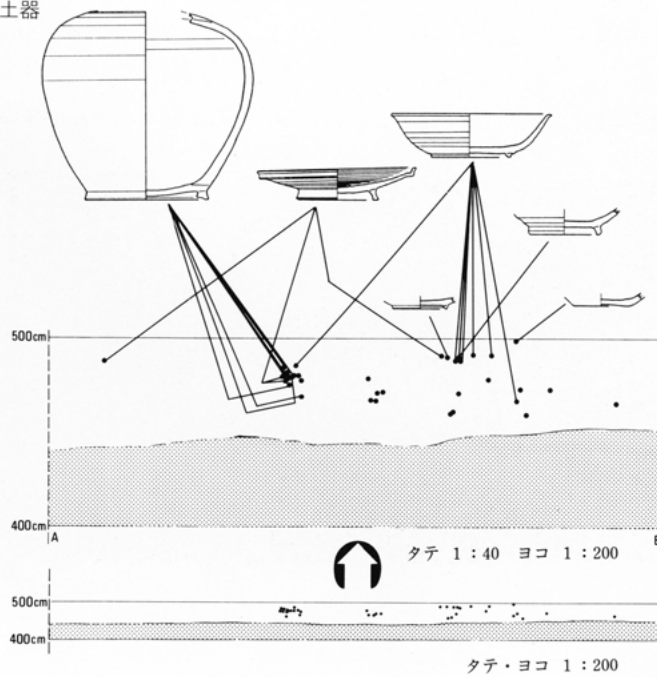
第18図
SD01完掘状態



第19図 S D01・S Z04プラン
出土土器分布図
(1 : 200)



第20図 S D01出土土器
垂直分布図

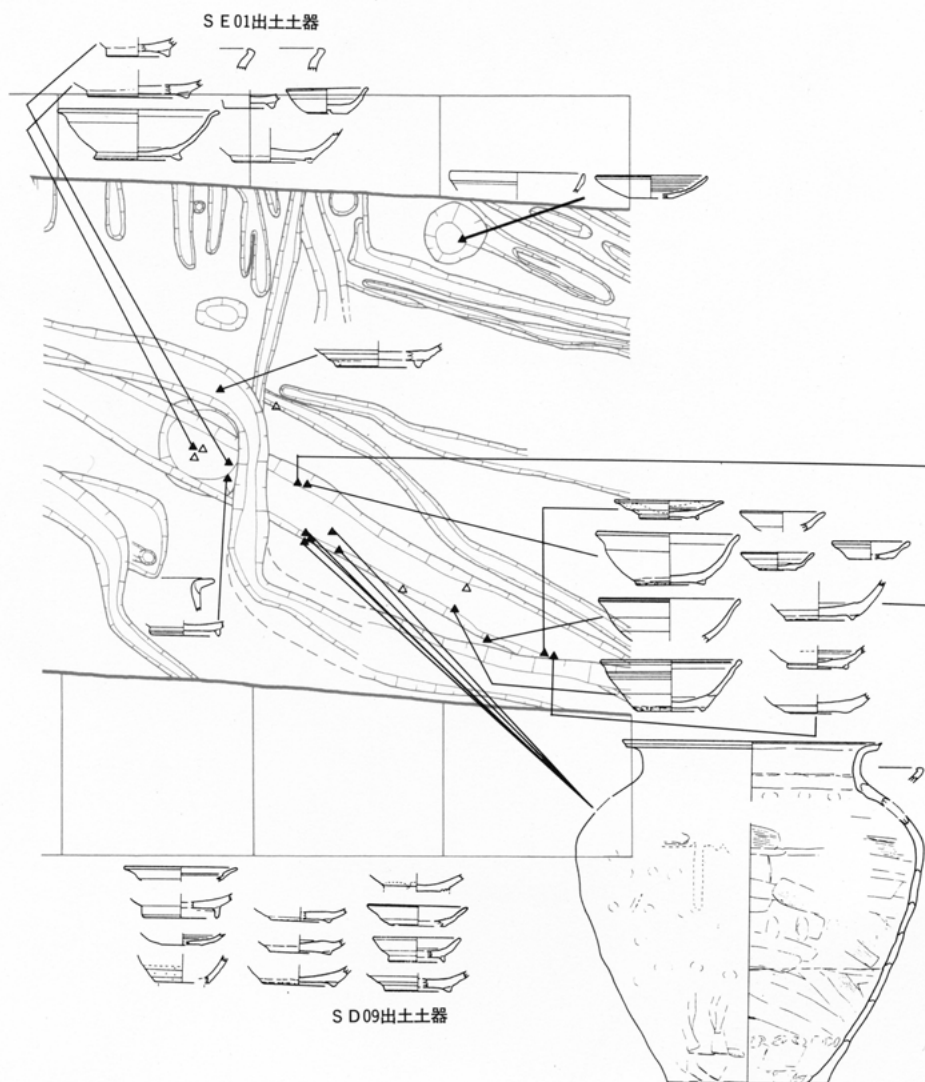


3. 中 世

A. 概 要

中世遺構には、井戸・溝・土坑などがある。遺構の切りあい関係では、SD03とSK03、SD07とSK04、SE01とSE09の三つを確認している。

このうち、SD09とそれにほぼ並行するSD11が、溝のなかでは軸線を異にし、またその出土土器もSK04やSE01に近いので、時期は大きく2時期に区分できる。

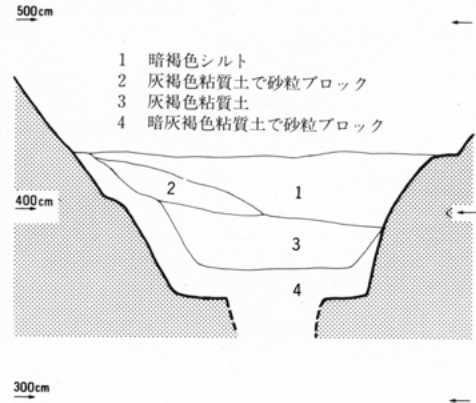


B. 井 戸

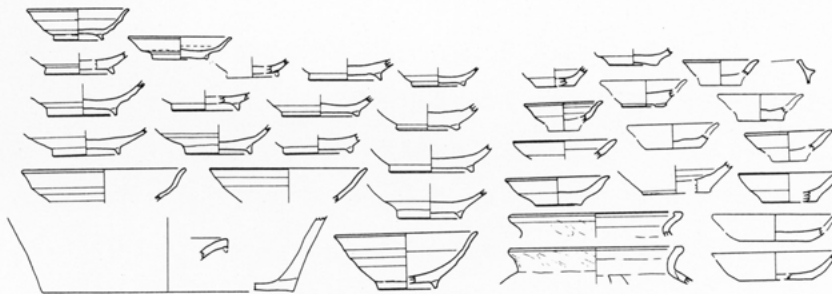
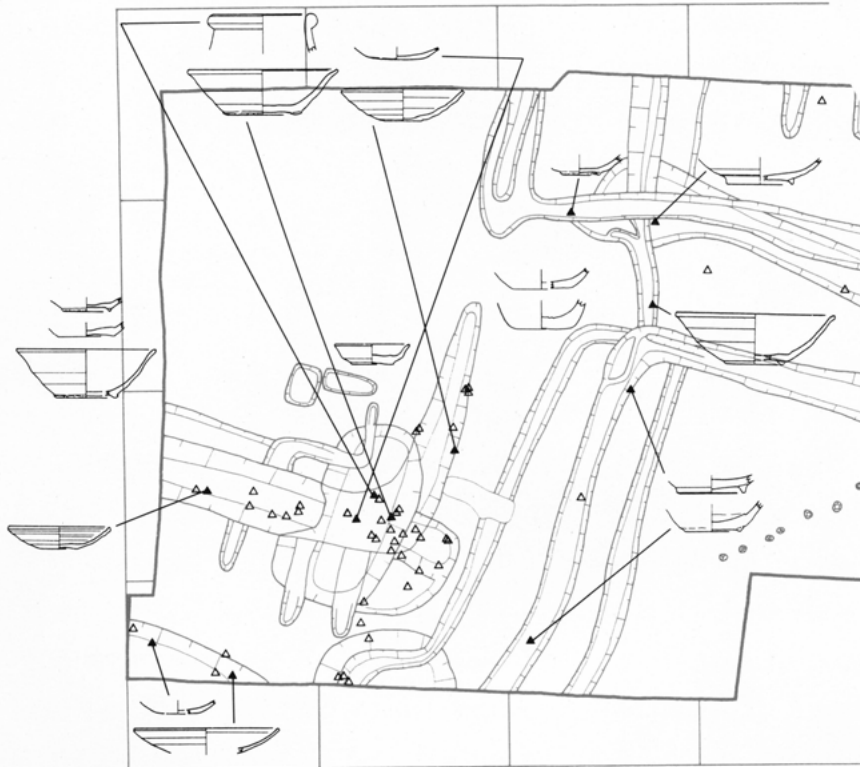
S D09とS D05が交差するところでS E 01を検出した。

井戸枠などは遺存しておらず、土層断面でも特に構造物の痕跡は把握できなかった。掘り形の下部は湧水のために掘りきれなかったので、曲物等についてはわからなかった。人頭大の礫が一点内部から出土した。

第22図 S E01土層セクション (1:40)



第21図 中世遺構群プラン・出土土器分布図 (1:200)



S K 04出土土器

C. 溝

溝の位置と軸線方位の共通性から、I群：SD09・11、II群：02～08・10・22～24・29、III群：SD12～15、IV群：SD16～21、V群：SD25～28、の5群に大きく区分できる。

このうち、溝の断面が逆台形あるいは箱形を呈し安定した規模を有するのはI群とII群の一部である。他の群は仮に削平されていたとしても、規模や深度は著しく劣り、異なる性格を有するものとして区別される。

I群 SD09はSD05に切られている。SD09との交差付近に12世紀後半代の灰釉系陶器や常滑壺の廃棄があった。西端はやや溝幅を広げ土坑状に終息する。土層セクションでは掘り直しされているようだが、面的な広がりには不明である。

SD11は規模が著しく小さいが、SD09にほぼ並行して掘削されているので、同時期と考えられる。

II群 本群に属す溝のうち、SD02・03・04・05・06では上層に14世紀代の遺物を含む灰白色粘土が堆積し、III群とともに最終埋没の様相が認められた。

SD02は調査区の南西隅で検出された。土坑の可能性もある。

SD03はL字状に屈曲する溝で、土層セクションでは掘り直しが確認された。SD12交差部分より西では溝埋土中位から灰釉系陶器最終段階の皿105が南斜面に貼り付くかたちで出土した。コーナー付近には灰白色粘土下部に焼土、炭化物、焼け焦げた木、焼人骨片が散乱していた。

SD12はSD03に接続する溝である。SD03のコーナーに平行して屈曲する。埋土には焼土、炭化物が含まれていた。

SD05はクランク状に屈曲する溝で、西端ではSD03の軸線に一致してL字に折れるだけでなく南に不自然な延長部をもつ。このSD05南北部分はもともとSD05に先行して掘削されていた可能性がある。この部分では灰白色粘土を埋土とするSD04が重複している。土層セクションでは掘り直しを確認している。

SD06は最初灰白色粘土を追うことによって一体の溝として掘り下げたが、南に折れた部分では下部に1条重複していることがわかった。つまり、SD06～08のうち最終段階がSD06上部であり、それ以前に溝の付け替えが行われていたことになる。切りあい関係から、SD08→06下部→07→06上部という順序が想定できる。

SD10はSD05とSD06上部に切られている溝である。やや蛇行するがSD06下部との接続も有り得る。土層セクションでは板塀の基礎である可能性が考えられた。

SD22はSD11を切ってSD05に接続する小規模な溝である。

SD23・24は以上の溝とは異なり、掘り形・輪郭ともやや不明瞭である。SD23；SD22との間に少し間隔をおいて東に伸びる。東部では輪郭が不明瞭となる。SD24はSD22に直交し、SD23に平行する溝である。底部には小溝が2条、一部途切れながら平行して掘削されている。溝自体の感じや埋土は、V群に一致する。

S D29はL字状に屈曲する溝である。

III群 S D03上層の灰白色粘土を埋土とする小溝である。

IV群 平行して掘削されている小溝群である。埋土は黄灰色シルト質砂で、S D24やV群の埋土と共通している。

V群 S D25～28は浅い幅広い溝で、軸線はI群と一致する。S D26の底部では小溝を検出した。東部では終息する。

D. 土 坑

S K01・02はS D03の作る区画内で検出した、埋土が斑状を呈するカクラン土からなる土坑である。おそらく墓であろう。

S K03はS D03コーナー下で検出した4.3m×1.6m、深さ約120cmの大形土坑である。遺物は出土していない。

S K04は焼土・炭化物がラミナをなして流れ込んでいる大形の土坑である。他の遺構に比べて多量といえる灰釉系陶器碗・土師質クロコ小皿が出土した。掘り下げ中に調査区の壁が崩壊して、土層の詳しい観察はできなかった。

S K05・S K09は楕円形の土坑で、埋土は黄灰色シルト質砂である。

S K07は0.8m×0.9m、深さ約1mの土坑である。人頭大の礫が内部から出土した。14世紀代の遺物が出土している。

E. そ の 他

S X04はS D03北肩にあるテラスである。

S D03とS D05西端の南北部分を境として以西は墓域である可能性が高い。そしてS D02・03・05・06によって挟まれた空間は通路であった可能性が高い。S D10・S D06下部とS D05西端の南北部分及びS D03とがつくる空間も同様か。

4. そ の 他

S X01は暗褐色シルトを埋土とする落込みで、出土遺物はない。弥生時代後期の可能性がある。

S X02はカクラン土を埋土とする溝で、弧状に掘られている。土層セクションによれば、古代か中世であろう。

S X03はS Z04の溝に重複する土坑状の遺構である。時期不明。

S A01は打設杭列である。打ち込まれた面が確認できないために時期は不明だが、埋土は灰色粘土であり、中世の可能性はある。

S D30以东の溝群は、近世からの現代の溝である。

(石黒立人)

IV. 遺 物

1. 弥生時代後期から古墳時代初頭

S Z 01 3はカゴ目痕のある壺片。4・5は高杯である。6・7は甕。7は口縁部がヨコナデ、体部外面は弱いハケメ。8はS字状口縁甕。風化して脆い。

S Z 02 9は口縁外面に櫛描直線紋がめぐる小形高杯か、小形壺の口縁部片。10・11は高杯の杯部片。12は器台。13は高杯片。14・15は小形鉢、または小形台付鉢の破片。S D 01から同類である39が出土している。遺構の位置関係ではS Z 02から流入したものであろう。16・17は台付壺。18・19は口縁端部にハケメ刻みが施される甕。18の口唇部はやや丸い。20はS Z 01の8と同一個体であろう。

S Z 03 21・22・30～35は高杯片である。断面だけのものは小片である。30は突き出した端面に凹線が施されている。32は二次的に火熱を受けている。23は口縁部に擬凹線の施された器台片。

24は大形壺。口縁部はやや内湾して、「欠山式」的特徴を有する。頸部にはシャープさを欠いた貼り付け突帯がめぐり、体部上位にはカゴ目痕が認められる。体部は雑なミガキで凹凸がある。下半部にケズリ痕が観察できる。底部は上げ底である。

25から28はほぼ同じつくりの小形壺である。復元できた25は筒状の頸部に外反する口縁部をもち、体部は下位に稜をもつ。外面は、口縁部から頸部直下にかけてハケメが施され、体部はナデ調整されるが接合痕は残したままである。体部稜以下はケズリ痕を残している。底部を欠くが、人為的に打ち欠かれた可能性が高い。26は口縁部と底部を欠く。体部外面はケズリというよりは削痕といった感じである。接合痕を残している。27はかなり大きく開く口縁部をもつ。しかし、成形は雑で、口縁部では内面はハケメ調整されるが外面は粘土を伸ばしたときのシワが消されないままであるし、接合痕もよく残っている。

28は体部片のみである。丸みを帯びた体部で、下位に稜があるかどうかは不明である。

36は口縁部にハケメ刻みの施された甕。内面にはハケメが観察される。

主体部状の土坑から166・167の壺片が出土した。

2. 古墳時代後期

S Z 04 37は須恵器蓋片、38は鉄地に銅をかぶせ鍍金した金環である。

3. 古 代

S D 01 40～43は灰釉陶器。41は漬け掛け、40・42は釉がよく見えない。44～46は須恵器である。44は無高台の杯、45は高盤である。46は長頸壺。47は土師器の甕である。9世紀代に属す。

4. 中 世

S E 01 埋土中位から礫とともに出土した。48は灰釉系陶器の小椀か小皿、49は小皿。50・51は椀。51にはモミガラ痕がある。52・53は鍋である。12世紀中ごろに属す。

S D 02 101・102は乳灰色を呈する最終段階の灰釉系陶器椀。14世紀後半代。

S D 03 103は灰釉系陶器椀。13世紀中ごろ。104は壺。105～107は最終段階の灰釉系陶器椀。14世紀後半。

S D 05 108～110は灰釉陶器。109は段皿。111・112・114～117は灰釉系陶器で、この溝の時期を決める資料である。13世紀代。118は白磁片である。119・120は大窯期。121は須恵器片を用いた加工円盤である。

S D 06 122・123は灰釉系陶器椀。12世紀代

S D 07 いずれも素焼土器である。124は皿、125は壺？ S K 04からの混入である。

S D 09 126・127は須恵器。128～131は灰釉陶器。132～139は灰釉系陶器小皿・椀。141は古代土師器甕、142は素焼ロクロ小皿、143は土師器鍋である。140は常滑壺。この常滑壺は破片となって溝の南斜面から出土した。13世紀代。

S D 10 144は灰釉系陶器椀である。

S D 17 145は糸切り底の須恵器である。

S D 29 146・147は高台部分を加工した円盤である。

S K 02 斜めになって出土した。供献ではなかろう。

S K 03 上層から出土したもので、確実に本土坑に伴うとはいえない。13世紀代。

S K 04 60は須恵器。61は灰釉陶器。62～78は灰釉陶器の終末段階から灰釉系陶器の初期に位置づけられるもので、本土坑が連続堆積を示すことと対応している。11世紀末から12世紀初め。96・97は常滑甕。

素焼ロクロ小皿は、径が小さく底部の厚いものと、径が大きく底部の薄いものがある。高台のつくものはない。ただ、いずれも小破片で、径を確実に復元できるものは少ない。底部外面には回転糸切り痕が残され、一部には板目痕の残されたものもある。98・99は土師器鍋、100は羽釜である。100は混入であろう。

S K 07 58は灰釉系陶器最終段階の椀。14世紀後半代。59は白磁片。

(石黒立人)

V. 分析・考察

1. 自然科学的分析

A. 遺跡基盤砂層の粒度分析

1. はじめに

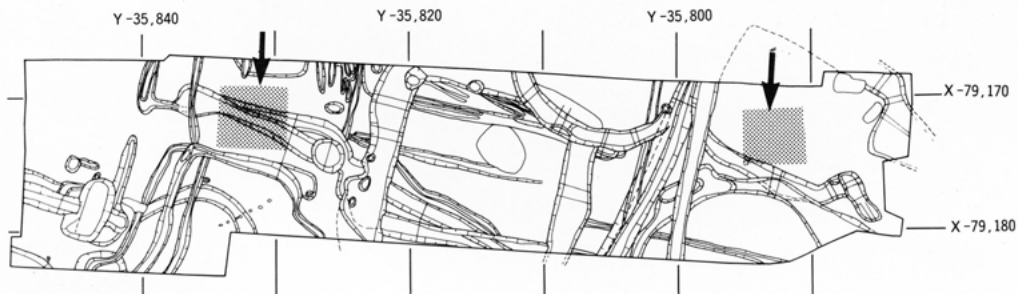
濃尾平野の地下には、木曾三川水系の河川が運搬してきた礫や砂、泥などの堆積物が厚く堆積している。これらの堆積環境としては、扇状地、三角州、自然堤防など様々な形態が想定される。遺跡の立地を考えるうえで、堆積環境を復元することは非常に重要なことである。森ほか（1990）は、遺跡基盤砂層の砂層の粒度分析を行い、堆積環境の復元を試みその有効性を報告している。ここでは、粒度分析により山中遺跡およびその周辺の堆積環境の復元を試みた。

2. 分析試料の層準

分析に用いた試料は地質柱状図（第24図）の試料番号S-1、2の2層準および、関連する遺跡や砂の分布地から採取した試料である。山中遺跡では、試料S-1、2のさらに下位にも1.5mほどの層厚の砂層が存在したが、トレンチ壁面の崩壊という危険を伴ったため試料の採取ができなかった。試料S-1は、標高+2.37m～+3.0mに位置し、ラミナが発達した暗灰色中粒砂層から、また、試料S-2は、標高+2.17m～+2.37mに位置し、ラミナが発達した暗灰色細粒砂層から採取した。

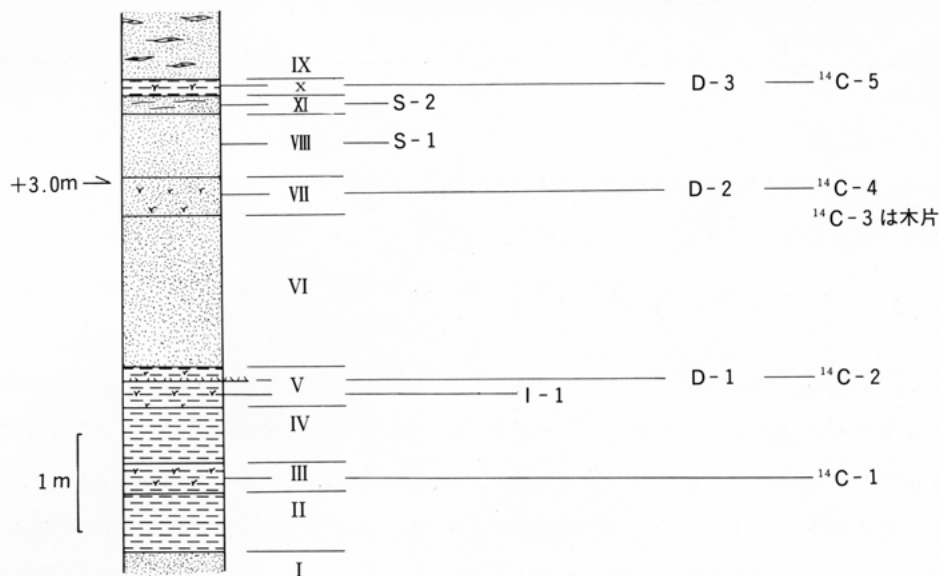
3. 分析結果と砂の堆積環境

試料S-1は最大粒径1mm以下で、細粒砂（ $\frac{1}{4}\sim\frac{1}{8}$ mm）が試料全体の60%を超え、比較

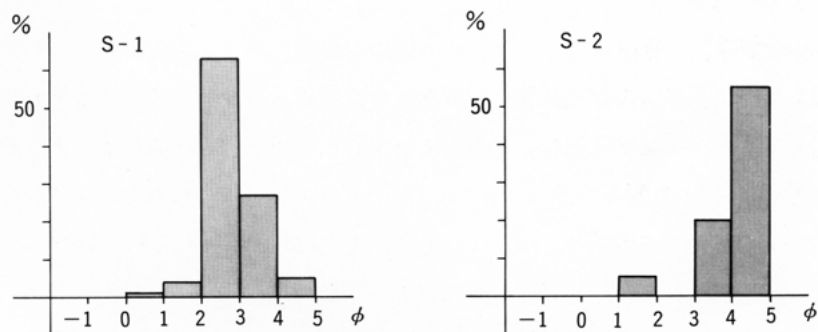


第23図 分析用試料採取位置図

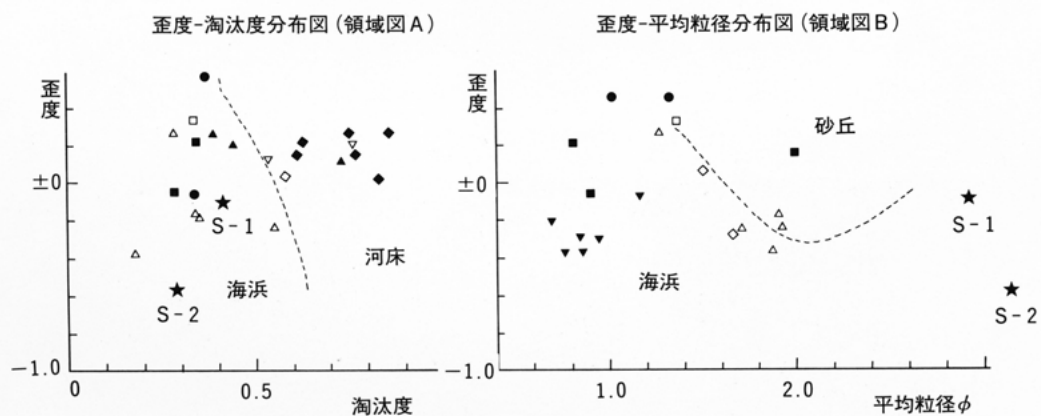
地質柱状図	層相	粒度分析 試料番号	昆虫化石 試料番号	珪藻化石 試料番号	¹⁴ C年代測定 試料番号
-------	----	--------------	--------------	--------------	-----------------------------



第24図 山中遺跡地質柱状図および分析試料採取層準



第25図 山中遺跡 (91区) 砂粒粒度分析結果



第26図 基盤砂層の粒度分析結果 (森 (1992) に加筆)
図中の破線は Friedman (1961) の境界を示す。

的淘汰の良い砂層である。中央粒径2.94、平均粒径2.90、淘汰度0.42、歪度-0.11を示す。試料S-2は、極細粒砂 ($\frac{1}{8} \sim \frac{1}{6}$ mm) が試料全体の40%に達する淘汰の良い砂層といえよう。中央粒径4.01、平均粒径3.84、淘汰度0.29、歪度-0.58を示す。両試料は Friedman (1961) の領域図A・B (第26図) の海浜砂の領域に属する。濃尾平野内陸部における海浜砂については、森 (1992) が、西春日井郡清洲町ほかの朝日遺跡周辺、稲沢市の堀之内花ノ木遺跡、同市一色長畑遺跡の海浜砂、西沢 (1978) の馬島砂丘・須脇砂丘などの分布を根拠に、縄文時代中期頃および縄文時代晩期~弥生時代前期にかけての海退期に対応した北西~南東方向に延びる2列の浜堤列を提唱している。単純に考えると山中遺跡の砂層は、この浜堤列のさらに内側に位置する海浜砂になる。しかし、年代的に縄文時代後・晩期境界付近に位置する松河戸火山灰層 (MT、後述) の上位に位置する砂層であること、また同時代の浜堤は山中遺跡よりもさらに南方に位置すると考えられることから、この砂層そのものが海退期の浜堤を構成していたものとは考えづらい。だが、松河戸火山灰層層準よりも下位の砂層が、山中遺跡周辺で海退期の浜堤を構成していたものであり、これが河川の営力で削剝・再堆積したという可能性は残される。山中遺跡周辺の浜堤存在の可能性は、この付近の微高地の延びが河川の流路と調和的でなく、むしろ森 (1992) の第2浜堤の延びの方向に平行すること、さらに日光川・青木川・五条川がこの位置で不規則に蛇行することなどの理由からも十分に考えられることである。いずれにしてもこの海浜性を示す砂層は、縄文時代から弥生時代にかけての海岸線の復元という大きな問題を解く鍵になると思われるので、今後、浜堤列の上に位置する可能性のある遺跡では基盤砂層の粒度分析はもちろんのこと、珪藻・貝化石などの古生物学的な研究もあわせて行うことが重要な課題となろう。

(服部俊之)

文献

Friedman, G. M. (1961), Distinction between dune, beach, and river sands from their textural characteristics. *J. Sed. Petrol.*, **31**, 514-529.

森勇一・伊藤隆彦・楯真美子・永草康次 (1990), 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成. 愛知県埋蔵文化財センター年報 (平成元年度), 131-142.

——— (1992), 朝日遺跡およびその周辺の地質と古環境. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡・自然科学編」, 9-40.

西沢邦和 (1978), 濃尾平野の旧砂丘—特に須脇砂丘を中心として—. *地学雑誌*, **4**, 42-46.

B. 火山灰層と¹⁴C年代

1. 火山灰層

(1) はじめに

平成3年度発掘調査の深掘りトレンチにより、標高+1.07m付近の暗褐色腐植質シルト層中に1枚の火山灰層を発見した。この火山灰層は、1990年4月に春日井市の松河戸・町

田両遺跡で発見された松河戸火山灰層 (MT) (森ほか、1990) との対比が考えられる。ここでは、山中遺跡の火山灰層の岩石記載的性質を詳しく記載し、県内の火山灰層、さらに広域火山灰層との対比を検討する。

(2) 記載方法

火山灰層の岩相および岩石記載的性質については、吉川 (1976)、YOSHIKAWA (1984) の火山灰層の記載にならって記載する。なお、火山ガラスの屈折率の測定には大阪市立大学理学部地学教室の機材を使用させていただいた。

(3) 火山灰の記載

a. 山中遺跡の火山灰層

標高+1.07m付近の暗褐色腐植質シルト層中より発見された。レンズ状に挟まれ、厚さ最大約1cm、桃色がかった灰白色の細粒ガラス質火山灰層である。火山ガラスは主に中間型で、特にCa型のものが多い。屈折率は、 $n=1.500-1.502$ (1.501) である。重鉱物は角閃石・斜方輝石・単斜輝石・黒雲母からなる。

b. 松河戸火山灰層 (MT) (森ほか、1990)

春日井市松河戸・町田両遺跡より発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する広域火山灰層で、厚さ約4mm、薄い赤褐色ないしは、桃白色の細粒～中粒ガラス質火山灰層である。火山ガラスは主に中間型で、屈折率は、 $n=1.499-1.504$ (1.501-1.502) である。重鉱物は角閃石・黒雲母・単斜輝石からなる。

c. 三本松遺跡の火山灰層

豊田市坂上町三本松遺跡の縄文時代後期～晩期にかけての黒色砂質シルト層中より発見された火山灰層で、レンズ状に挟まれ、厚さ最大8mm、薄い赤褐色の細粒ガラス質火山灰層である。火山ガラスは主に中間型で、特にCa型のものが多い。屈折率は、 $n=1.500-1.502$ (1.500) である。重鉱物は角閃石・斜方輝石・黒雲母からなる。

(4) まとめ

山中遺跡で発見された火山灰層は、火山ガラスの屈折率・重鉱物組成の類似性などから松河戸火山灰層 (MT) に対比可能である。同様に、平成3年度発掘調査により一宮市西上免遺跡、豊田市三本松遺跡で、それぞれ発見された火山灰層もMTと対比可能である。大垣市荒川遺跡の火山灰層、大阪市港区天保山のボーリング試料中より発見された難波累層最上部火山灰層 (吉川ほか、1986)、滋賀県琵琶湖底200mボーリング試料中のBB7火山灰層 (YOSHIKAWA1982)、琵琶湖高島ボーリングのBT1火山灰層 (吉川・井内、1991) などとの対比から、近畿～東海地方にかけての分布が確実なものになろうとしている。このことは、松河戸火山灰層が、近畿～東海地方の縄文時代後・晩期の遺跡の絶対年代を考えるうえで重要な鍵層となりうることを示している。

2. ^{14}C 年代

山中遺跡の発掘調査において得られた各種分析試料のうち、第24図に示した5点の試料を利用し、放射性炭素年代 (^{14}C 年代) を求めた。年代測定は、学習院大学理学部に依頼し、

第1表 山中遺跡関連火山灰の岩石記載的性質

Volcanic ash	Mineral composition				Glass				Heavy mineral composition										
	Gl.	Fl.	Qz.	Hm.	Shape				Refractive Index		Bi.	Am.	Op.	Cp.	Zr.	Ap.	Oq.		
					(%)	H.	C.	T.	O.	(%)	(mode)							(%)	
Yamanaka	85	7	3	5	4	67	27	2		1.500-1.502(1,501)			9	38	27	10		16	
Sanbonmatsu	85	10	3	2	16	71	12	1		1.500-1.502(1.500)			8	36	31	6		2	17
Matsukawado62A	90	4	2	4	11	56	33	0		1.499-1.504(1.501-1.502)			10	38	26	9		1	16
Matsukawado62E	89	7	2	2	13	64	23	0		1.497-1.505(1.501-1.503)			3	45	33	9		1	9
Matsukawado63H	85	12	1	2	5	74	21	0		1.499-1.504(1.502)			6	39	35	10		1	9
Chouda62B	83	13	1	4	16	71	13	0		1.498-1.504(1.501-1.502)			4	39	39	8			10
BT1	93	5	1	1	2	39	50	9		1.497-1.503(1.499-1.502)			8	29	32	4		3	24
Mineral composition	Gl : Glass Fl : Feldspar Qz : Quartz Hm : Heavy minerals																		
Shape of glass	H : H-type shards C : C-type shards T : T-type shards																		
Heavy mineral composition	Bi : Biotite Am : Amphibole Op : Orthopyroxene Cp : Clinopyroxene Zr : Zircon																		
	Ap : Apatite Oq : Opaque minerals																		

*分析値は松河戸・町田について森ほか(1990)、BT1については吉川ほか(1991)による。

¹⁴C年代測定法によって求められた値である。以下に、その測定結果を列記し、年代に対する若干の補足説明をする。ただし、ここでの年代値はすべて1950年より起算したものを使用している。

〈放射性炭素年代〉

C-5	2,700±90	〈GaK-16369〉
C-4	3,500±140	〈GaK-16367〉
C-3	3,850±100	〈GaK-16368〉
C-2	4,520±100	〈GaK-16443〉
C-1	4,530±110	〈GaK-16494〉

〈分析試料〉

腐植質シルト
腐植質砂質シルト
木片
腐植質シルト
腐植質シルト

ここに示された年代のうち、C-3・4の年代値は、前述した松河戸火山灰層の信頼度の高い年代値3,120±120y. B. P. (森ほか、1990) からすると、かなり古い年代値を示していることがわかる。これは、両試料採取層準が比較的砂質な部分であったために、再堆積による試料を測定した可能性が高いことを示している。(服部俊之)

文献

森勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣 (1990), 愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について. 第四紀研究, 29, 17-23.

吉川周作 (1976), 大阪層群の火山灰層について. 地質学雑誌, 82, 497-515.

YOSHIKAWA, S. (1982), Volcanic glass in the 200m core sample from Lake Biwa. Paleolimnology of Lake Biwa and the Japanese Pleistocene, 9, 35-49.

————— (1984), Volcanic Ash Layers in the Osaka and Kobiwako Groups, Kinki District, Japan. Jour. Geosci. Osaka City Univ., 27, 1-40.

吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和 (1986), 近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について. 地球科学, 41, 231-241.

—————・井内美郎(1991), 琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序. 地球科学, 45, 81-100.

C. 昆虫および珪藻化石から推定される 縄文時代後・晩期の頃の古環境

1. はじめに

筆者は、これまでに愛知県内外の遺跡の調査を通じて多くの昆虫化石を抽出し、古環境復元に役立つ指標性昆虫の特定と分析を実施してきた(森：1988、森：1989、森ほか：1990、森ほか：1992、森：1992)。本節では昆虫と珪藻の分析を併せて実施し、山中遺跡周辺の古環境について考察する。

2. 分析試料および分析方法

昆虫分析試料は、山中遺跡91区深掘りトレンチの標高+1.07m(地表面下3.53m)に位置する松河戸火山灰層(森ほか、1990；3120±120y. B. P.)直下の植物片まじり腐植質シルト層より採取した(第24図、I-1)。分析試料の湿潤重量は12.4kgであった。昆虫化石の抽出は主にブロック割り法によっておこなった。検出した昆虫化石は、実体顕微鏡下でクリーニングののち、現生標本と比較・検討のうえ一つずつの節片について種の同定と部位の特定を行った。一方、珪藻分析試料は昆虫の分析試料と同層準より1サンプル(試料D-1)、それより上位の腐植まじり細粒砂層より1サンプル(試料D-2)の計2サンプル採取した(第24図)。珪藻遺骸の検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用した。

珪藻の分類と生態的特性などは、Hustedt (1930, 1927-1966), Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988)などによった(文献名省略)。

3. 昆虫および珪藻化石群集

A. 昆虫

山中遺跡の分析試料中より発見された昆虫化石(節片ないしは破片数)は計40点であった。第2表は、山中遺跡産の昆虫化石の全リストとその計測値である。また、主な昆虫化石の顕微鏡写真を図版22・図版24に示した。不明種4点を含め、いずれも鞘翅目(COLEOPTERA)に属する鞘翅(Shard)・前胸背板(Pronotum)等の節片よりなり、発見された化石片の大きさは最大18.0mm、最小0.7mm(いずれも化石片の長辺の長さ)であった。

出現種数は科レベルまで同定できたもの4科10点(25.0%)、属レベルまで同定できたもの2属4点(10.0%)、種レベルでは11種22点(55.0%)、所属不明および未分類の鞘翅目は4点(10.0%)であった。生息環境および生態による分類では、水生昆虫4種8点(20.0%)、地表性歩行虫2科1属3種の計12点(30.0%)、食植性昆虫1科1属4種の計15点(37.5%)、肉食性昆虫1科1点(2.5%)、その他所属不明および未分類のため生態が判明していない昆虫片は4点(10.0%)であった(第3表)。

特筆すべき種として、水生昆虫ではガムシ *Hydrophilus acuminatus* (3点)、セマルガムシ *Coelostoma stultum* (2点)、ヒメセマルガムシ *Coelostoma orbiculare* (1点)、オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (2点)が出現した。これらは、いずれも現在は水深の

浅い池沼や水田などにすむ止水性の水生甲虫である。地表性歩行虫では、トックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp. (1点)、ヤマトトックリゴミムシ *Lachnocrepis japonica* (1点)、クロモリヒラタゴミムシ *Colpodes atricomis* (1点)、アオバアリガタハネカクシ *Paedenus fuscipes* (1点) が発見された。これらの種群は森林性のクロモリヒラタゴミムシをのぞき湿地や水辺に好んで生活し、湿潤地表面を特徴づける歩行虫といえることができる。また、食植性昆虫では、サクラコガネ属 *Anomala* sp. (3点)、ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (5点)、コガネムシ *Mimela splendens* (4点)、ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* (1点)、ホソサビキコリ *Agrypnus fuliginosus* (1点) などが発見された。いずれも草本植生ないしは落葉広葉樹の葉を食害する食葉性昆虫である。

B. 珪藻化石

試料D-1から得られた珪藻化石は、14属50種(5変種を含む)計200個体、試料D-2では12属20種(1変種を含む)計43個体であった。そのリストを第4表に、また主な珪藻化石の顕微鏡写真を図版26に示した。

珪藻化石の群集組成は、試料D-1・2を通じてpHについては不定性種および真~好酸性種が多く、水流性については不定性種が優占する群集組成であるとみなすことができる。また、珪藻の生態性では、底生および付着生の種群で大部分が占められ、塩分に対する適応性では試料D-1中から見いだされた *Meolosira* sp-A. (好塩性汽水性種) をのぞき、すべて嫌塩性の淡水性種であった。

試料ごとにみると、試料D-1中のpHについての適応性は、真~好アルカリ性種20.0%、pH不定性種39.5%、真~好酸性種39.0%、水流性では真~好流水性種6.5%、水流不定性種79.0%、真~好止水性種12.5%、珪藻の生態性についてみると、付着生種44.0%、底生種54.5%、浮遊生種は1.0%であった。試料D-2では出現個体数が少なく群集組成を読み取ることは困難であるが、pHについては真~好アルカリ性種(44.1%)、水流性については不定性種(62.7%)、生態性については付着生種(76.7%)が比較的多く出現した。

種組成でみると、試料D-1では好酸性・水流不定性・付着生種の *Eunotia pectinalis* (2変種を含む) 16個体、同じく好酸性・水流不定性・付着生種の *E. robusta* 13個体をはじめ *Eunotia* 属の種群が48個体(24.0%)、好酸性・水流不定性・底生種の *Pinnularia stomatophora* 8個体、pH不定性・水流不定性・底生種の *P. viridis* 8個体をはじめ、*Pinnularia* 属の種群が計50個体(25.0%)出現し、pH不定性・水流不定性・底生種の *Stauroneis phoenicenteron* 15個体(7.5%)も比較的多く見いだされた。

また、試料D-1では陸生珪藻として知られる *Hantzschia amphioxys* (*H. amphioxys* var. *vivax* を含む)、*Eunotia praerupta*、*Pinnularia subcapitata* が計26個体(13.0%)検出され、底生種の出現率が高いことと併せ、松河戸火山灰層が降灰した当時、山中遺跡周辺に存在した止水域は水深の浅い湿地帯のような環境であった可能性が考えられる。

4. 考 察

昆虫および珪藻分析によって明らかになった松河戸火山灰降灰直前、すなわち縄文時代

後・晩期の境界付近の頃の山中遺跡周辺の古環境について述べる。

出現昆虫は止水域に生活する水生甲虫と、湿地や水辺環境に多い地表性歩行虫によってそのほとんどが占められた。また、食植性昆虫では、すべての種群が草本植生や落葉性の広葉樹に依存するものばかりであった。珪藻化石では、pH 不定性から真～好酸性種が優占し、生態性では底生種が付着生種を上回った。そして、好氣的環境を好む陸生珪藻も見いだされた。

その結果、濃尾平野北西部の一宮市山中遺跡周辺は、ところどころに水深の浅い池沼(水深はせいぜい1 m未満)が点在する湿地帯のような状況であったものと推定される。湿地帯のまわりの植生は草本植生が卓越し、出現昆虫の組成から樹林はほとんど成立していなかったものと考えられる。その後、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての頃、層厚3 mを超える砂層が後背地から搬出されたのち、濃尾平野各所で弥生人の本格的な活動の舞台を迎えることになるのである。(森 勇一・前田弘子)

文 献

- 森 勇一(1988), 勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境. 愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和62年度), 118—137.
- 森 勇一(1989), 昆虫化石から得られた愛知県勝川遺跡周辺の古環境. 考古学と自然科学, 21, 57—71.
- 森 勇一・伊藤隆彦・中村俊夫 (1990), 西尾市岡島遺跡より発見された昆虫の年代とその古生態. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第14集), 岡島遺跡, 107—115.
- 森 勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣 (1990), 愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について. 第四紀研究, 29, 17—23.
- 森 勇一・前田弘子・伊藤隆彦 (1992), 珪藻および昆虫化石群集から得られた朝日遺跡の古環境変遷. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第31集), 朝日遺跡 (自然科学編), 71—131.
- 森 勇一(1992), 富山県魚津埋没林の泥炭層中より産した昆虫化石について. 魚津市立博物館紀要, 3, 1—12.
- 森本 桂ほか (1984・1985・1986), 原色日本甲虫図鑑. I～IV, 保育社
- 中根猛彦 (1975a), 原色日本昆虫図鑑. 上・下, 保育社
- 中根猛彦 (1975b), 学研中高生図鑑・昆虫II (甲虫). 学習研究社
- 中根猛彦ほか (1978), 原色昆虫大図鑑II (甲虫編). 北隆館.

第2表 昆虫化石の分析結果

湿润重量 12.4kg

計40点

No.	和名	学名	部位名	計測値 (mm)	備考
1	ゴミムシ科	HARPALIDAE	腹部腹板	L 8.0 W 6.2	
● 2	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> MODEER	右鞘翅上半部	L 4.2 W 3.8	写I-4
● 3	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (WALKER)	右鞘翅	L 5.0 W 3.5	写I-1
4	ホソサビキコリ	<i>Agrypnus fuliginosus</i> (CANDEZE)	前胸背板	W 3.6 H 3.8	写II-4
5	ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE	前胸背板	W 0.6 H 0.8	
6	クロモリヒラタゴミムシ	<i>Colpodes atricomis</i> BATES	前胸背板片	W 1.8 H 3.1	写I-8
7	ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE	右鞘翅	L 2.1 W 1.2	写II-1
8	不明甲虫	COLEOPTERA	左・右鞘翅	L 1.5 W 0.8	
9	ゴミムシ科	HARPALIDAE	左右鞘翅 上半部	L 3.4 W 2.1	写I-9
10	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> GYLLENHAL	鞘翅片	L 6.3 W 5.4	
11	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> GYLLENHAL	腹部腹板	W 3.0 H 1.6	
12	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	鞘翅片	L 1.4 W 1.1	
13	ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE	左鞘翅	L 1.2 W 1.1	
14	ゴミムシ科	HARPALIDAE	後胸腹板片	W 2.1 H 1.8	
15	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	前胸背板片	W 6.2 H 3.8	
16	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	後跗節	L 2.0 W 0.4	
● 17	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> MOTSCHULSKY	小楯板	L 4.0 W 4.0	写I-2
18	ゴミムシ科	HARPALIDAE	腹板片	L 3.0 W 2.1	
● 19	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> MOTSCHULSKY	鞘翅片	L 5.0 W 3.3	
20	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	鞘翅片	L 2.3 W 1.2	
21	ヒメカンショコガネ	<i>Apogonia amida</i> LEWIS	左鞘翅	L 5.6 W 3.3	写II-7
22	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	鞘翅片	L 2.3 W 1.4	
23	ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	右鞘翅	L 1.6 W 0.8	
24	不明甲虫	COLEOPTERA	腿節	L 0.8 W 0.2	
● 25	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> MOTSCHULSKY	鞘翅片	L18.0 W12.0	写I-3
26	不明甲虫	COLEOPTERA	鞘翅片	L 2.0 W 1.0	
27	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	前胸背板片	W 2.0 H 1.4	
28	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> GYLLENHAL	中腿節	L 4.1 W 1.6	写II-8
● 29	セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (WALKER)	前胸背板片	W 2.4 H 1.5	
30	ハネカクシ科	STAPHYLINIDAE	前胸背板	W 1.2 H 1.4	写II-2
○ 31	アオバアリガタハネカクシ	<i>Paedenus fuscipes</i> (CURTIS)	右鞘翅	L 1.2 W 0.8	写II-3
32	テントウムシ科	COCCINELLIDAE	鞘翅片	L 2.4 W 2.0	
○ 33	ヤマトトクリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> BATES	前胸背板	W 4.1 H 3.2	写I-7
● 34	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> MODEER	前胸背板片	W 1.6 H 1.2	写I-5
35	不明甲虫	COLEOPTERA	右鞘翅	L 2.4 W 1.2	
36	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	鞘翅片	L 0.7 W 0.5	
37	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> GYLLENHAL	前胸背板 左半部	W 5.0 H 4.0	写II-5
● 38	ヒメセマルガムシ	<i>Coelostoma orbiculare</i> (FABRICIUS)	左鞘翅	L 2.0 W 1.5	
○ 39	トクリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.	第3・第4腹板	W 2.8 H 2.6	
40	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	腹板片	L 4.4 W 3.2	

● 水生昆虫 ○ 湿地性の歩行虫

第3表 昆虫化石の生態およびその生息環境

	昆虫種名	検出部位	形態的特徴・生態	生息環境
水	ガムシ <i>Hydrophilus acuminatus</i> MOTSCHULSKY	S 1 W 2	体長32~35mm。体全体が黒色で光沢があり、すべての部位ががん丈にできていて、土中に埋没後も残存しやすい。鞘翅は微細点刻を伴う4点刻列を有する。小楯板は大型の正三角形に近い二等辺三角形である。	池沼や水田などにすみ、成虫は水草や藻などの植物質を食べる。止水性の水生甲虫。
	セマルガムシ <i>Coelostoma stultum</i> (WALKER)	W 1 P 1	体長約5mm。黒色で鞘翅および前胸背板上には小点刻を密布する。鞘翅会合部に沿い、後半に細かい条溝を有する。	平地の池沼・水田などにふつうに見られ、夜電灯にも飛来する。水草や藻を食べる。止水性水生甲虫。
	ヒメセマルガムシ <i>Coelostoma orbiculae</i> (FABRICIUS)	W 1	体長3.5~4.0mm。体はほぼ半球形。鞘翅は密に点刻される。前種と似るが体全体が小型であることと、点刻がより微細であることにより区別される。	前種同様、平地の池沼や水田などにすむが少ない。主にミスゴケを食べる。止水性水生甲虫。
	オオミズスマシ <i>Dineutus orientalis</i> MODEER	W 1 P 1	体長8~10mm。背面は黒くて金属光沢を帯び、両側縁平圧部は黄色。上翅先端と外縁後部にそれぞれ一つずつ刺突起を有する。	池やゆるやかな流れにすみ、水面に落下した小昆虫を捕食する。止水性甲虫。
地	ゴミムシ科 HARPALIDAE	A 2 W 2 T 1	日本に約1200種の生息が知られている。今回発見されたゴミムシ科は、中~小型種に属する鞘翅片・頭部・腹部腹板片である。	本来地表性の歩行虫であるが、樹上性のものや洞穴性のものも含まれる。地表性のゴミムシ科のなかにも乾燥した砂地を好むものもいるが、山中遺跡産のゴミムシ科は大部分湿地性種である。
	トックリゴミムシ属 <i>Lachnocreptis</i> sp.	A 1	ヤマトトックリゴミムシかトックリゴミムシに分類される腹部腹板(第3・第4腹板)であろう。おそらく次種のヤマトトックリゴミムシの節片と考えられる。	ヤマトトックリゴミムシおよびトックリゴミムシの両種とも湿地や水辺にすみ、鱗翅目等の幼虫を捕食する。湿地性の歩行虫。
	ヤマトトックリゴミムシ <i>Lachnocreptis japonica</i> BATES	P 1	体長11.5mm内外。黒色で背面は光沢がある。体全体が長く、前胸背板は下底に対して上底の長さの比が大きい台形であり、基部の陥凹は浅い。	水田や池沼など水辺の湿地に見られる。成虫越冬し、ガなどの幼虫を食べる。湿地性の歩行虫。
	クロモリヒラタゴミムシ <i>Colpodes atricomis</i> BATES	P 1	体長12mm内外。黒色で鞘翅はやや青みを帯びる。前胸背板の幅2.4~2.8mm、高さ2.0~2.3mm。	平地から山地にかけての森林に生息し、樹皮下や朽ち木などから発見される。雑食性の地表性歩行虫。
	ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE	P 2 W 1	1mm内外から3cmに及ぶ多くの種類を含んでおり、大部分は体が細長く、鞘翅が短縮して先端が切断状になり、前胸背板の大半が露出する。日本に約800種が知られている。	屍体などの腐肉や糞に集まるものも多く、朽木・ゴミ・キノコ・腐植質中にも見出される。食性は肉食、草食の両者がある。
	アオバアリガタハネカクシ <i>Paedenus fuscipes</i> (CURTIS)	W 1	体長6.5~7.0mm。頭・中胸下・腹端2節が黒く、鞘翅は暗緑~藍色に光る。	平地の湿った草地に多く、成虫も幼虫もふつう地表面にすみ雑食性である。主に他の虫を捕食する。成虫は1年中見られるが、冬は土中にもぐる。体液は有毒で、皮膚につくと炎症をおこす。
食	サクラコガネ属 <i>Anomala</i> sp.	W 3	ヒメコガネやサクラコガネ・ドウガネブイブイなどを含む食葉性昆虫群である。	サクラ・バラ・ノドウなどの多くの落葉性広葉樹の葉を食害する広食性の食葉性昆虫である。
	ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY	P 2 W 1 L 1 A 1	体長13~16mm。緑色・青藍色・黒色・赤褐色など色彩に変化が多い。	マメ科の植物を中心に、ブドウ・クヌギなど多くの草本ないし、落葉性広葉樹の葉を食べる。
	コガネムシ <i>Mimela splendens</i> GYLLENHAL	W 1 L 1 A 1 P 1	体長17~23mm。強い金属光沢を有する緑色の食葉性昆虫。鞘翅には小点刻の縦列、前胸背板には側縁付近中央部に1~3個が縦に並ぶ小陥凹。	サクラやクヌギなどの落葉性広葉樹の葉を食べる。幼虫は土中の植物の根を食べる。
	ヒメカンショコガネ <i>Apogonia amida</i> LEWIS	W 1	体長7~8.5mm。体全体が銅紫色の光沢を有する黒色。鞘翅は丸味を帯びやや不規則な粗大点刻列が認められる。	イモ類をはじめ、草本・樹葉など多くの葉を食害する食葉性昆虫。
	ハムシ科 CHRYSOMELIDAE	W 1	日本に約500種生息し、樹木や草木の葉を食するものが多い。小型であるのと体全体が柔らかいこともあって遺跡中から発見されるハムシ科の分類は困難である。	湿地や草原、および林縁などの草本や樹葉に集まる食葉性昆虫。
	ホソサビキコリ <i>Agrypnus fuliginosus</i> (CANDEZE)	P 1	体長16mm内外。背面は黒褐色で鱗毛におおわれる。鱗毛は白・灰褐・褐色で不明瞭なまだらをなす。前胸背板の中央に1対の横隆起がないことで近似種と区別される。	平地~山地の雑木林や草地の多種の葉上に見られる。
食肉性	テントウムシ科 COCCINELLIDAE	W 1	ほとんどが半球形に近い小型から中型の甲虫。山中遺跡からは、淡~暗褐色の小型のテントウムシ科の鞘翅片が発見された。	草本を中心とした葉上において、アブラムシやカイガラムシなどの他の虫を食べる。
所属不明および未分類の甲虫目		W 3 L 1	(検出部位凡例) W (Wings); 鞘翅 H (Head); 頭部 T (Thorax); 胸部 A (Abdomen); 腹部 P (Pronotum); 前胸背板 S (Scutellum); 小楯板 L (Legs); 腿脛節	
総計		40		

第4表 珪藻分析結果

		D - 2	D - 1
<i>Achnanthes inflata</i>	KÜTZING		2
<i>linearis</i>	W.SMITH	4	1
<i>Cocconeis placentula</i>	EHRENBERG	1	2
var. <i>euglypta</i>	(EHR.) CLEVE	7	
<i>Cymbella aspera</i>	(EHR.) CLEVE		3
<i>gracilis</i>	(EHR.) KÜTZING		2
<i>leptoceros</i>	(EHR.) GRUNOW	1	
<i>minuta</i>	RABENHORST	2	3
<i>naviculiformis</i>	AUEFRSWALD		6
<i>turgida</i>	HASSALL		1
<i>turgidula</i>	GRUNOW	7	
<i>Diploneis ovalis</i>	(HILSE) CLEVE		1
<i>Eunotia arcus</i>	EHRENBERG		2
<i>flexuosa</i>	KÜTZING		7
<i>lunaris</i>	(EHR) GRUNOW		2
<i>pectinalis</i>	(KÜTZ.) RABENHORST	2	12
var. <i>minor</i>	(KÜTZ.) RABENHORST		2
var. <i>undulata</i>	RALFS		2
<i>praerupta</i>	EHRENBERG		7
<i>pseudopectinalis</i>	HUSTEDT		1
<i>robusta</i>	RALFS		13
<i>Frustulia rhomboides</i>	(EHR.) De TONY	1	
<i>Gomphonema angustatum</i>	(KÜTZ.) RABENHORST		1
<i>augur</i> var. <i>turris</i>	(EHR.) LANGE BERTALOT		1
<i>clevei</i>	FRICKE	7	1
<i>gracile</i>	EHRENBERG		5
<i>parvulum</i>	(KÜTZ.) KÜTZING		3
<i>Hantzschia amphioxys</i>	(EHR.) GRUNOW		13
var. <i>vivax</i>	(HANTZ.) GRUNOW		3
<i>Melosira ambigua</i>	(GRUR.) O. MÜLLER		2
<i>granulata</i>	(EHR.) RALFS	1	
sp.-A			1
<i>Navicula americana</i>	EHRENBERG	1	
<i>elginensis</i>	(GREGORY) RALFS	1	2
var. <i>neglecta</i>	(KRASS.) PATRICK		4
<i>laevis</i>	KÜTZING		9
<i>placenta</i>	(EHR.) GRUNOW		1
<i>pupula</i>	KÜTZING		4
<i>Neidium bisulcatum</i>	(LAGERSTEDT) CLEVE		2
<i>iridis</i>	(EHR.) CLEVE	1	1
<i>Nitzschia obtusa</i>	W. SMITH	1	1
<i>parvula</i>	LEVIS		2
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	BREBISSON		3
<i>appendiculata</i>	(AGARDH) CLEVE		4
<i>borealis</i>	EHRENBERG	1	
<i>brevicostata</i>	CLEVE		3
<i>divergens</i>	W. SMITH	1	
<i>gibba</i>	EHRENBERG	1	5
<i>hemiptera</i>	(KÜTZ) CLEVE		7
<i>interrupta</i>	W. SMITH		1
<i>major</i>	KÜTZING	1	
<i>microstauron</i>	(EHR.) CLEVE	1	4
<i>nodosa</i>	EHRENBERG		1
<i>stomatophora</i>	GRUNOW		8
<i>subcapitata</i>	GREGROY		6
<i>viridis</i>	(NITZ.) EHRENBERG		8
<i>Rhopalodia gibberula</i>	(EHR.) O. MÜLLER		9
<i>Stauroneis anceps</i>	EHRENBERG		1
<i>phoenicenteron</i>	EHRENBERG		15
<i>Synedra vaucheriae</i>	KÜTZING	1	
TOTAL		43	200

2. 弥生時代から古墳時代初頭の遺構

時期 平成2年度調査の報告では赤塚次郎氏による「山中式」の詳細な検討が行われている。山中遺跡に限定すれば一応の編年基準になるものと考えられるので、以下ではそれに準拠する。

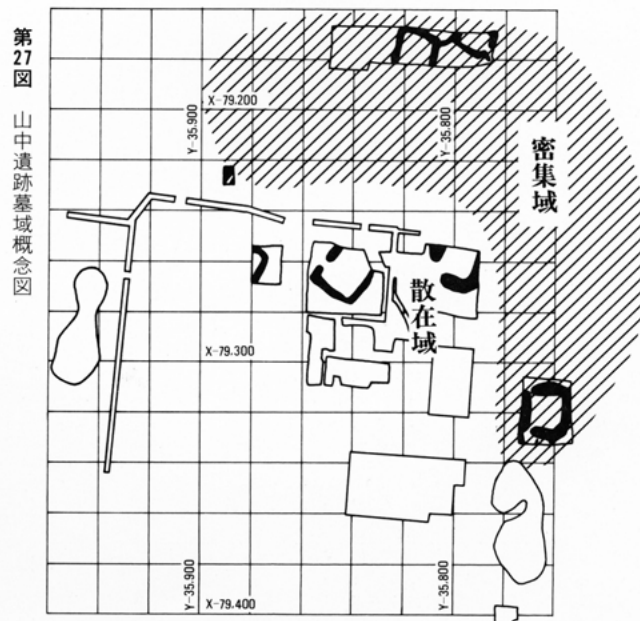
S Z 01は4段階、S Z 02は5段階、S Z 03は改修前が3段階または4段階、改修はそれ以後に位置づけられ、これらは平成2年度調査で検出された前方後方形周溝墓S Z 13よりは先行すると考えられる。

配置 平成2年度調査で検出された方形周溝墓S Z 10・11・12の周辺には近接する方形周溝墓の検出はなく、ほぼ20m間隔での築造という「散在の様相」が窺える。それに対し、それら3基の南東にあるS Z 13では方形周溝墓と考えられる溝が近接して検出されているし、また北東のH区でも近接して方形周溝墓が築造されている可能性がある。後者は「密集の様相」といえる。そして、今回の調査例は後者の密集の様相に対応するといえる。

以上を散在域と密集域という対比でみると、散在域の外縁に密集域が展開し、密集域内部で時期が下る一部の方形周溝墓について前方後方形への改修が行われるという図式を読み取ることができる。

供献土器 S Z 03からは大形壺と小形壺の出土があった。このうち、小形壺はその形態とともに製作技法がこれまで集落で出土したものとは異なっており、墳墓専用土器であることを示している。

(石黒立人)



3. 中世の遺構・遺物

変遷 遺構の切りあい関係からは、おおきく3時期にわかれ、さらに3期は2小期に区分できる。実年代との対比では、1期：12世紀代、2期：13世紀中、3a期：13世紀後半、3b期：14世紀代となり、3期が遺構数・密集度とも他の時期を引き離している。特に、3期は溝が明確な配置をもって掘削されており、安定した設計をうかがうことができる。

構造 ここでは3期について検討しよう。

3a期 調査区の西部にある、SD03のL字状の部分とそれに一致した軸線を有するSD05の南北方向部分が基準となって、西側に方形の空間が形成される(→区画1)。SD06はL字状に折れる溝で、南北部分はSD08→SD06下部→SD07というように拡張したと考えられる(→区画2)。東西方向は、この段階ではクランクをつくらず、SX05がSD06の終息部であった可能性がある。SD22はSX05東端にむかって南北に掘削されており、西縁をSD10として、SD06のつくる区画に対応する(→区画3)。SD29はSD06の東西方向に軸線を一致させて南に区画をつくっている(→区画4)。

上述の区画1と区画2・区画3の間は空間となって南北に伸びるが、南ではSD02にさえぎられる可能性もあり、区画1に平行するL字状の帯であることも考えられる(帯状区1)。この点で、区画2がSD07の掘削により拡張され、そのために帯状空間が狭められていることは、この空間が流動的な性格を有していることを示すものとする。

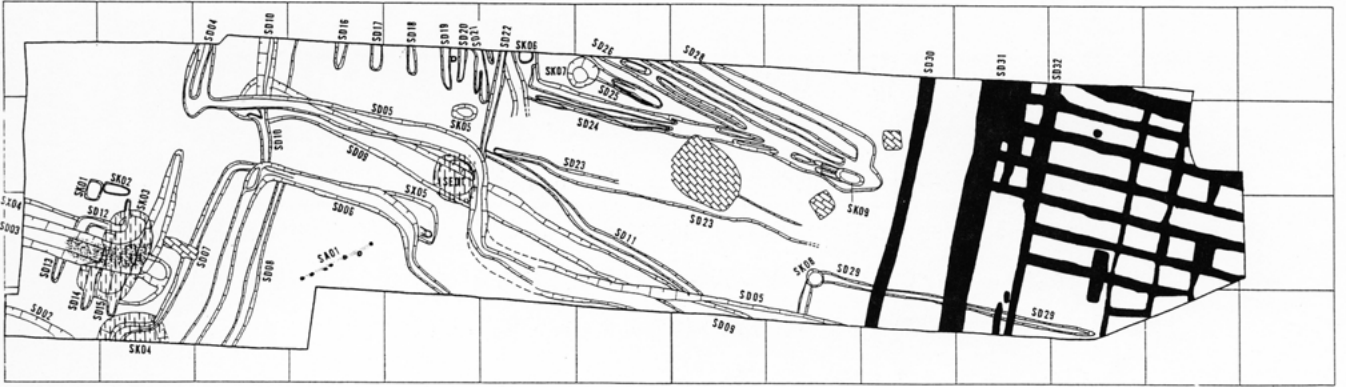
3b期 SD05・SD06がクランク状に平行して掘削されるとともに、区画1をとりまく帯状区1はSD07・10の埋め立てによって大きくつくりかえられ、一連のほぼ同じ幅を有する帯状空間となる(帯状区2)。

SD23はSD05と軸線を一致させて掘削され、以北を一つの区画にまとめている(区画5)。SD24はSD23に平行するが、西では鈍角に折れ、SD16～SD21の軸線に一致させている。SD23とSD24とがつくる帯状空間はそのままSD05とSD16～21とがつくる空間につながっている。

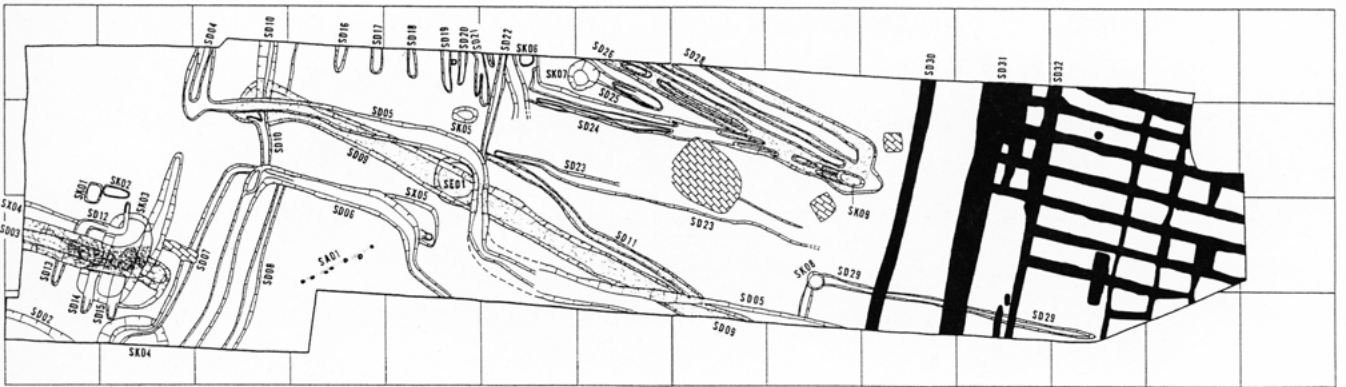
これまでの調査で南に建物群が検出されていること、区画1が墓域である可能性が極めて高いことから、区画2は屋敷地北東縁であると考えられる。したがって、帯状区2は墓域に至るとともに、外へと抜け出るための通路でもあったと考える。そして区画5については、平行する溝群がいずれも浅いこと、底部にさらに溝が掘られていることから、畝間の溝であった可能性を考えたい。

(石黒立人)

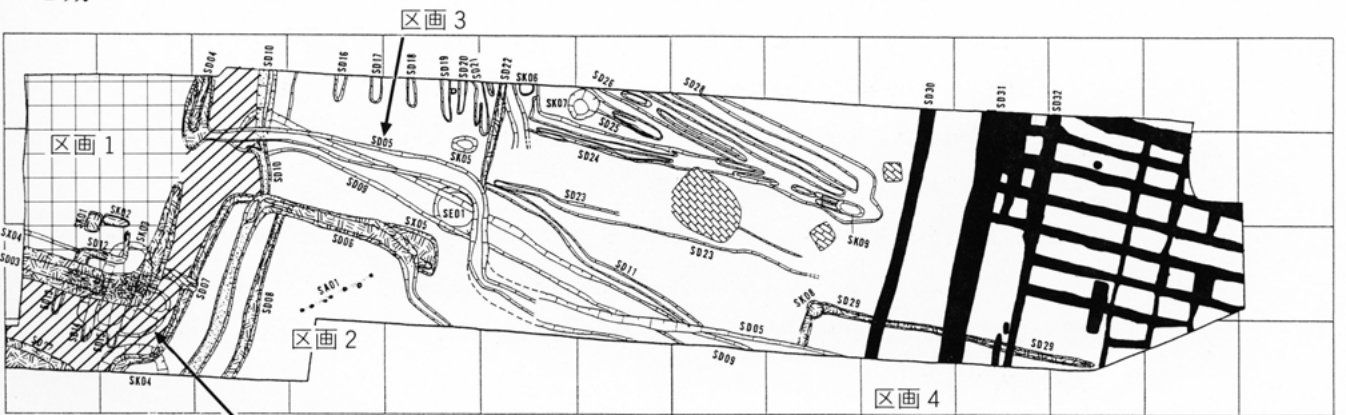
第28図 中世遺構変遷図 (1:400)



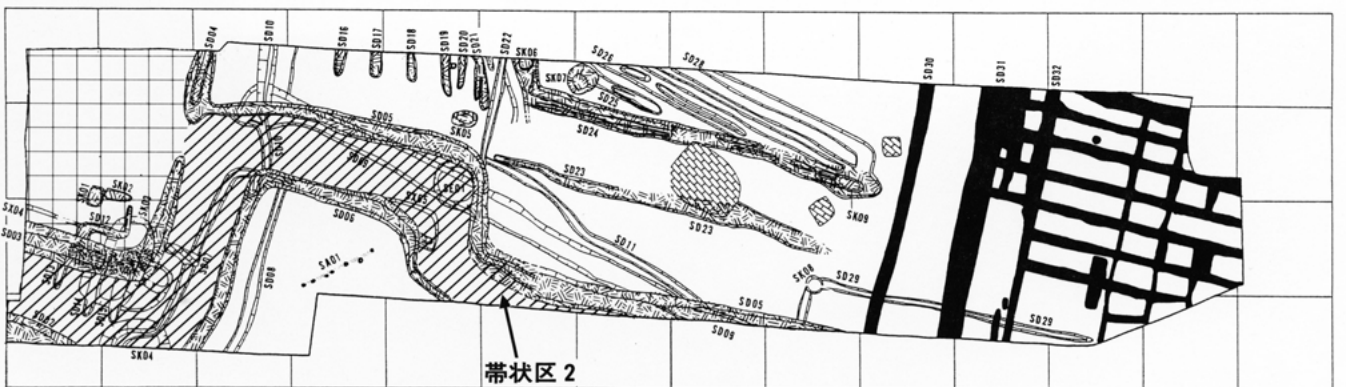
1期



2期



3 a期 带状区1



3 b期

VI. ま と め

1. 弥生時代前期

包含層が当地区まで及んでいることを確認した。

2. 弥生時代後期から古墳時代初頭

方形周溝墓は、当地区では密集域を形成し、しかも前方後方形につくり替えられたものが含まれていることを確認した。

3. 古墳時代後期

6世紀代に属す円墳周溝の残欠が検出されたことは、おそらく円墳の群在する可能性を示唆する。

4. 古代

今回も遺構の遺存状態は悪い。

5. 中世

屋敷地の区画と墓域の存在を確認するとともに、変遷過程の一端をかいまみた。

6. 地質学的には、遺跡基盤を構成する砂層の分析により、山中遺跡周辺に海退期の浜堤が存在する可能性が高くなったことがあげられる。また、遺跡地下より縄文時代後・晩期の境界時期付近に降灰した松河戸火山灰を発見した。

7. 昆虫および珪藻化石の分析により、縄文時代後・晩期境界時期付近の山中遺跡周辺の古環境は、水深の浅い池沼が点在する湿地帯のような状況であったことが判明した。

(石黒立人)

付表

山中遺跡遺構番号対照表 I I Y91

新 番	日 番	規 模 (cm)		
		長 径	短 径	底 面 標 高 (最 低 面)
SA01	*			
SK01	SK06	90	60	446
SK02	SK07	130	30	454
SK03	SK09	430	160	376
SK04	SK03	-250		444
SK05	*	95	50	468
SK06	SK04		45	462
SK07	SK08	90	80	419
SK08	SK01	75	70	480
SK09	*	113	49	480
SE01	◎	95	80	—
SX01	SK11	-510		456
SX02	SD32		80	438
SX03	*	310	75	465
SX04	SD30			
SX05	*	-310	140	440
SZ01	◎	1,290		473
SZ02	◎	1100		481
SZ03	◎	-1600	870	469
SZ04	SZ101	1300	1300	486
		溝の底面標高 (cm)		
		最 深	最 高	
SD01	SD31	441	453	
SD02	SD16	434	439	
SD03	SD09, SD10	401	439	
SD04	SD27	433	437	
SD05	SD02, SD04	434	480	
SD06	SD01	418	453	
SD07	SD08	434	448	
SD08	SD07	433	439	
SD09	SD13, SD14	435	456	
SD10	SD20	427	438	
SD11	*	469	488	
SD12	SD24	449	454	
SD13	*	-455		
SD14	*	454	457	
SD15	*	450	455	
SD16	*	470	471	
SD17	SD21	472	473	
SD18	SD22	474	475	
SD19	SD23	471	473	
SD20	SD24	471	477	
SD21	SD25	470	477	
SD22	SD05	470	475	
SD23	SD12	474	486	
SD24	SD17	463	480	
SD25	SD19	470	477	
SD26	SD37	471	483	
SD27	SD36	470	479	
SD28	SD35	471	484	
SD29	SD03	477	498	
SD30	*	455	482	
SD31	SD34	464	470	
SD32		480	498	

加工円盤

番 号	登 録 番 号	縦 (cm)	横 (cm)	重 さ (g)	出 土 遺 構
121	91-E-097	3	2.5	15.7	SD05
146	91-E-098	2.5	2	11	SD29
147	91-E-099	2	3	6.4	SD29
155	91-E-104	2.5	3	12.4	包含層
156	91-E-143	2.5	3	9.8	包含層
157	91-E-150	2.5	2.5	9.8	包含層
158	91-E-138	2.5	2.5	9.3	包含層
159	91-E-139	2.5	3.5	11.9	包含層
160	91-E-142	2	3	7.9	包含層
161	91-E-140	2	2.5	6.5	包含層
162	91-E-141	2	3	8.5	包含層
163	91-E-146	3	3.5	12.5	包含層
164	91-E-144	5.5	6.5	47.1	包含層
165	91-E-145	2.5	3.5	12.7	包含層

山中遺跡金属器一覧

番 号	登 録 番 号	種 別	縦 (mm)	横 (mm)	重 さ (g)	出 土 遺 構	備 考
38	91-M-1		23,588	25,324	8.7	SZ04	

山中遺跡土器一覽

番号	登録番号	種別	口径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	出土遺構	備考
1	91-E-174	壺底部					包含層	二枚貝条痕
2	91-E-168	壺体部					包含層	二枚貝条痕
3	91-E-131	壺体部					S Z01	カゴ目痕
4	91-E-125	高杯杯部			22.5		S Z01	白褐色
5	91-E-112	高杯脚部			14		S Z01	乳桃色
6	91-E-114	甕脚台			7		S Z01	乳褐色
7	91-E-121	甕	17				S Z01	口、胴2片 褐色
8	91-E-124	S字甕	15				S Z01	淡茶褐色 風化
9	91-E-123	鉢 or 高杯口縁	7				S Z02	平行沈線(半竹) 淡茶褐色
10	91-E-128	高杯杯部					S Z02	4と同一個体?
11	91-E-127	高杯杯部					S Z02	乳茶褐色
12	91-E-122	器台	14.5				S Z02	乳褐色
13	91-E-129	高杯脚					S Z02	杯部円形透孔以下欠損 白褐色
14	91-E-132	小形鉢					S Z02	橙褐色
15	91-E-133	小形鉢					S Z02	14と同一個体?
16	91-E-115	台付壺?		13.5			S Z02	乳褐色
17	91-E-126	脚			10.5		S Z02	乳褐色
18	91-E-118	甕	24				S Z02	ハケメ刻み 淡茶褐色
19	91-E-117	甕	18.5				S Z02	ハケメ刻み 茶褐色
20	91-E-116	S字甕	12				S Z02	8と同一個体?
21	91-E-113	高杯杯部	24.5				S Z03	乳褐色
22	91-E-152	高杯杯部	27.5				S Z03	乳茶褐色
23	91-E-155	器台	13				S Z03	乳橙色 口縁端部掘凹線
24	91-E-165	壺	15	35.5	9.5	38.5	S Z03	カゴ目痕 乳茶褐色
25	91-E-163	壺	7.5	14			S Z03	橙褐色
26	91-E-166	壺		12.5			S Z03	橙褐色
27	91-E-130	壺	13				S Z03	橙褐色
28	91-E-164	壺		14.5			S Z03	橙褐色
29	91-E-156	壺					S Z03	赤彩
30	91-E-158	高杯杯部					S Z03	乳褐色
31	91-E-159	高杯杯部					S Z03	乳褐色
32	91-E-160	高杯脚部			15.5		S Z03	被熱黒変 剥落
33	91-E-161	台付壺?脚部			10		S Z03	橙桃色 風化
34	91-E-157	高杯脚部					S Z03	スス付着 黒変
35	91-E-154	高杯脚部			12.5		S Z03	白褐色
36	91-E-153	甕	12.5				S Z03	ハケメ刻み 茶褐色
37	91-E-119	須恵器蓋					S Z04	青灰色
39	91-E-111	小形鉢		8.5			S D01	S Z02から流入 橙褐色
40	91-E-096	灰釉陶器碗			7.5		S D01	
41	91-E-109	灰釉陶器皿	13				S D01	
42	91-E-095	灰釉陶器碗	17		8.5	4.5	S D01	
43	91-E-102	灰釉陶器			5.5		S D01	
44	91-E-103	須恵器碗			6		S D01	糸切り底
45	91-E-101	須恵器盤	17		8.5	3	S D01	
46	91-E-162	須恵器壺		22.5	13		S D01	
47	91-E-110	土師器甕	17				S D01	
48	91-E-004	灰釉系陶器小碗			5		S E01	
49	91-E-001	灰釉系陶器小皿	8.5		4.5	2.5	S E01	
50	91-E-003	灰釉系陶器碗			8		S E01	高台にモミ痕 砂粒含む
51	91-E-002	灰釉系陶器碗	17		8.5	5.5	S E01	高台にモミ痕 砂粒含む
52	91-E-022	土師器鍋					S E01	
53	91-E-023	土師器鍋					S E01	
54	91-E-057	灰釉系陶器小皿	8		4.5	2	S K02	
55	91-E-058	灰釉系陶器碗			6		S K03	無高台 礫含む
56	91-E-059	灰釉系陶器碗			5		S K03	均質 高台にモミ痕
57	91-E-056	系釉系陶器碗	15		6.5	5	S K03	均質 高台にモミ痕
58	91-E-070	灰釉系陶器碗	11		5	2.5	S K07	
59	91-E-071	白磁	14.5				S K07	
60	91-E-052	須恵器杯			8.5		S K04	
61	91-E-061	灰釉陶器皿	11		6	2.5	S K04	
62	91-E-054	灰釉系陶器小碗	11		5.5	3.5	S K04	
63	91-E-037	灰釉系陶器小碗			5.5		S K04	
64	91-E-038	灰釉系陶器碗			7		S K04	
65	91-E-043	灰釉系陶器碗	17.5				S K04	スス付着
66	91-E-050	灰釉系陶器碗			6.5		S K04	スス付着
67	91-E-060	灰釉系陶器碗			7		S K04	
68	91-E-063	灰釉系陶器碗			7.5		S K04	
69	91-E-064	灰釉系陶器碗			7		S K04	
70	91-E-051	灰釉系陶器碗	15.5		6	6	S K04	
71	91-E-065	灰釉系陶器碗			6.5		S K04	
72	91-E-053	灰釉系陶器碗			7		S K04	
73	91-E-036	灰釉系陶器碗			8		S K04	
74	91-E-055	灰釉系陶器碗	16.5				S K04	スス付着
75	91-E-035	灰釉系陶器碗			8.5		S K04	内面炭化物付着
76	91-E-039	灰釉系陶器碗			6		S K04	
77	91-E-040	灰釉系陶器碗			7		S K04	
78	91-E-075	灰釉系陶器小碗			-5.5		S K04	
79	91-E-074	土師器皿					S K04	ロクロ
80	91-E-069	土師器皿			4		S K04	ロクロ 糸切り底

番号	登録番号	種別	口径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	出土遺構	備考
81	91-E-062	土師器皿	11		6	3	SK04	ロクロ 糸切り底
82	91-E-032	土師器皿	11		5	3	SK04	ロクロ 糸切り底
83	91-E-049	土師器皿	8.5				SK04	
84	91-E-077	土師器皿	8				SK04	ロクロ
85	91-E-046	土師器皿	9				SK04	ロクロ
86	91-E-068	土師器皿	11				SK04	ロクロ
87	91-E-033	土師器皿			5		SK04	ロクロ 糸切り底
88	91-E-045	土師器皿			6		SK04	ロクロ 糸切り底
89	91-E-066	土師器皿			5		SK04	ロクロ 糸切り底
90	91-E-048	土師器皿			5		SK04	ロクロ 糸切り底
91	91-E-073	土師器皿					SK04	ロクロ 糸切り底
92	91-E-044	土師器皿					SK04	ロクロ
93	91-E-076	土師器皿			7.5		SK04	ロクロ 糸切り底
94	91-E-047	土師器皿			7.5		SK04	ロクロ 糸切り底
95	91-E-041	土師器碗?			7		SK04	ロクロ
96	91-E-067						SK04	
97	91-E-034	常滑			26.5		SK04	
98	91-E-072	土師器鍋	18				SK04	
99	91-E-042	土師器鍋	18.5				SK04	
100	91-E-078	土師器羽釜					SK04	
101	91-E-108	灰釉系陶器碗	15.5				SD02	均質
102	91-E-107	灰釉系陶器碗			3		SD02	均質
103	91-E-026	灰釉系陶器碗	15.5		7	5	SD03	
104	91-E-028	壺	10				SD03	
105	91-E-025	灰釉系陶器碗	12.5		4	3.5	SD03	均質
106	91-E-027	灰釉系陶器碗			5		SD03	均質
107	91-E-024	灰釉系陶器碗	10.5		4	2.4	SD03	均質
108	91-E-087	灰釉陶器碗			7.5		SD05	
109	91-E-083	灰釉陶器段皿	13				SD05	
110	91-E-084	灰釉陶器碗			6.5		SD05	
111	91-E-090	灰釉系陶器小碗	9		5.5	2.5	SD05	
112	91-E-089	灰釉系陶器碗			6.5		SD05	
113	91-E-093	土師器皿	10.5		6	2	SD05	ロクロ 糸切り底
114	91-E-086	灰釉系陶器碗			6.5		SD05	高台にモミ痕
115	91-E-085	灰釉系陶器碗			4		SD05	均質 高台にモミ痕
116	91-E-091	灰釉系陶器碗			6		SD05	高台にモミ痕
117	91-E-088	灰釉系陶器碗			7.5		SD05	高台にモミ痕
118	91-E-092	白磁碗					SD05	
119	91-E-094	重圓皿			4		SD05	大窯 16世紀前半
120	91-E-100	天目茶碗					SD05	大窯 16世紀前半
122	91-E-079	灰釉系陶器碗			6		SD06	高台にモミ痕 内面にスス付着
123	91-E-080	灰釉系陶器碗			6.5		SD06	
124	91-E-082	土師器皿			6.5		SD07	ロクロ 糸切り底
125	91-E-081	土師器			5		SD07	
126	91-E-007	須恵器杯			5		SD09	
127	91-E-005	灰釉陶器碗			7		SD09	
128	91-E-016	灰釉陶器段皿			6		SD09	
129	91-E-014	灰釉陶器皿			6		SD09	
130	91-E-017	灰釉系陶器小皿			4.5		SD09	
131	91-E-015	灰釉系陶器小皿			4		SD09	
132	91-E-018	灰釉系陶器碗	15				SD09	均質
133	91-E-008	灰釉系陶器碗			9		SD09	
134	91-E-006	灰釉系陶器碗			6.5		SD09	高台にモミ痕
135	91-E-009	灰釉系陶器碗			10.5		SD09	
136	91-E-012	灰釉系陶器碗			7		SD09	高台にモミ痕
137	91-E-010	灰釉系陶器碗	15		6.5	5.5	SD09	高台にモミ痕
138	91-E-011	灰釉系陶器碗	15		7	5.5	SD09	高台にモミ痕
139	91-E-013	灰釉系陶器碗			5.5		SD09	高台剥落
140	91-E-151	灰釉系陶器碗	27.5	37	17	36	SD09	
141	91-E-019	土師器甕					SD09	
142	91-E-020	土師器皿	9				SD09	ロクロ 糸切り底
143	91-E-021	土師器鍋					SD09	
144	91-E-105	灰釉系陶器碗	17		-6	-5.5	SD10	
145	91-E-106	須恵器碗	12		4.5	4	SD17	
148	91-E-148	壺口縁					包含層	灰褐色
149	91-E-134	壺		15	3.5		包含層	乳褐色
150	91-E-147	高杯杯部					包含層	
151	91-E-135	甕	17.5				包含層	風化
152	91-E-136	甕	19				包含層	乳褐色 やや風化
153	91-E-149	土師器甕					包含層	褐色
154	91-E-137	灰釉陶器皿	12.5		6.5		包含層	
166	91-E-170	壺					S Z03主体部1	
167	91-E-171	壺					S Z03主体部1	
168	91-E-173	須恵器					包含層	
169	91-E-169	壺					包含層	

付 論

弥生時代墳墓の土器、あるいは〈まつり〉の土器 ——後期を中心として——

I

これまで、〈まつり〉は「祭祀的」という用語によってくくられてきた。だが、「祭祀的」とは一体どのような事態を指すのであろうか。

現状において「祭祀的」という概念は、いわばブラックボックスであって、われわれが分類を行うにあたって、対象化できないものを貯蔵する場所となっている。一旦「祭祀的」とされてしまえば、それは分析の対象とされることもなく、閉じ込められてしまう⁽¹⁾。

「祭祀的」とは、具体的な事態の想定なくして、イメージ化は不可能である。しかし、「祭祀的」としてくくられたものの多くは遺物であり、しかも廃棄されたものがほとんどである。その「廃棄」現象のなかに祭祀を読み取ることは、きわめて至難である。

「祭祀的」遺物は、「特殊である」といわれる遺物が往々にして「祭祀的」と形容されることによって生まれる。だが、同じ「特殊である」といわれても、それが遺構であれば、「祭祀的」といわれることは少ない。「祭祀的」とは、「物（モノ）」の属性であって、構築物には伴わないのであろうか⁽²⁾。

現代のわれわれにとって、異文化が特殊であると同様に、過去の文化も特殊である。したがって、われわれに属するもの以外はすべてが特殊となるであろう。しかしだからといって、われわれはそれらに対して「祭祀的である」と形容することはない。祭祀的であるか否かは、われわれと対象物との関係ではないからだ。

「祭祀的」と言う以上は、「祭祀」自体が分析の対象にならなければならない。それは人間活動であり、事物（遺構・遺物）はその一部を構成するに過ぎない。そして、考古学が対象にするものは、事物を経由しての人間活動であるはずだ。廃棄自体をもし「祭祀的」と言うのであれば、他の廃棄との区別をどのようにしてつけるのか、を明らかにしなければならない。つまるところ、それは事物に関係する〈時〉と〈場所〉の問題ということになろう。

II

〈まつり〉の場面には、人の身ひとつでの身体動作と、道具を用いての身体動作との二つが考えられる。前者は考古学的に接近するのは難しいが、後者は遺物として残れば対象化できる。

集落内での活動は普通〈日常的〉という性格づけが行われる。それに対して墓域での活動は〈非日常的〉といわれる。だが、〈祭り〉は生活域で行われても〈非日常的〉なものである。

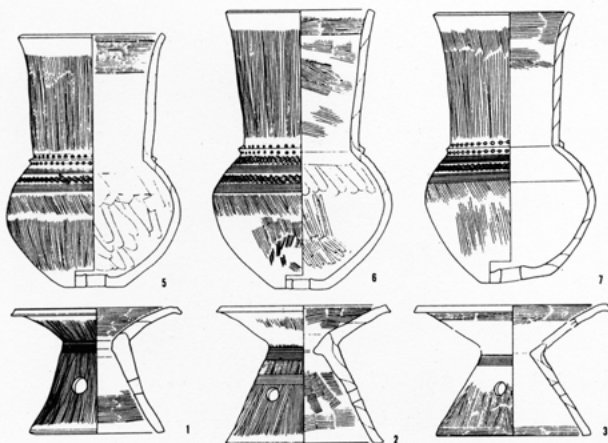
〈日常的〉〈非日常的〉という区分は時間的な基準による場合と、空間的な基準による場合の二つが考えられるのであり、上述の事態はそれによって区分されねばならない⁽³⁾。そこで、遺物について〈日常的〉か〈非日常的〉かを判断しようとする場合、集落内での遺物のあり方についてそうした説明をすることはほとんど不可能である。われわれにできるのは、用途の明確なものを〈日常的〉とし、不明確なものを〈非日常的〉とするぐらいのことである。そしてこの〈非日常的〉とされるものが、一般的に「祭祀的」とされてきた経緯がある。

このように、生活域の資料について日常的要素と非日常的要素を区分することは困難だが、墓域においてはどうかであろうか。墓=非日常的としてしまえば、すべて非日常的要素となるが、出土遺物の多くは生活域出土のものとの区別がつかない。二次的な加工が遺物に施してあれば、しかもそれが生活域で考えられる用途あるいは機能を損なうものなら、日常的要素に共通しないということで〈非日常的〉ということもできる。しかし、それは生活域における〈日常性〉を变形して〈非日常性〉に転化させたものに過ぎないのであり、〈非日常性〉固有でない⁽⁴⁾。

III

伊勢湾周辺地方の弥生時代墳墓は、方形周溝墓の場合、凹線紋系土器出現期（中期4）以後には周溝内から多量の土器が出土するようになる。それ以前には土器を全く伴わないか、あっても壺を中心として2、3個体が普通であったのが、ほとんどの方形周溝墓から土器が出土するようになるだけでなく、多いときには壺・高杯・器台・鉢・甕などが何十個体も出土することもある。このような凹線紋系土器出現期以後の様相は、単純化して言えば方形周溝墓と土器とのつながりが緊密になったことを示している⁽⁵⁾。

土器の多くは破片で出土するが、完全なかたちで出土するものもある。凹線紋系土器期には多量の土器群が周溝内から破片となって出土することが多く、そのすべてを墳丘上に置かれたものが墳丘の崩落ともなって転落したと観るには困難が伴うが、それ以後には完形品が多くなることから、墳丘上に置かれたという観かたは妥当であると考えられる。現状では墳丘上にどのように置かれていたのか知ることができないとはいえ、出土地点が一点に限定されないことを見れば複数の地点に置かれていたと考えられる。



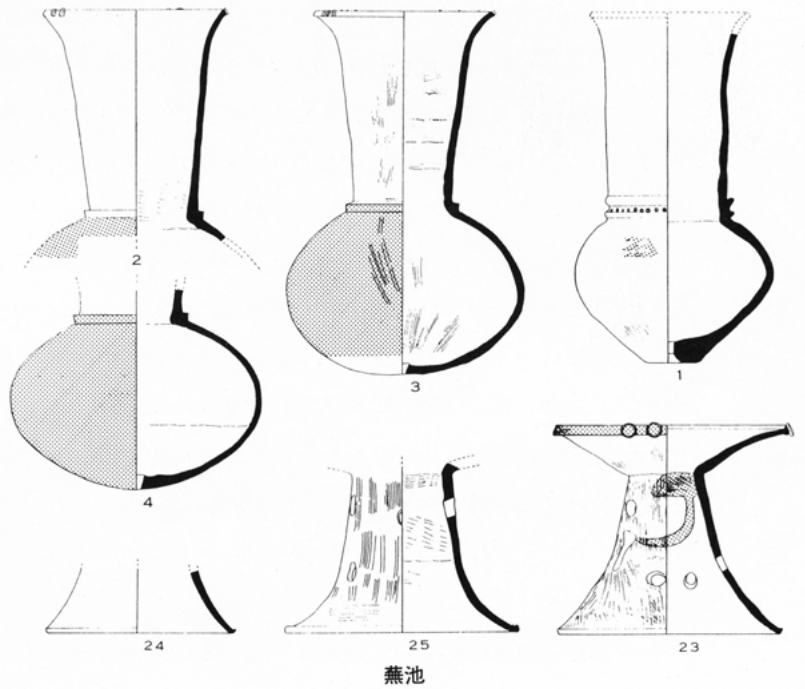
勝川 SZ19

これら周溝内から出土する土器には「供献土器」という名称が与えられている。だが、「供献土器」とされても、土器そのものが供献されたのか土器の内容物が供献されたのかについて述べたことにはならない。破碎されたとする場合も、「歌舞飲食」後に廃棄されたというのであるが、食器ばかりが出土することはないから、妥当性は低いだろう⁽⁶⁾。

土器は日常生活の重要な器物である。食事の準備の煮炊きを使う器、食べ物を盛り付ける器、食糧の貯蔵、動産の貯蓄など、用途は多様である。だから、

日常生活に用いられたのと同じ土器が方形周溝墓から出土したなら、土器群としては同じ形態であることになる。それでも性格が日常的ではないというのであれば、「墓からの出土」という一点が区分の基準となる。

居住域と墓域は、環濠集落では濠によって分離されることがある。だが実際は、それは単なる外観であって、環濠が機能していなければ分離するものは何もない。弥生時代には居住域と墓域を分け隔てる構築物は存在しないのだから、生活用具としての土器と墓の土器を区分しようとするなら、それは土器に即して検討しなければならないことになる⁽⁷⁾。



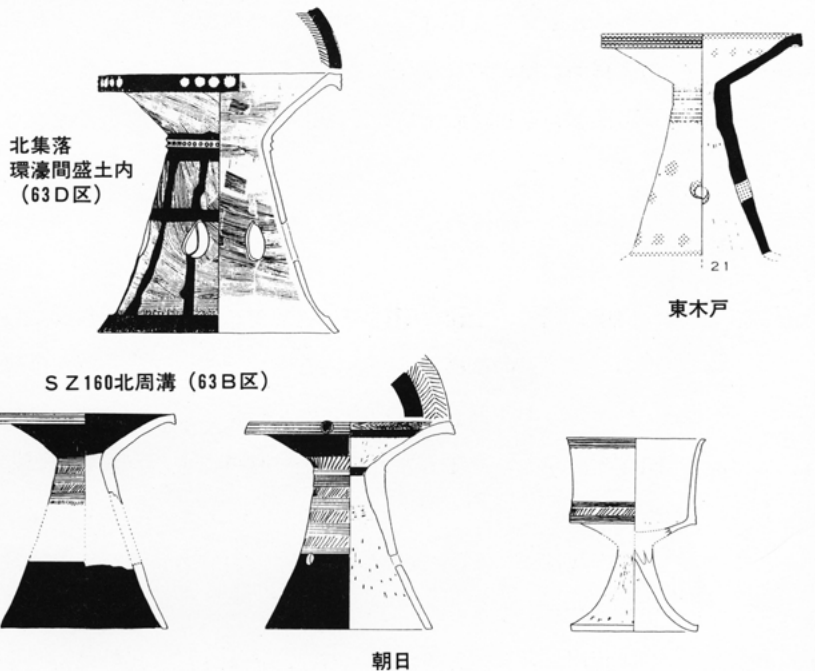
燕池

IV

伊勢湾地方の弥生時代墳墓には、出土土器に焼成前穿孔の行われたものがある。山中式期では、三重県津市高松遺跡や同大ヶ瀬遺跡で検出された墳墓出土の高杯杯底部中央に穿孔が施されていた。また、愛知県一宮市燕池遺跡や春日井市勝川遺跡 S Z 19 出土土器では、焼成前穿孔が底部に施された長頸壺が含まれている。欠山式期では愛知県大口町仁所野遺跡の方形周溝墓から焼成前穿孔の施された高杯が出土している。弥生時代中期には、一部壺などの下胴部に焼成後穿孔されたものはあったが、焼成前穿孔されたものはほとんどなかったから、これは新しい様相である。

上記のような焼成前穿孔土器とともに出土する特徴的な土器として、高杯脚部とは異なる作りでやや大形の器台 A がある。器台 A は、以前の凹線紋系土器出現・展開という新しい土器体系の中でもほとんど皆無に等しかったもので、それが山中式期になってにわか目だつようになる。

器台 A は、高杯の製作技法上の流れ

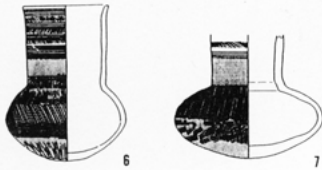


北集落
環濠間盛土内
(63D区)

東木戸

S Z 160北周溝 (63B区)

朝日



6



23

高蔵SD04

に含まれず独自の器種としてあり、山中式期中ごろ以降に普及する高杯脚部相同形（→器台B）とは異なる。朝日遺跡、名古屋市高蔵遺跡例については口縁部の特徴に共通性があり、同一系譜に置くことができる。ただ、例数の著しく少ないことは否めないであり、なお検討の余地を残している。

7 蕪池遺跡では、方形周溝墓から出土したかどうか明確ではないものの、焼成前穿孔の壺3個体と器台A2個体が出土している。勝川遺跡では、S Z19から焼成前穿孔壺と器台Aが3セット出土している。勝川遺跡の器台は脚部がやや低いものの、壺と器台の製作技法が共通していること、脚台部が他では認められない形態をしていることが注目される。

多数の方形周溝墓が検出された朝日遺跡では、これまでのところ底部焼成前穿孔長頸壺は出土していない。だが、器台Aは出土している。やや古手の1点は北居住域2条環濠間の盛土下部から出土している。他には方形周溝墓S Z160からの出土例がある。しかし、現状で居住域出土例の有無ははっきりしていない。

高蔵遺跡ではSD04からやや小形化傾向のうかがえる器台Aが出土している。焼成前穿孔は施されていないが、組み合わせ可能と考えられる長頸壺は出土している。

以上を整理する。

焼成前穿孔土器。これには長頸壺と高杯がある。そして、長頸壺は器台Aと組み合わせる場合以外の出土例は朝日遺跡以外で知られていない。長頸壺と器台Aの関係は勝川遺跡例を参考にすると、製作時にすでに組み合わせが決定されていたということになる。

つまり、

- ①「焼成前穿孔長頸壺+器台A（のみ、かあるいはそれら+その他の土器）」
- ②「器台A（のみ、かあるいは器台A+焼成前穿孔土器以外の土器）」
- ③「焼成前穿孔高杯+その他の土器」

の3類型が設定できる。

上記3類型は、時間的には①が古く②と③が並行して、③が後まで残るという変遷図式を描くことができる⁽⁸⁾。

V

山中式期に、上記3類型が出現する。これは集落遺跡で確認されていない。したがって、現状では土器の〈墳墓の様相〉ということができる。

しかし、それは様式的な安定性を獲得することなく、通常タイプの器台Bや長頸壺の普及、台付長頸壺の出現あるいは、器台Bと受口状口縁系浅鉢などの組み合わせに変化して無規定的な様相を見せるようになる。

欠山式期にも上記③は存在するが、限定されている。やはり、広域化するだけの基盤が成立していなかったということか。

墳墓用のみ製作される土器は、上記3類型以外にも山中遺跡S Z03小形壺に見るように、粗雑さ

を特徴とする土器として欠山式期の初相には出現している。「粗雑さ」は、集落出土土器との形態・製作技法上の共通性をほとんどもたないのであり、その「粗雑さ」が〈非日常性〉を示しているように思われる。

墳墓出土土器の独自性の発現は、伊勢湾地方について見る限り、山中式期への移行と同時である(あるいは山中式期の指標の一つがそれである⁽⁹⁾)。しかし、その初期墳墓の様相である①は安定して継承されることなく、②③と展開する多様化の中に埋没する。これに代わって新たに浮上するのが、精粗の2相であり、一方の精を代表するのがパレス式広口壺である⁽¹⁰⁾。

(石黒立人)

註

- (1) ここで「祭祀的」という意味を辞書的に規定しても、それによって得るところはほとんどないであろう。ブラックボックスであるということは、意味が他律的であることを含意するのであり、自律的な規定を志向している本稿ではそれこそ無意味となる。
- (2) 「廃棄土坑」という用語があるが、これは意味的には不適切である。「廃棄された土坑」であるのか、「廃棄物を埋めるための土坑」であるのか、など十分に規定できていない。類語的である「祭祀土坑」という用語も同様に不適切である。

「祭祀」と「土坑」との関係が十分に整理説明されることなく、特定遺構の性格規定にまで踏み込んでいることがまみられる。

「祭祀土坑」という名称では、「祭祀が行なわれた土坑」であるのか、「祭祀に使われた土坑」であるのかがはっきりしないし、後者の場合でも多くの遺物は廃棄されたものであるから、「廃棄」=「祭祀」という図式化を生じる余地さえ内包してしまうことになる。検討課題である。
- (3) エドマント・リーチ(青木保、宮坂敬造訳)『文化とコミュニケーション』紀伊国屋書店1981、参照。
- (4) 〈日常性〉と〈非日常性〉は、二項的に明示的に対立するものでもなく、両者は同一事態の二面であることが多い。つまり、限定された意味空間において限定された意味を付与される原因または結果としての〈日常性〉と〈非日常性〉であるにすぎないのであり、意味空間から切り離されてもなお、ことさら〈非日常性〉固有を問題にするとすれば、それは人間活動のダイナミックスを軽視することになるといえる。我々は〈日常性〉〈非日常性〉を成り立たせている意味空間そのものの把握に向かわねばならない。
- (5) 生活レベルの意味空間に属していた土器が、非生活レベルの意味空間に取り込まれていった事態を示しているのであろう。
- (6) 「破碎された」というような人為性を観ることは、実際問題として困難である。恐らくどんなにこまかく出土状態を分析したところで、「歌舞飲食」の場を確定しない限り、「破碎された」というだけの根拠を得ることは不可能である。そもそも「歌舞飲食」の場が把握できないのだから、画餅と言わざるを得ない。
- (7) 非生活空間に取り込まれた土器が、両義性を喪失して非生活空間に固着され、その結果生活空間との異質性を顕わすようになる段階をもって、「祭祀土器の成立」と言うことができる。

この「祭祀土器の成立」を問うことが、本稿の主題の一つでもある。
- (8) ①②③を時間的に位置づけるなら、本文のようになるが、空間的に位置づけること

ができるのであれば、土器に表わされた秩序をそこに読み取ることもできるだろう。つまり、方形周溝墓制が、特に後期にあっ
ては一遺跡(集団)内で完結することなく、
地域社会として広域性のなかに秩序化され
ているかもしれないのである。

- (9) 一器種の出現で画期を区切るか、複数器種の出現で画期を区切るのかという点にも関係するが、これは量の問題ではない。広域性の問題、つまり、外的契機の重大さがどこにあるのかといった問題である。この意味で、器台の表面化は外的契機の最たるものであり、中期末以来の方向性をより明確に表わしたものと言える。
- (10) いわゆる「欠山式」の成立に対応すると考えている。

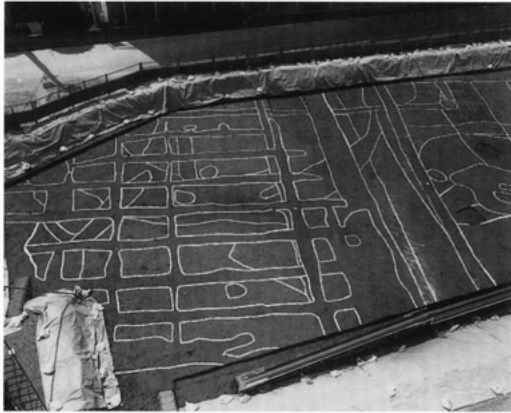
参考、引用文献

- 一宮市史編さん室 1967『新編一宮市史 資料編(二)』
- 大口町教育委員会 1983『仁所野遺跡』
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1991『朝日遺跡 I』
- 愛知県教育サービスセンター 1984『勝川』
- 津市教育委員会 1970『高松弥生墳墓発掘調査報告』
- 名古屋市教育委員会 1987『高蔵遺跡発掘調査報告書』

報 告 書 抄 録

フリガナ	ヤマ ナカ イ セキ ニ							
書 名	山 中 遺 跡 II							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編 著 者 名	石黒立人, 服部俊之, 森 勇一, 前田弘子							
編 集 機 関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24							
発 行 年	西暦1993年 3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヤマ ナカ 山 中	イチノミヤシ ハギワラチヨウ 一宮市 萩原町 富田方字山中地	23203	02078	35°17' 8"	136°46'20"	19910901 19911130	1,300	県立尾張看護 専門学校増築
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
山 中	集落跡	弥 生 古 墳 中 世	方形周溝墓 3 円墳 1 溝・土坑・井戸	大形壺 1 金環 山茶椀	小形壺 4			

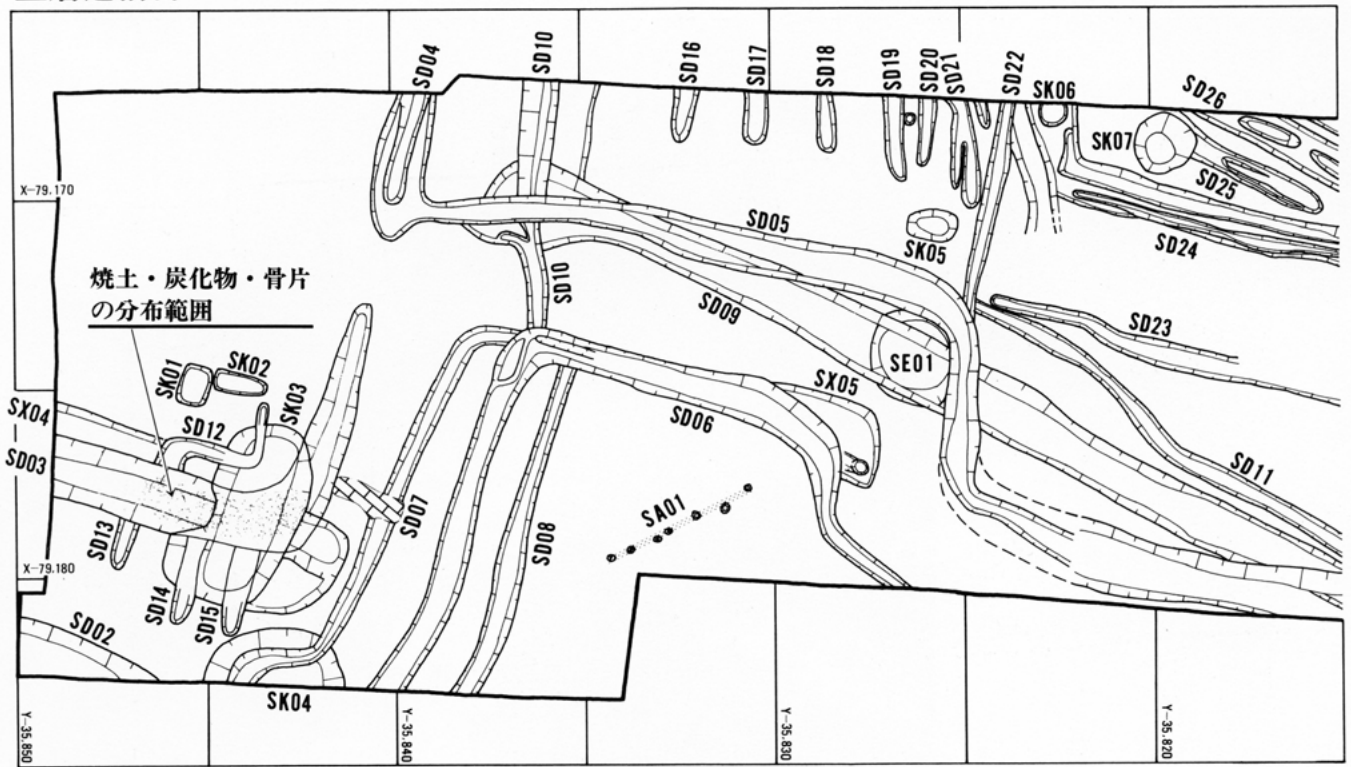
図 版



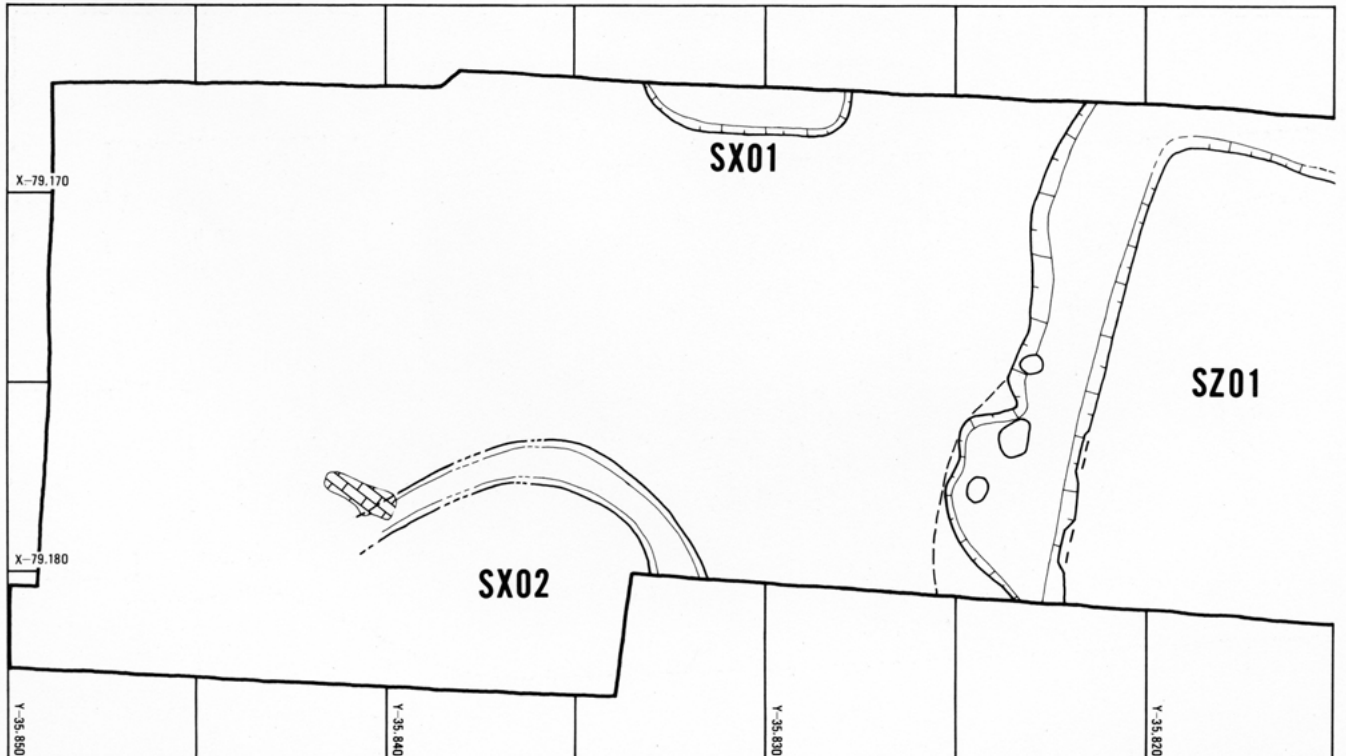
遺構の検出状態

図版 1

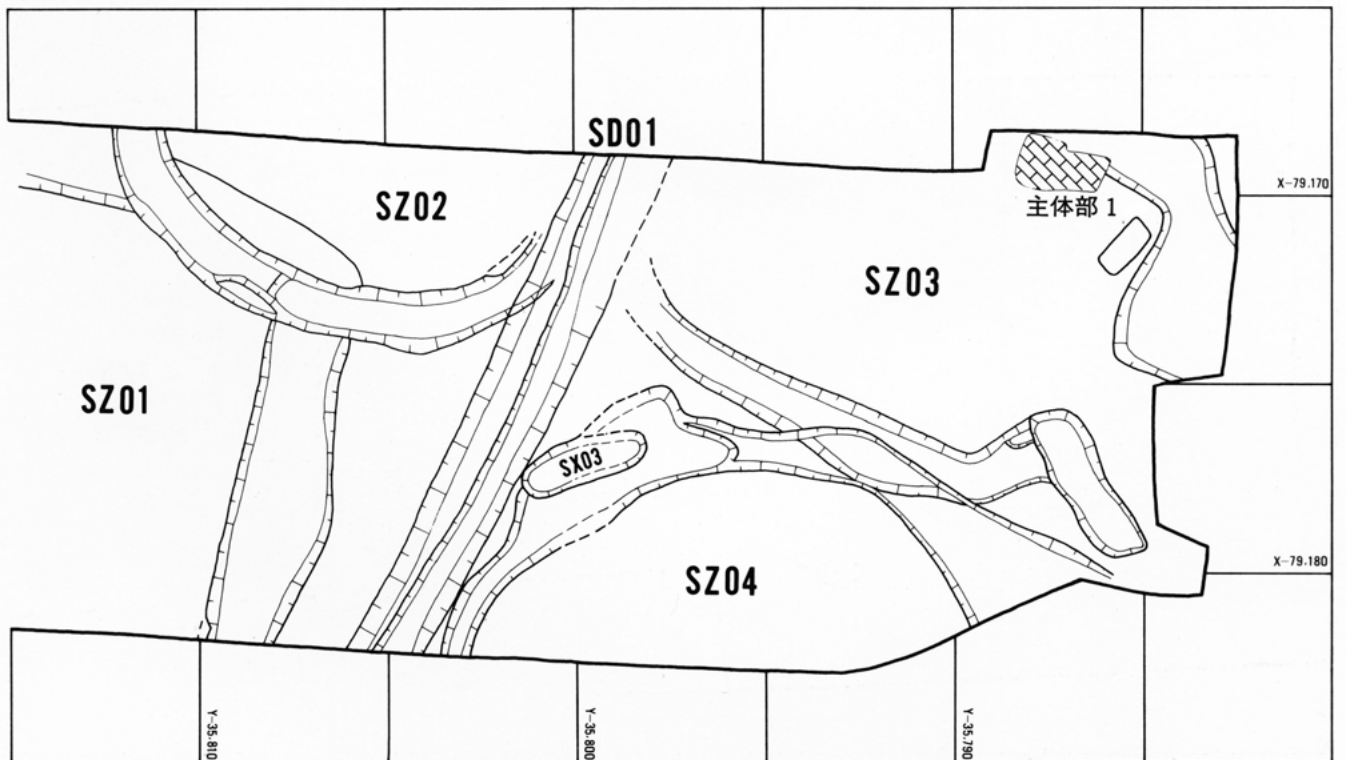
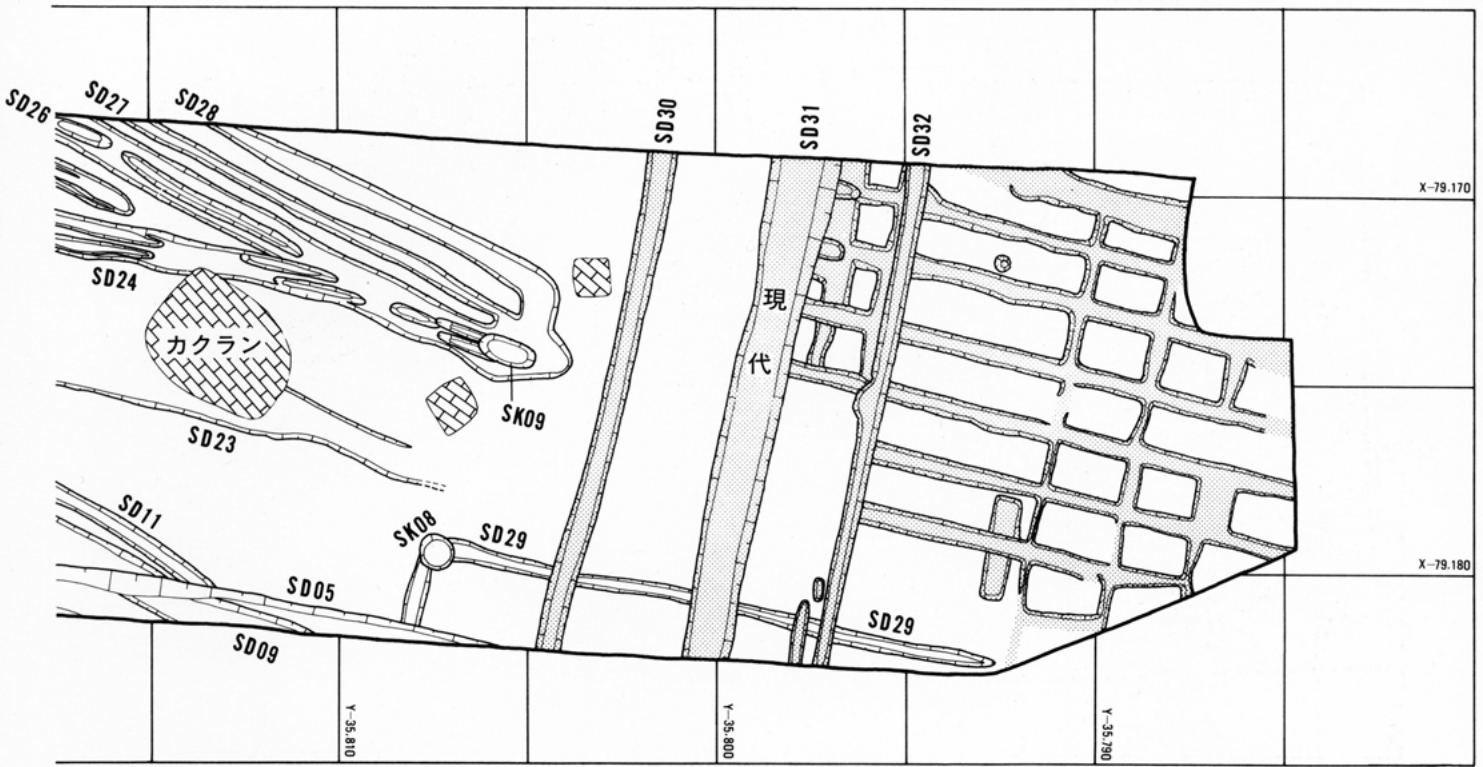
上層遺構群 (1 : 200)



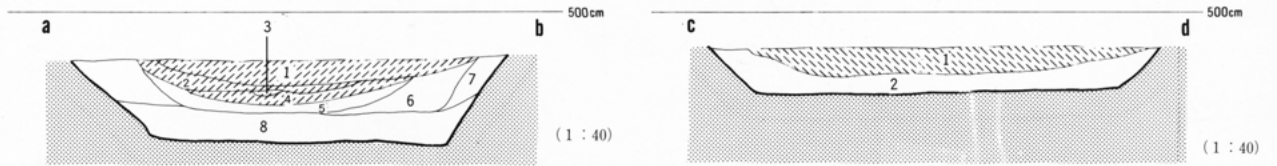
下層遺構群 (1 : 200)



図版 2

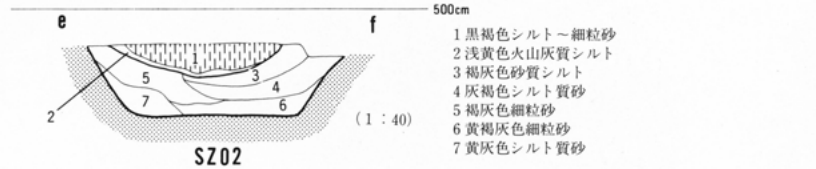
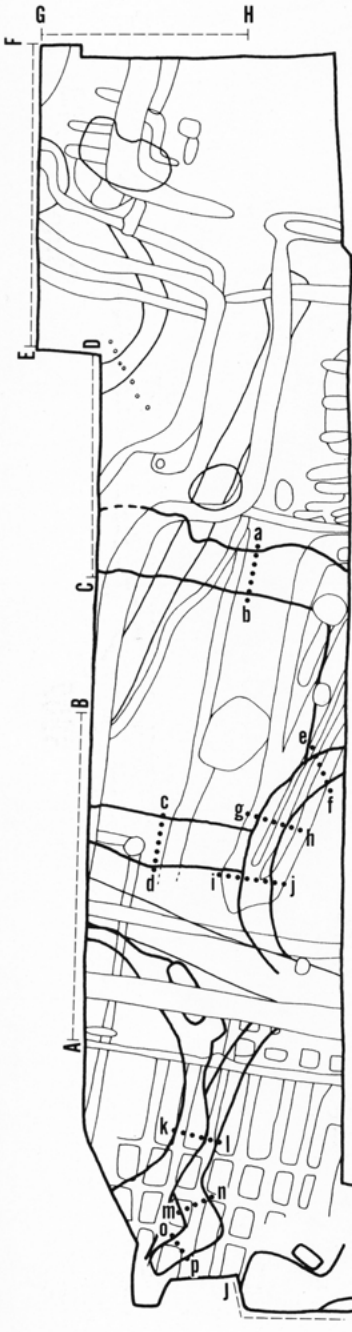


図版 3

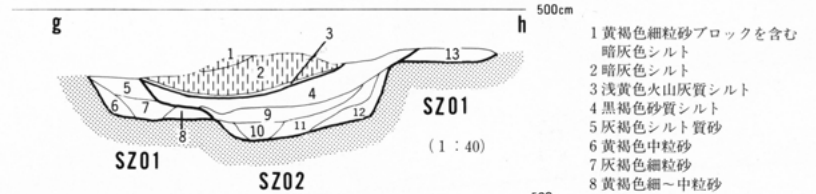


- 1 暗灰色シルト
- 2 暗灰色砂質シルト
- 3 褐灰色シルト
- 4 暗灰色シルト
- 5 褐灰色砂質シルト
- 6 褐灰色シルト質砂
- 7 灰褐色細粒砂
- 8 暗灰色シルトブロック含む

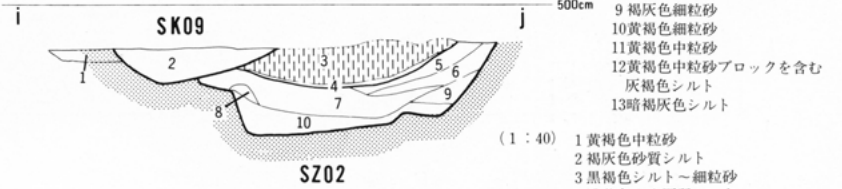
- 1 暗灰色シルト
- 2 褐灰色中粒砂



- 1 黒褐色シルト～細粒砂
- 2 浅黄色火山灰質シルト
- 3 褐灰色砂質シルト
- 4 灰褐色シルト質砂
- 5 褐灰色細粒砂
- 6 黄褐色細粒砂
- 7 黄灰色シルト質砂

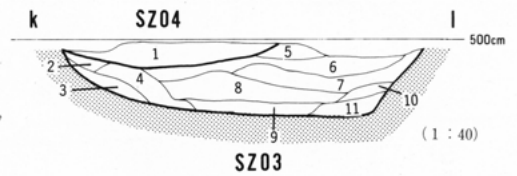


- 1 黄褐色細粒砂ブロックを含む
- 2 暗灰色シルト
- 3 浅黄色火山灰質シルト
- 4 黒褐色砂質シルト
- 5 灰褐色シルト質砂
- 6 黄褐色中粒砂
- 7 灰褐色細粒砂
- 8 黄褐色細～中粒砂
- 9 褐灰色細粒砂
- 10 黄褐色細粒砂
- 11 黄褐色中粒砂
- 12 黄褐色中粒砂ブロックを含む
- 13 暗褐色シルト

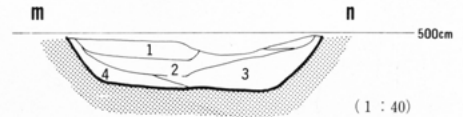


- 1 黄褐色中粒砂
- 2 褐灰色砂質シルト
- 3 黒褐色シルト～細粒砂
- 4 浅黄色火山灰質シルト
- 5 灰褐色砂質シルト
- 6 灰褐色シルト質砂
- 7 褐灰色砂質シルト
- 8 灰褐色細粒砂
- 9 灰褐色細～中粒砂
- 10 黒褐色シルト

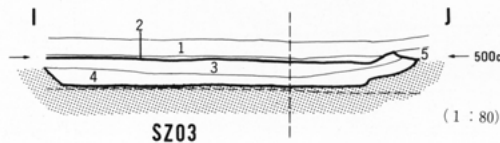
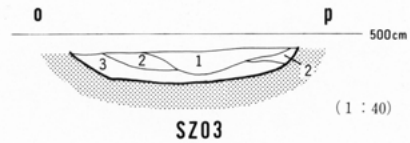
- 1 暗灰褐色細粒砂
- 2 黄褐色細粒砂
- 3 黄褐色シルト
- 4 黄灰色細粒砂
- 5 暗灰色シルト
- 6 灰褐色シルト
- 7 黄褐色細粒砂
- 8 黄褐色細～中粒砂
- 9 黄褐色中粒砂
- 10 黄褐色細粒砂
- 11 黄褐色中粒砂



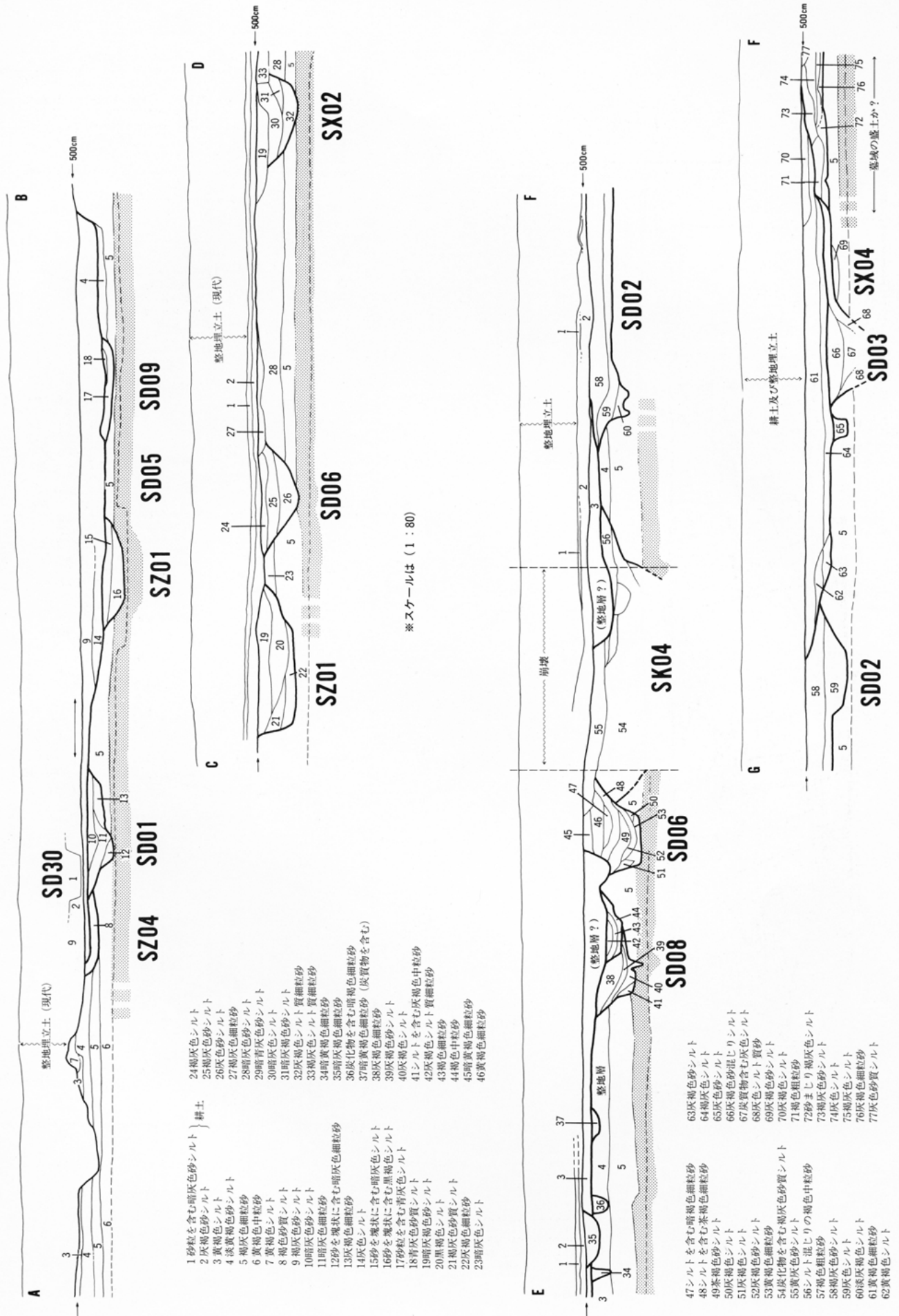
- 1 暗灰褐色細粒砂
- 2 灰褐色シルト
- 3 黄灰褐色細粒砂
- 4 黄灰褐色砂シルト



- 1 暗灰褐色砂質シルト
- 2 暗灰色シルト
- 3 黄灰褐色細粒砂



- 1 褐灰色砂質シルト (水田)
- 2 灰褐色砂質シルト (床土)
- 3 灰褐色シルト質砂
- 4 褐色シルト
- 5 褐灰色シルト



- 1 砂粒を含む暗灰色砂シルト
- 2 灰褐色シルト
- 3 黄褐色シルト
- 4 黄褐色シルト
- 5 黄褐色シルト
- 6 黄褐色シルト
- 7 黄褐色シルト
- 8 褐色砂質シルト
- 9 褐色砂質シルト
- 10 暗灰色シルト
- 11 暗灰色シルト
- 12 砂を塊状に含む暗灰色細粒砂
- 13 灰褐色シルト
- 14 灰褐色シルト
- 15 砂を塊状に含む暗灰色シルト
- 16 砂を塊状に含む黄褐色シルト
- 17 砂粒を含む青灰色シルト
- 18 青灰色砂質シルト
- 19 暗灰色シルト
- 20 暗灰色シルト
- 21 褐色シルト
- 22 暗灰色シルト
- 23 暗灰色シルト
- 24 褐色シルト
- 25 褐色シルト
- 26 灰褐色シルト
- 27 暗灰色シルト
- 28 暗灰色シルト
- 29 暗灰色シルト
- 30 暗灰色シルト
- 31 暗灰色シルト
- 32 暗灰色シルト
- 33 暗灰色シルト
- 34 暗灰色シルト
- 35 暗灰色シルト
- 36 炭化物を含む暗褐色細粒砂
- 37 暗褐色細粒砂 (炭質物を含む)
- 38 暗褐色細粒砂
- 39 暗褐色細粒砂
- 40 暗褐色細粒砂
- 41 シルトを含む灰褐色中粒砂
- 42 灰褐色シルト
- 43 褐色シルト
- 44 褐色シルト
- 45 暗褐色細粒砂
- 46 暗褐色細粒砂
- 47 シルトを含む暗褐色細粒砂
- 48 シルトを含む茶褐色細粒砂
- 49 茶褐色シルト
- 50 灰褐色シルト
- 51 灰褐色シルト
- 52 灰褐色シルト
- 53 暗褐色シルト
- 54 炭化物を含む暗灰色砂質シルト
- 55 暗灰色シルト
- 56 シルト混じりの褐色中粒砂
- 57 褐色粗粒砂
- 58 暗灰色シルト
- 59 灰褐色シルト
- 60 灰褐色シルト
- 61 暗褐色細粒砂
- 62 暗褐色シルト
- 63 暗褐色シルト
- 64 暗褐色シルト
- 65 暗褐色シルト
- 66 暗褐色シルト
- 67 炭質物を含む灰褐色シルト
- 68 暗褐色シルト
- 69 暗褐色シルト
- 70 暗褐色シルト
- 71 褐色粗粒砂
- 72 砂まじり暗灰色シルト
- 73 暗灰色シルト
- 74 暗灰色シルト
- 75 暗褐色細粒砂
- 76 暗褐色細粒砂
- 77 灰褐色シルト

崩壊
整地埋立土
SK04
SD06
SD08
SD02

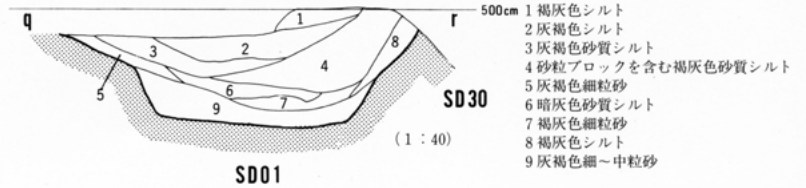
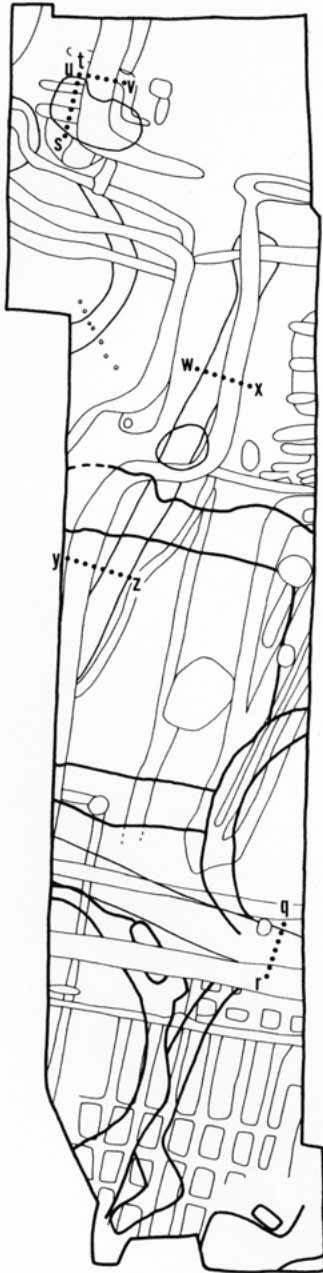
崩壊
整地埋立土
SK04
SD06
SD08
SD02

崩壊
整地埋立土
SK04
SD06
SD08
SD02

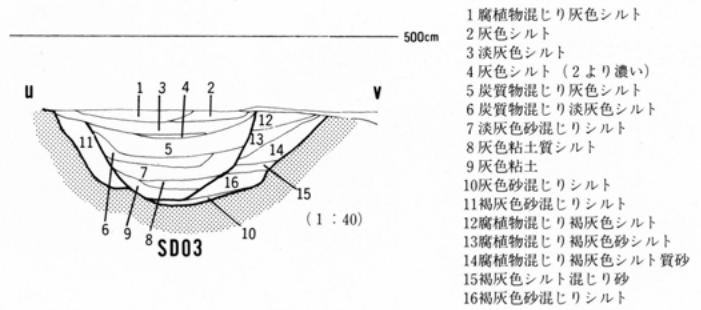
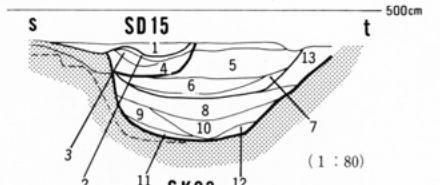
崩壊
整地埋立土
SK04
SD06
SD08
SD02

崩壊
整地埋立土
SK04
SD06
SD08
SD02

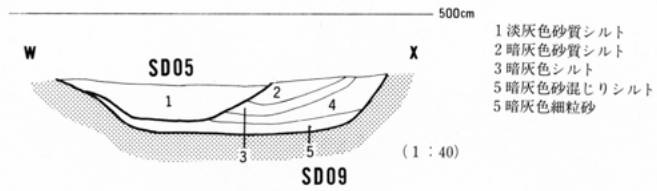
崩壊
整地埋立土
SK04
SD06
SD08
SD02



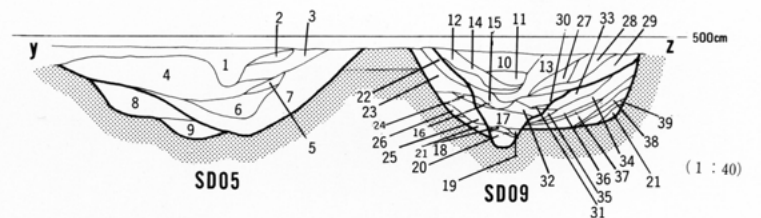
- 1 褐灰色シルト
- 2 褐灰色砂質シルト
- 3 褐灰色シルト
- 4 褐灰色シルト質砂
- 5 褐色砂シルト
- 6 褐灰色シルト
- 7 灰色シルト
- 8 暗青灰色粘質土
- 9 砂ラミナをはさむ暗灰色シルト
- 10 砂を含む暗灰色シルト
- 11 シルトを含む灰色中粒砂
- 12 シルトを含む灰色中粒砂
- 13 炭化物混じり灰褐色シルト



- 1 腐植物混じり灰色シルト
- 2 灰色シルト
- 3 淡灰色シルト
- 4 灰色シルト (2より濃い)
- 5 炭質物混じり灰色シルト
- 6 炭質物混じり淡灰色シルト
- 7 淡灰色砂混じりシルト
- 8 灰色粘土質シルト
- 9 灰色粘土
- 10 灰色砂混じりシルト
- 11 褐灰色砂混じりシルト
- 12 腐植物混じり褐灰色シルト
- 13 腐植物混じり褐灰色砂シルト
- 14 腐植物混じり褐灰色シルト質砂
- 15 褐灰色シルト混じり砂
- 16 褐灰色砂混じりシルト



- 1 淡灰色砂質シルト
- 2 暗灰色砂質シルト
- 3 暗灰色シルト
- 4 暗灰色砂混じりシルト
- 5 暗灰色細粒砂



S D05

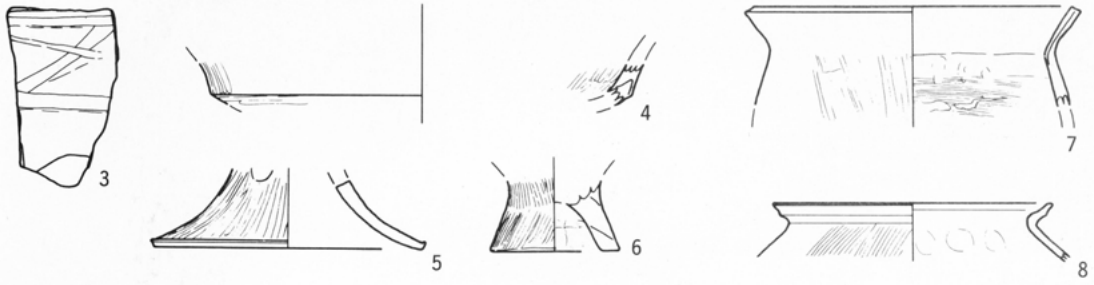
- 1 黄灰褐色細粒砂
- 2 黄灰褐色細～中粒砂 (シルトブロック)
- 3 灰褐色シルト
- 4 褐灰色シルト (3より褐色強い)
- 5 砂粒を含む黄灰褐色シルト
- 6 褐灰色シルト
- 7 青灰色シルト
- 8 灰褐色砂シルト
- 9 青灰色細粒砂

S D09

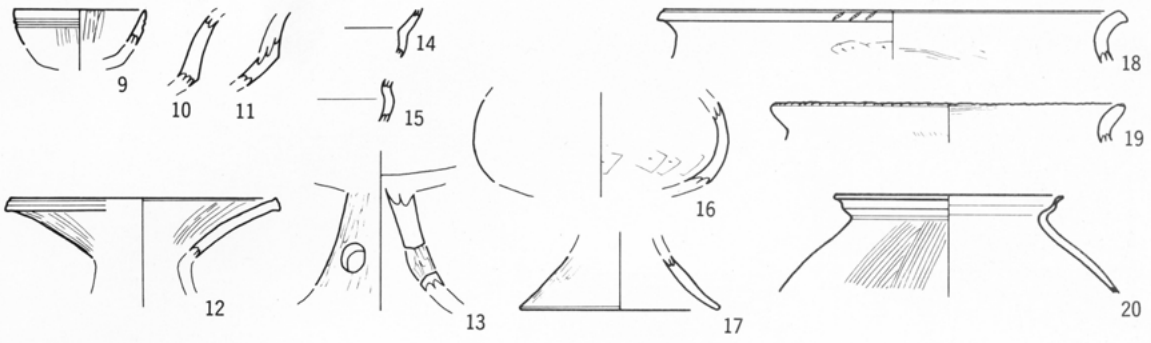
- 10 黄褐灰色シルト
- 11 黄灰褐色シルト
- 12 黄灰褐色砂シルト
- 13 灰褐色シルト
- 14 暗黒褐色シルト
- 15 灰褐色細粒砂
- 16 褐褐色細粒砂
- 17 灰褐色シルト質細粒砂
- 18 炭質物を含む褐灰色シルト
- 19 灰褐色シルト
- 20 褐色細粒砂シルト含む
- 21 細粒砂ラミナのある灰褐色シルト
- 22 褐灰色シルト
- 23 黄褐色シルト (地山ブロック含む)
- 24 灰褐色砂シルト

- 25 茶褐色シルト混じり細粒砂
- 26 茶褐色中粒砂
- 27 茶褐色細粒砂
- 28 暗茶褐色細粒砂
- 29 褐灰色砂シルト
- 30 褐灰色シルト
- 31 暗灰色シルト
- 32 灰褐色砂シルト
- 33 炭質物ブロック灰褐色シルト
- 34 地山ブロック含む茶褐色砂シルト
- 35 灰色シルト
- 36 炭化物を含む灰褐色細粒砂
- 37 茶褐色砂シルト
- 38 茶褐色中粒砂
- 39 茶褐色細粒砂

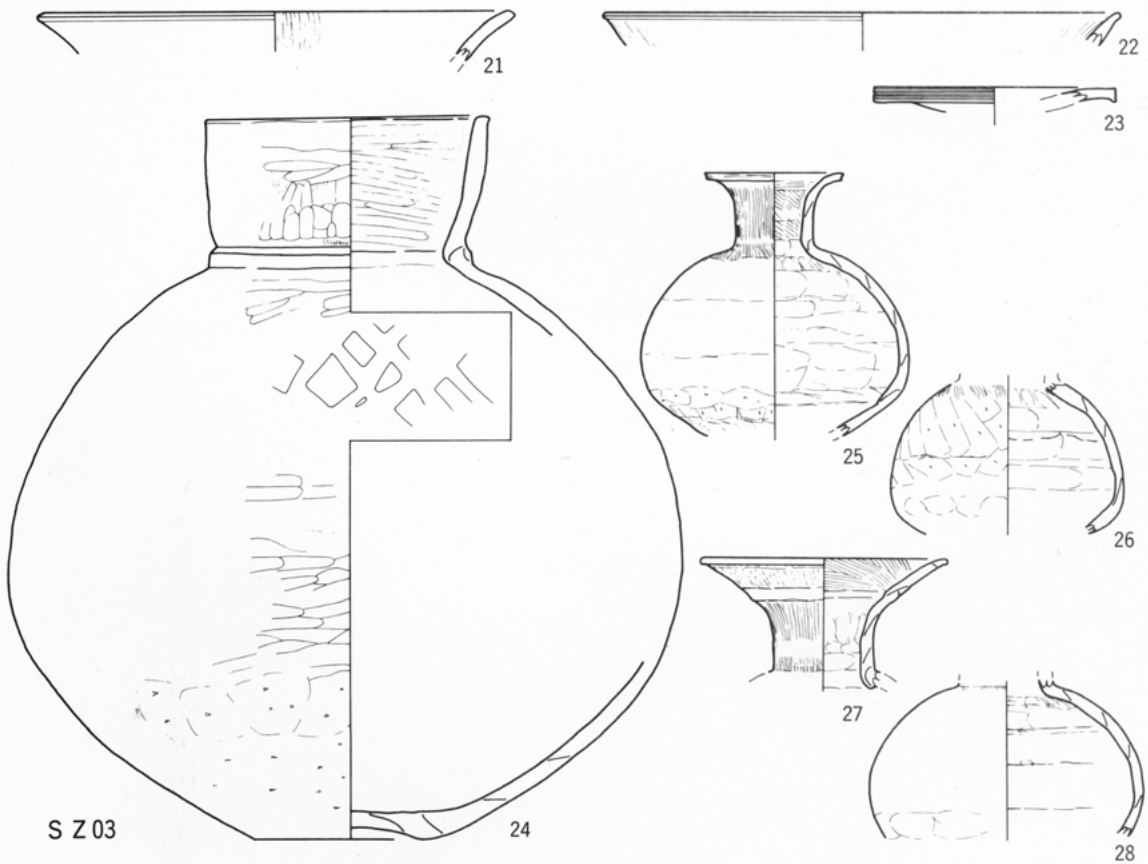
图版 6



S Z 01

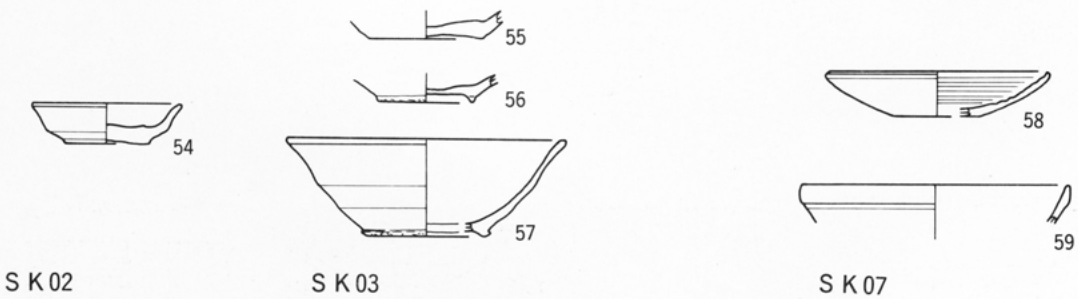
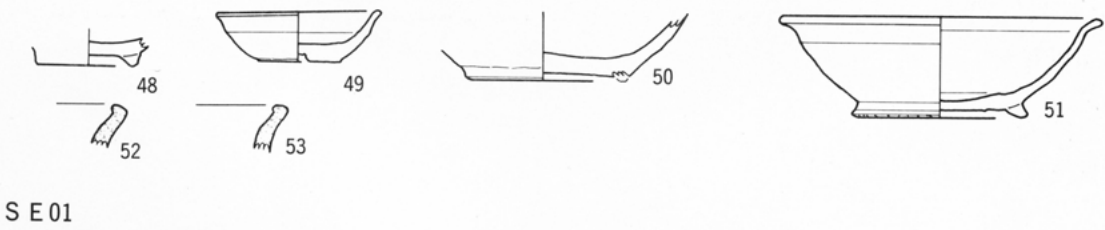
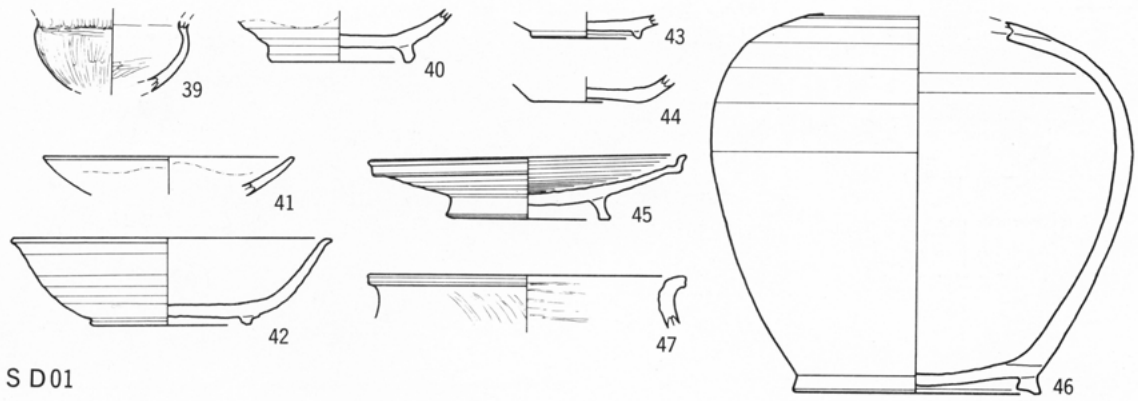
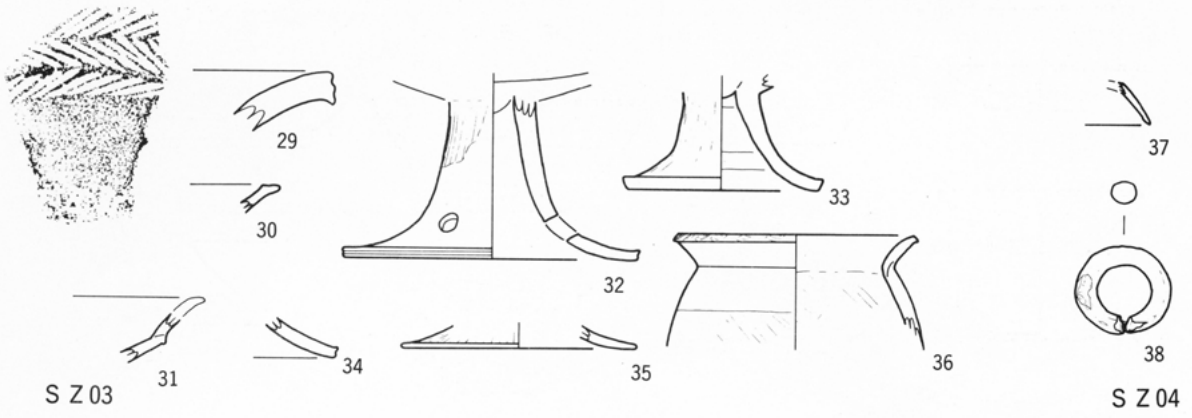


S Z 02

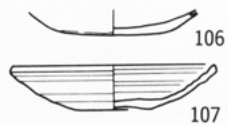
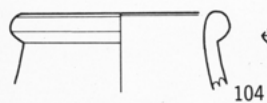
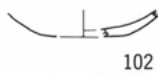
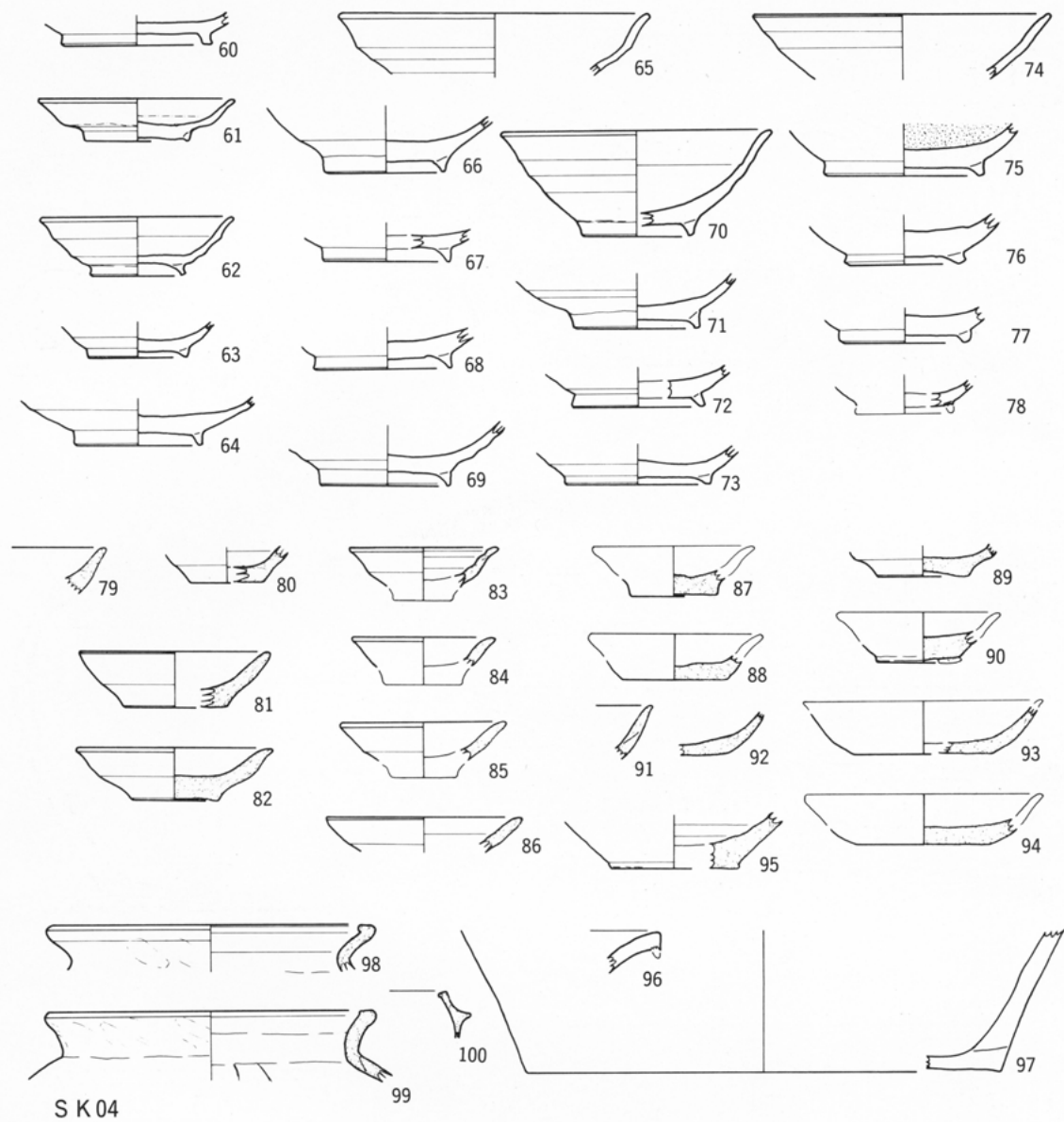


S Z 03

图版 7

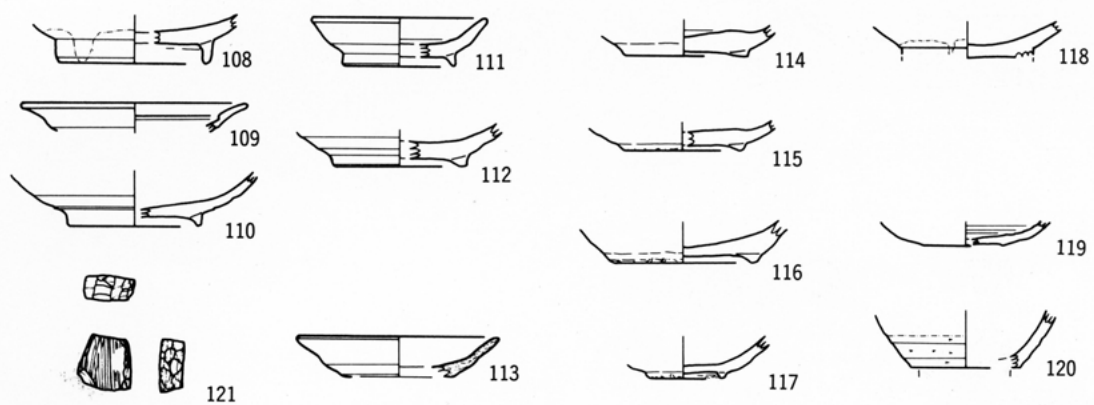


图版 8



S D 03

图版 9

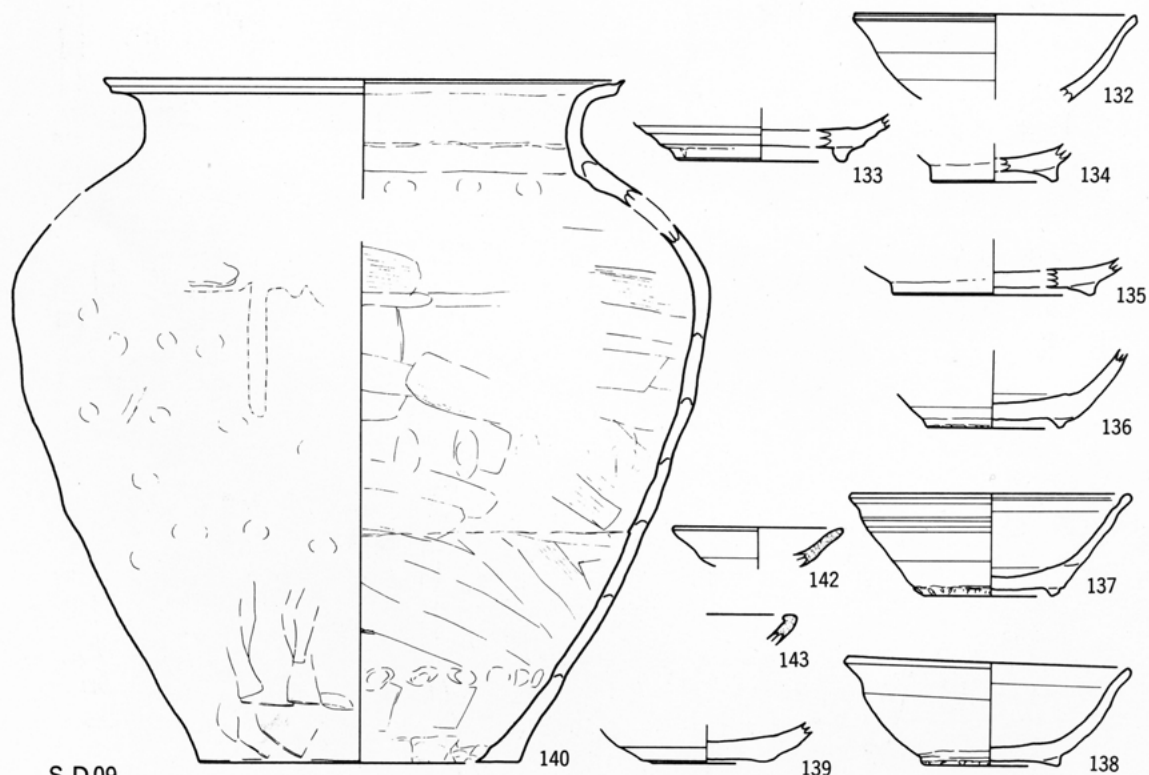
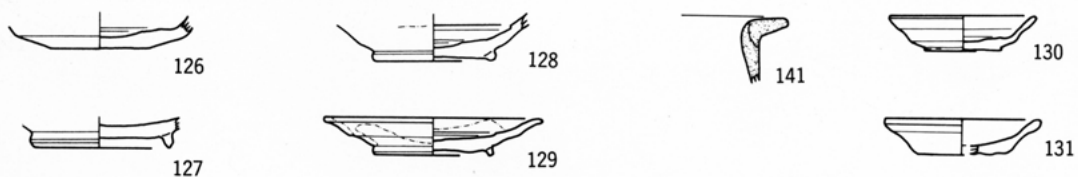


S D 05



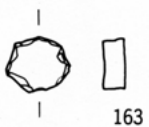
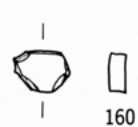
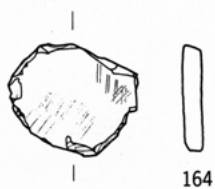
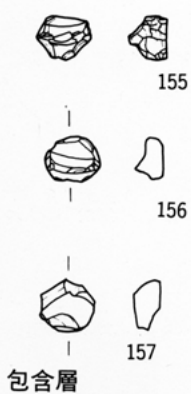
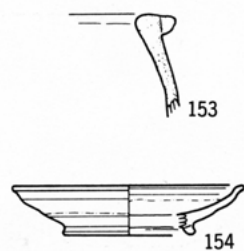
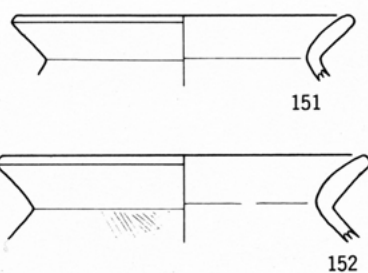
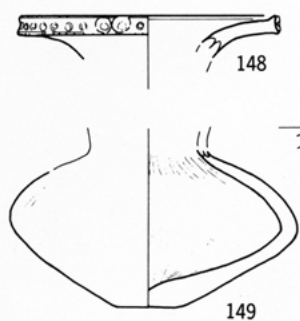
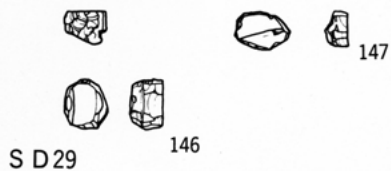
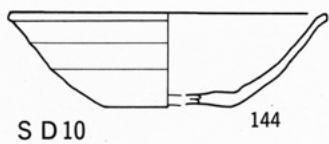
S D 06

S D 07



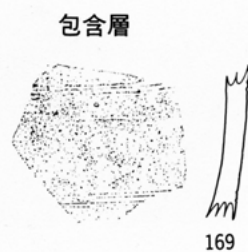
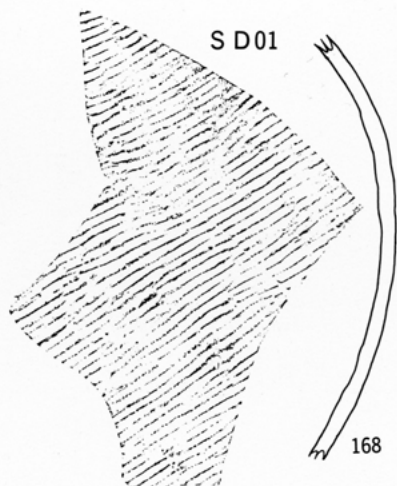
S D 09

图版10



包含層

(以上 1 : 4)



包含層

(1 : 3)



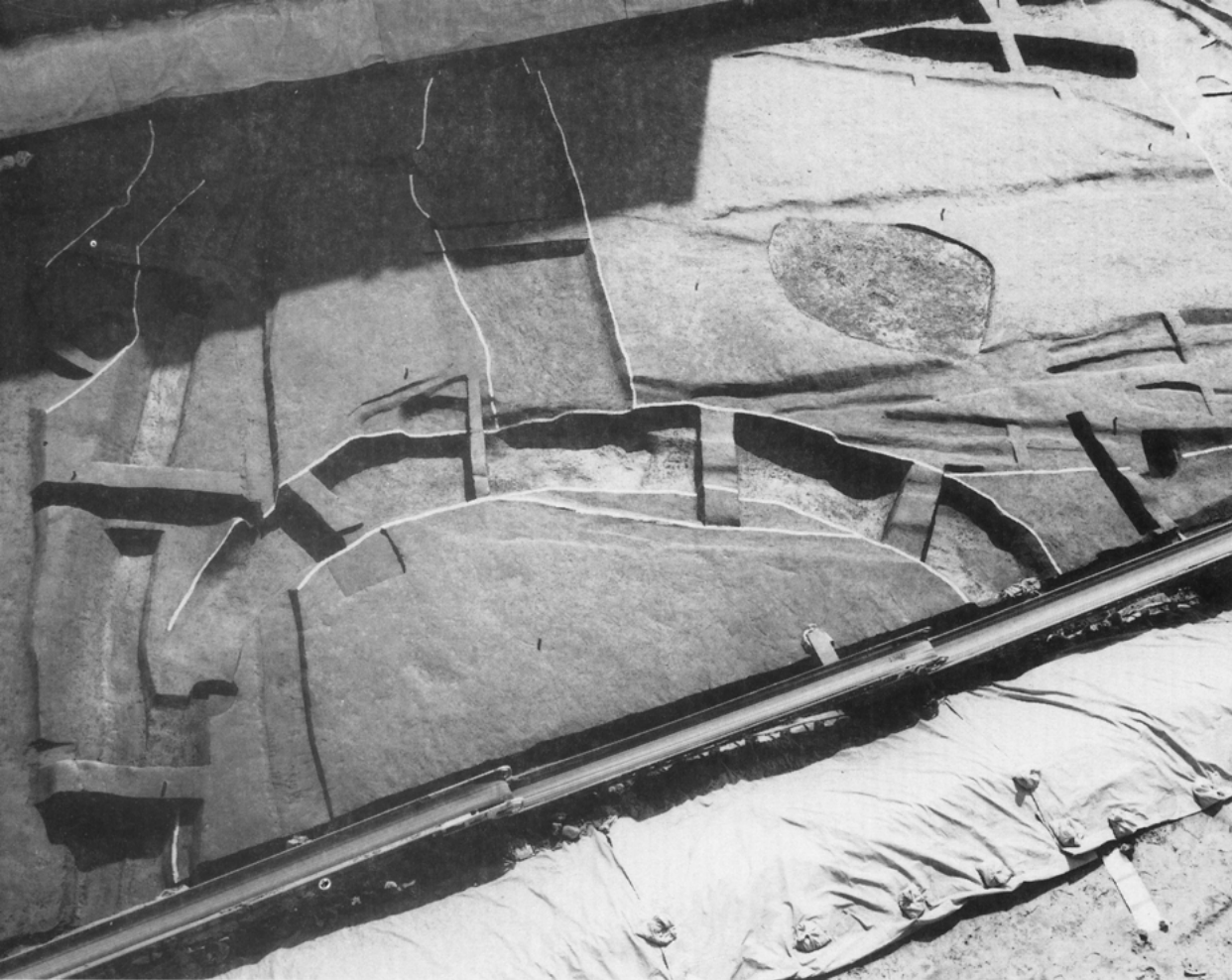
調査区全景



◀ 調査区西半部 SZ01と中世遺構群

SZ01全景 ▼





▲ S Z 02全景

▼ S Z 03全景





▲SZ03 遺物出土状態

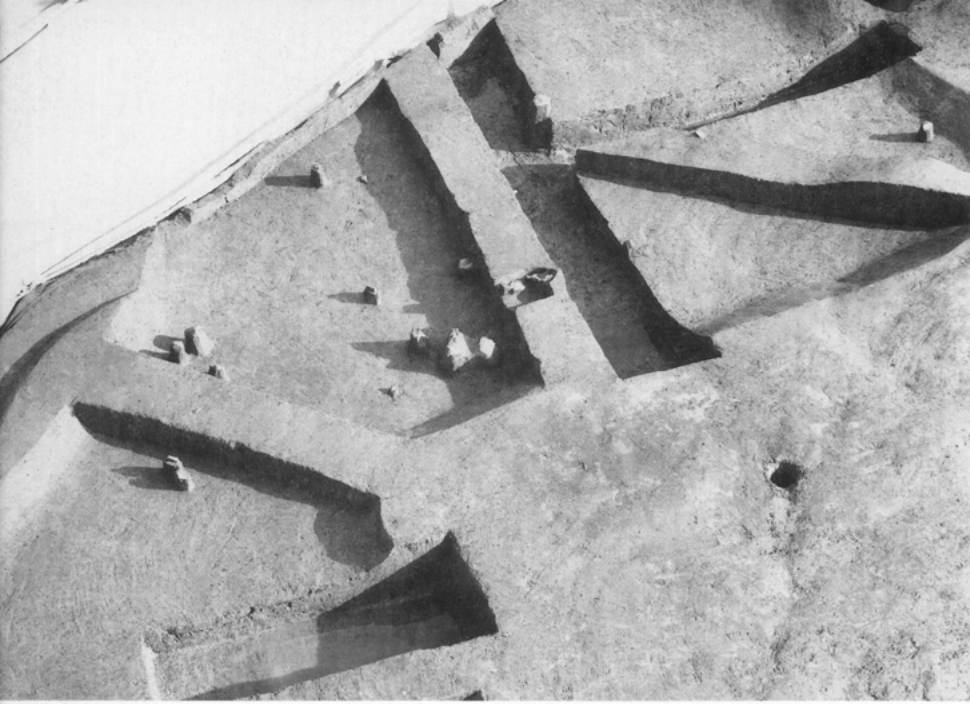


▶SZ03 南溝近景

▲SZ03 主体部



図版15



◀ S Z 0 3 北溝遺物出土状態



◀ S Z 0 3 大形壺(24) 出土状態

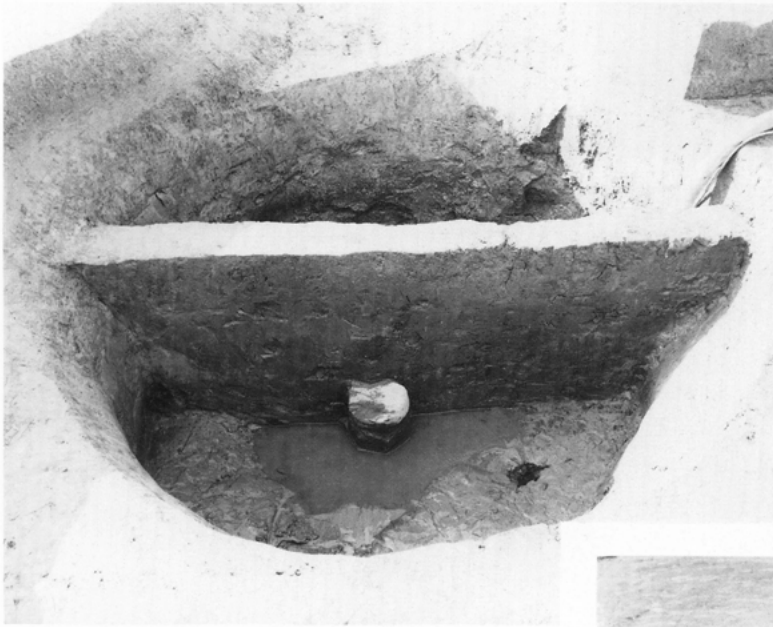


◀ S Z 0 3 小形壺(25・26) 出土状態

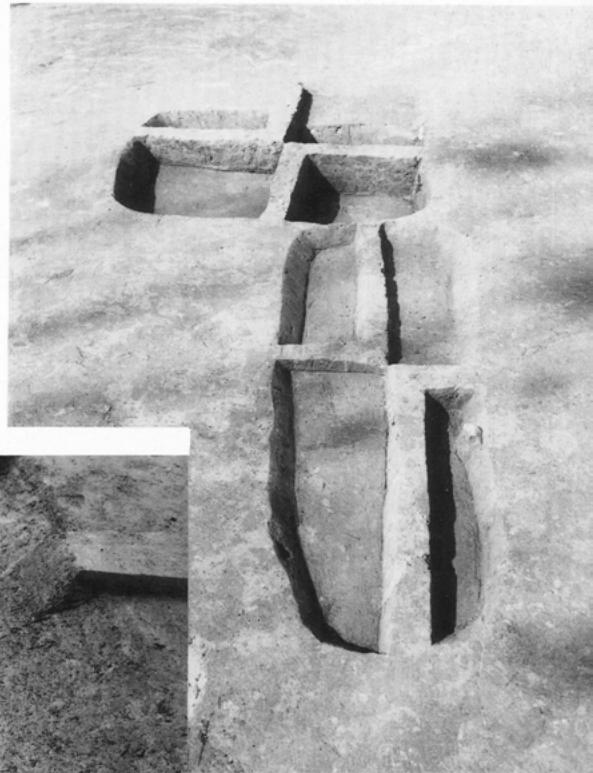
SD01遺物出土状態 ▶



SE01 ▼



SK01・SK02 ▶



SD03遺物出土状態 ▼

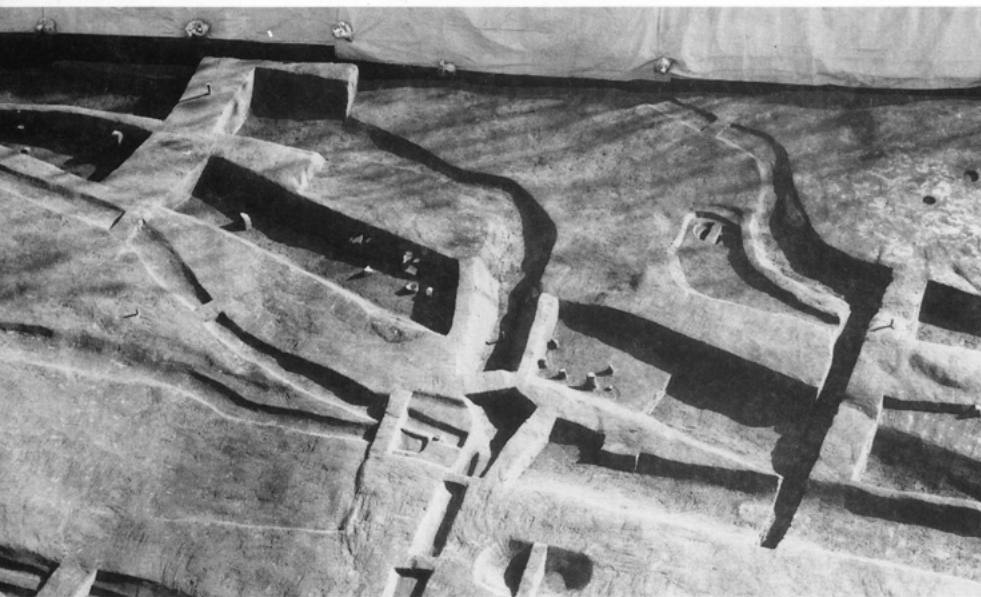


図版17

◀ 調査区西半部中世遺構群



◀ S D 0 5 ・ 0 9 交差付近



◀ S D 0 9 遺物出土状態





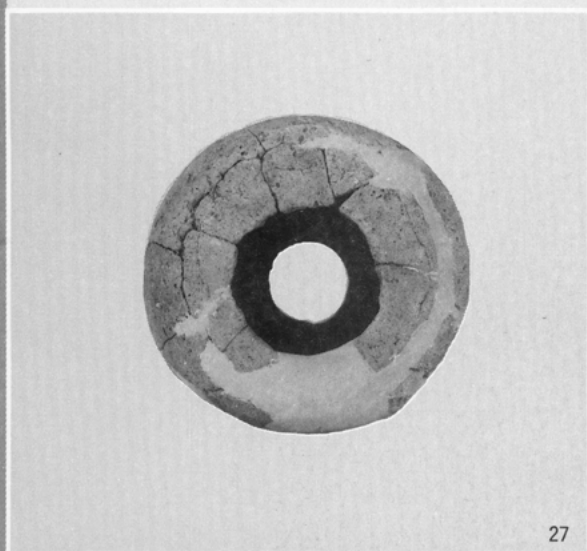
24



25



26



27



28



27



3



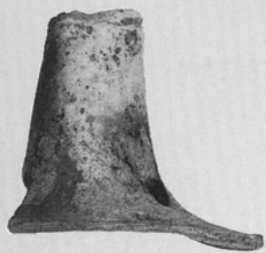
29



6



7



32



152



38



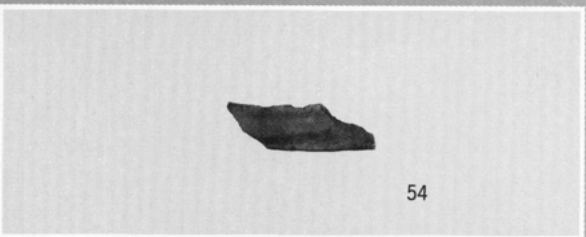
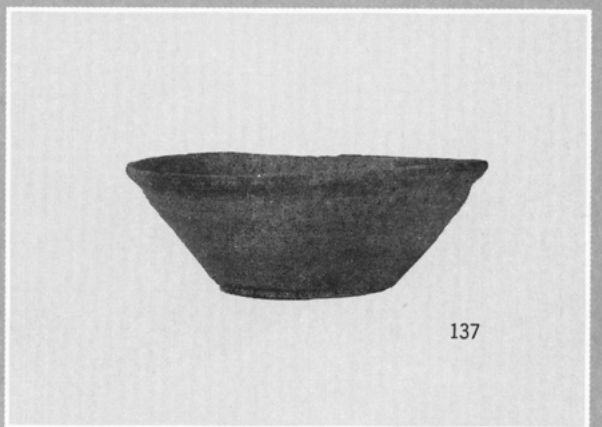
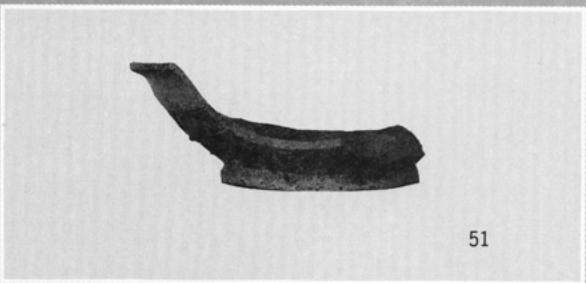
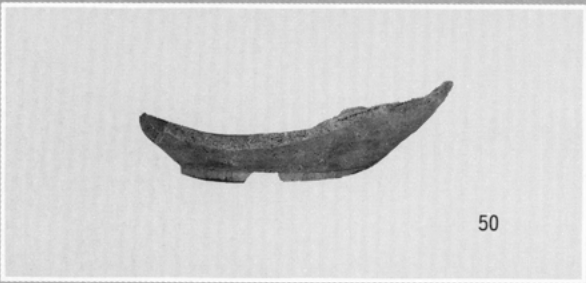
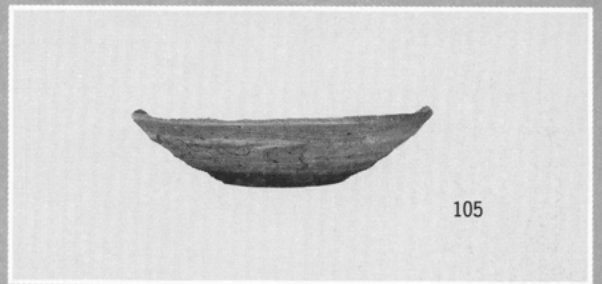
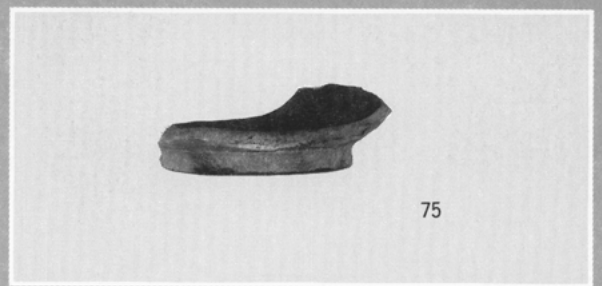
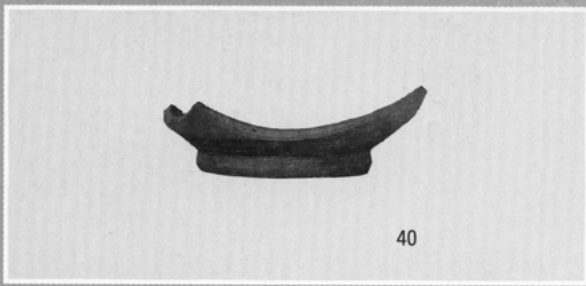
42



45

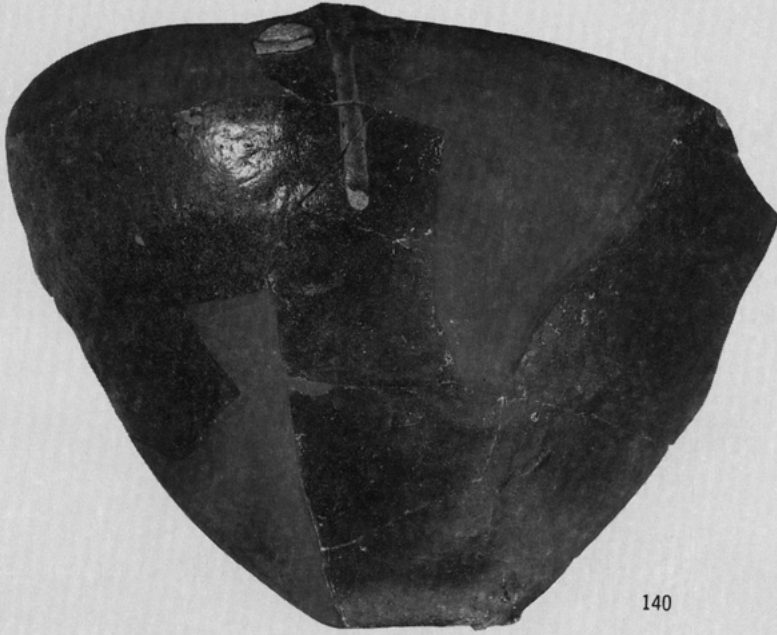


46





140



140



79



86



92



81



83



91



93



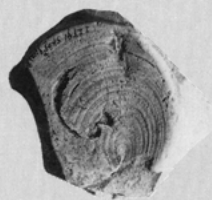
82



85

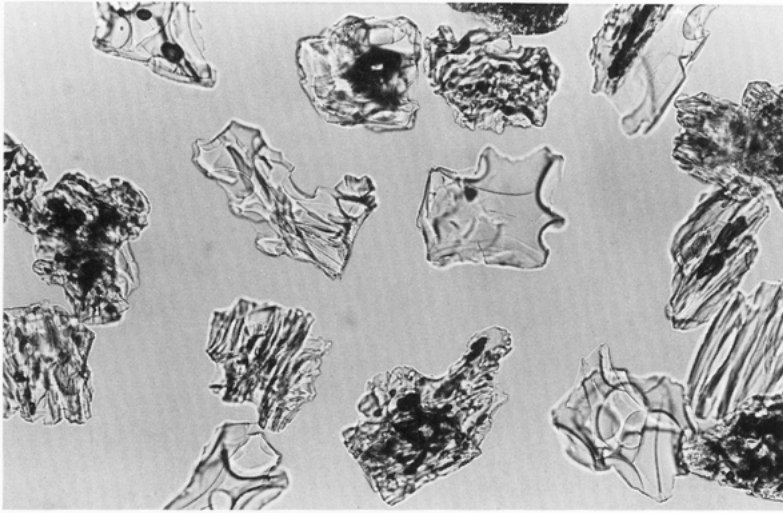


81



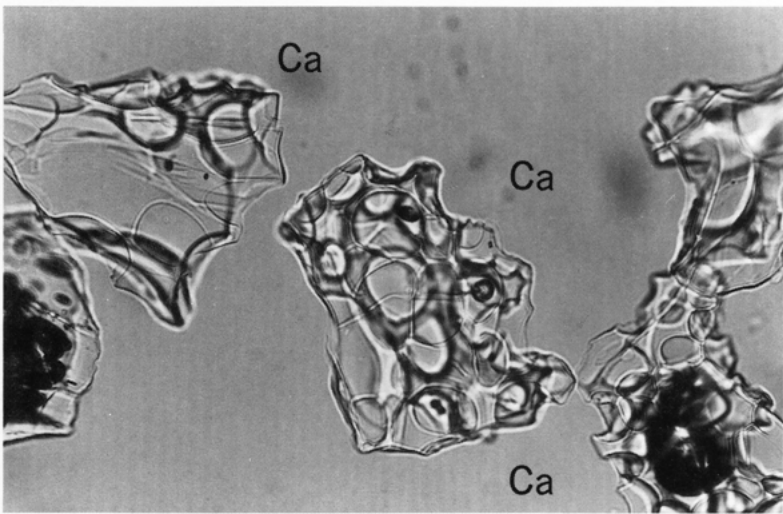
87

図版22. 火山灰の顕微鏡写真



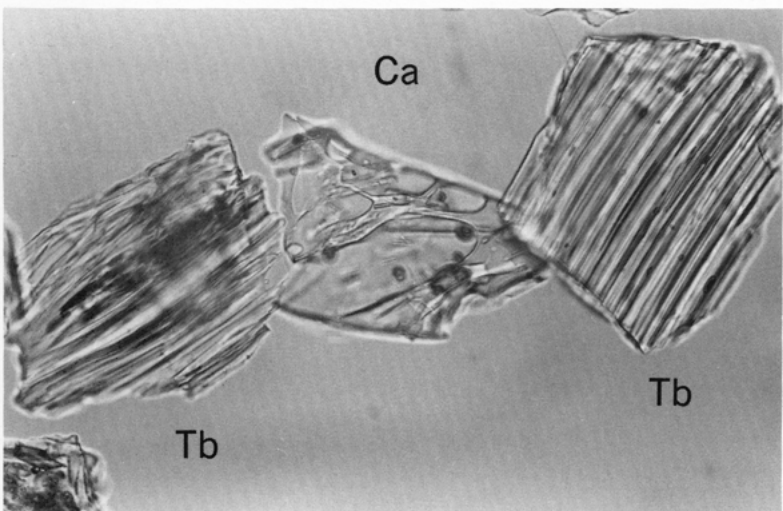
1 火山灰全体 (×100)

中間型と多孔質型の火山ガラスが多く見られる。



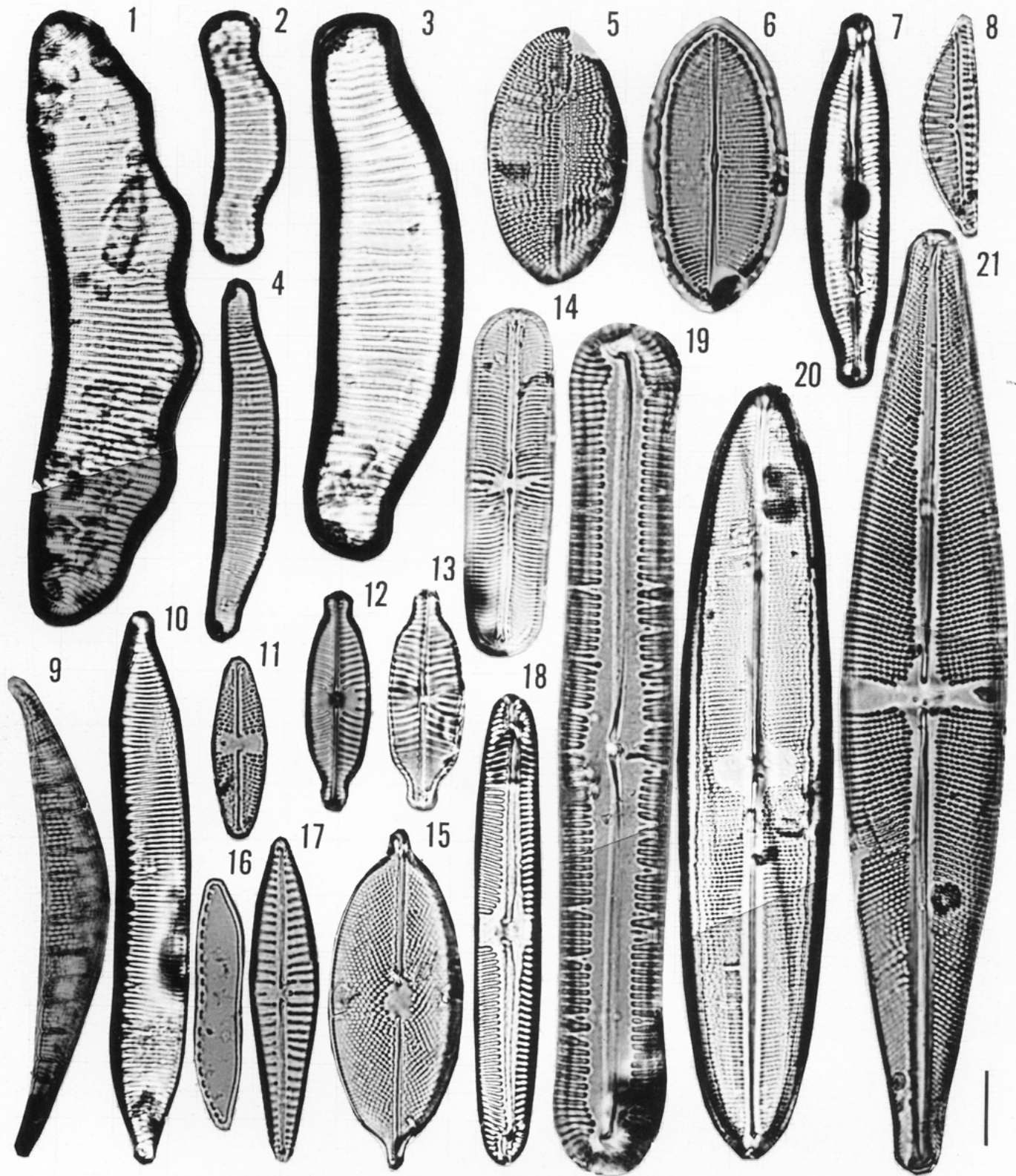
2 中間型 (Ca型) の火山ガラス (×150)

最も多く、特徴的に見られる火山ガラスである。

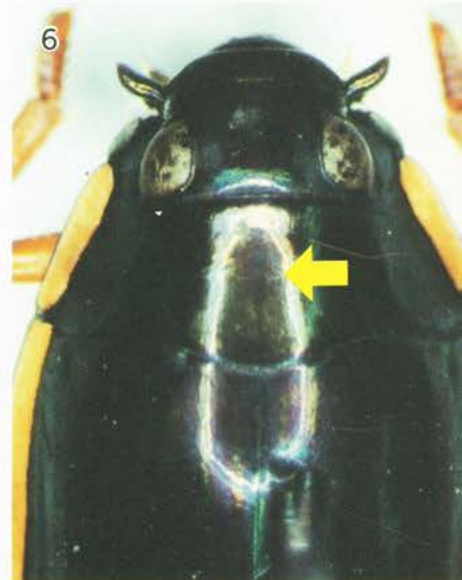


3 多孔質型 (Tb型) の火山ガラス (×150)

直線状の突起が平行に数多く見られるのが特徴である。

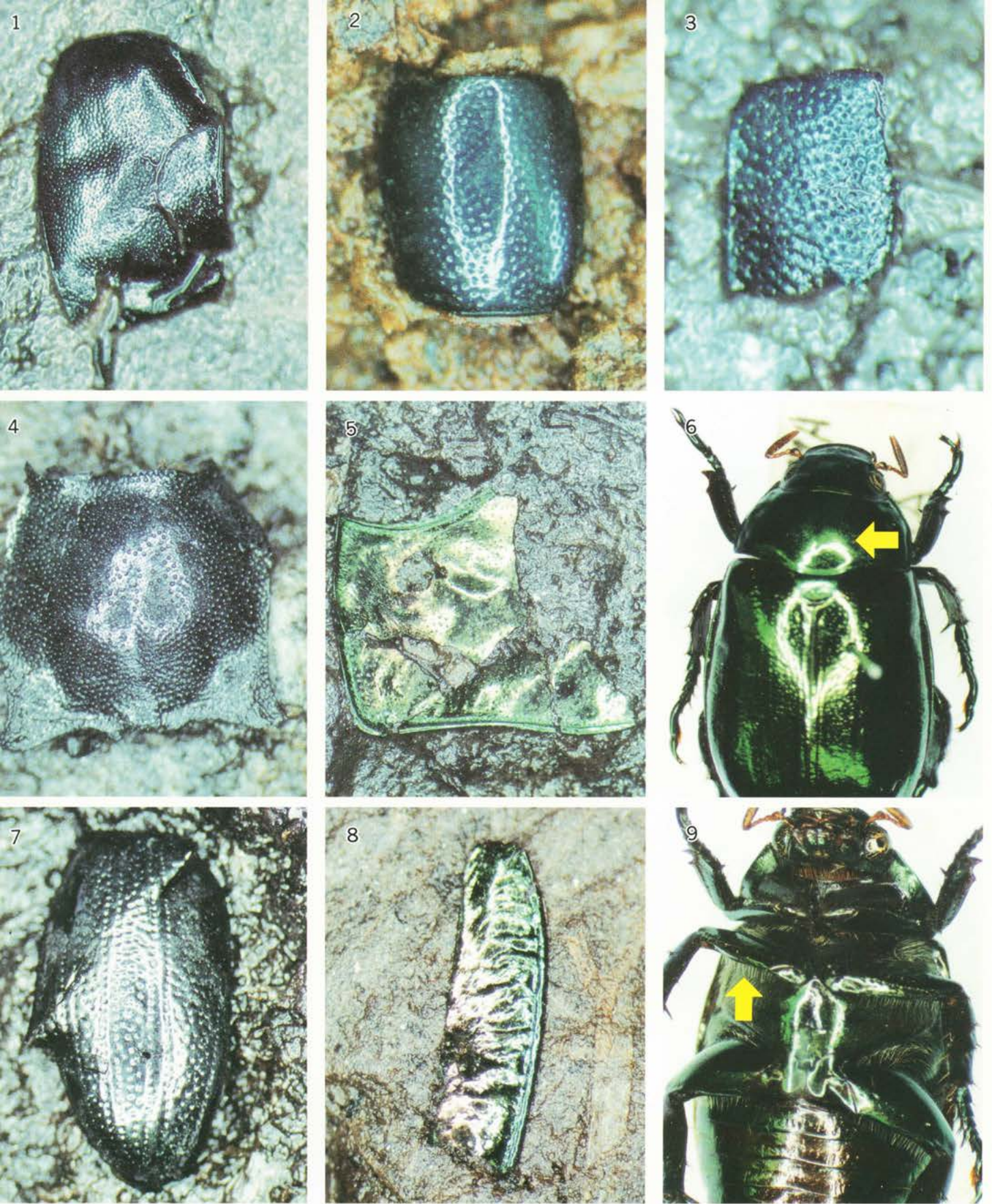


- | | |
|--|--|
| 1. <i>Eunotia robusta</i> Ralfs | 12. <i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralfs |
| 2. <i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg | 13. <i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.) Patrick |
| 3. <i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg | 14. <i>Navicula laevissima</i> Kützing |
| 4. <i>Eunotia pectinalis</i> (Kütz.) Rabenhorst | 15. <i>Navicula placenta</i> Ehrenberg |
| 5. <i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.) Cleve | 16. <i>Nitzschia obtusa</i> W. Smith |
| 6. <i>Cocconeis placentula</i> (Ehrenberg) | 17. <i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg |
| 7. <i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald | 18. <i>Pinnularia stomatophora</i> Grunow |
| 8. <i>Cymbella minuta</i> Hilse | 19. <i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg |
| 9. <i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller | 20. <i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve |
| 10. <i>Hantzschia ampyioxys</i> (Ehr.) Grunow | 21. <i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg |
| 11. <i>Navicula mutica</i> Kützing | (バースケールは10 μ m) |



図版24. 昆虫化石の顕微鏡写真(1)

1. セマルガムシ *Coelostoma stultum* (WALKER) 右鞘翅 長さ5.0mm
2. ガムシ *Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY 小楯板 長さ4.0mm
3. ガムシ *Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY 鞘翅片 長さ18.0mm
4. オオミズスマシ *Dineutus orientalis* MODEER 右鞘翅上半部 長さ4.2mm
5. オオミズスマシ *Dineutus orientalis* MODEER 前胸背板片 長さ1.6mm
6. オオミズスマシ *Dineutus orientalis* MODEER (現生標本)
7. ヤマトトクリゴミムシ *Lachnocrepis japonica* BATES 前胸背板 幅4.1mm
8. クロモリヒラタゴミムシ *Colpodes atricomis* BATES 前胸背板片 幅1.8mm
9. ゴミムシ科 HARPALIDAE 左右鞘翅上半部 長さ3.4mm



図版25. 昆虫化石の顕微鏡写真(2)

1. ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE 右鞘翅 長さ2.1mm
2. ハネカクシ科 STAPHYLINIDAE 前胸背板 幅1.2mm
3. アオバアリガタハネカクシ *Paedenus fuscipes* (CURTIS) 右鞘翅 長さ1.2mm
4. ホソサビキコリ *Agrypnus fuliginosus* (CANDEZE) 前胸背板 幅3.6mm
5. コガネムシ *Mimela splendens* GYLLENHAL 前胸背板左半部 幅5.0mm
6. コガネムシ *Mimela splendens* GYLLENHAL (現生標本)
7. ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* LEWIS 右鞘翅 長さ5.6mm
8. コガネムシ *Mimela splendens* GYLLENHAL 中腿節 長さ4.1mm
9. コガネムシ *Mimela splendens* GYLLENHAL (現生標本)

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45集

山 中 遺 跡 II

1993年3月31日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター
印 刷 西濃印刷株式会社